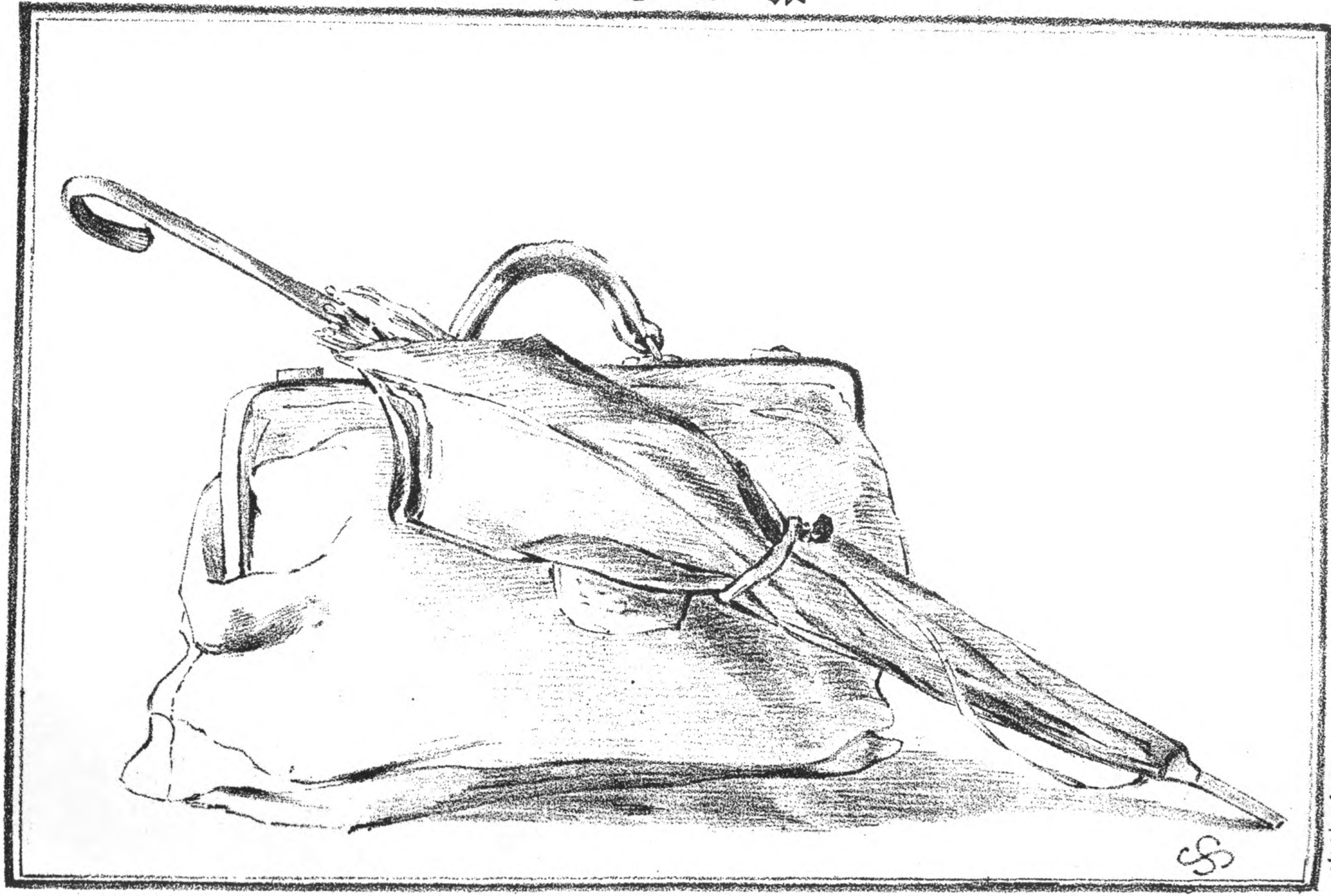
女子文壇

第二巻第拾貳號

明治卅九年九月一日發行（毎月両一日）
明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可



旅のそら



重松せい子女史筆

每號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二巻第拾貳號目次

女子文壇の廣告に依り御注文の節は其旨御書添を乞ふ

明治卅九年 改正内外

圖書目録

無代進呈

御入用の方は郵券二錢御送被下度候

及川泰治著
齋藤松洲畫
藤島武二畫
赤松鱗作畫

△三色原色版寫眞版木版
△細畫數十個挿入頗美本
△家庭用初等教科參考書

地理讀本

菊判總クロス
金文字繪畫入
定價金六拾錢
郵稅拾錢

科學を面白く書いて、むつかしい教科書に厭き果てたる現今の教育界に裨益するものが無かつたのは殘念であつた今此地理讀本は此欠陷を補はんが爲めに著者が多年の經驗に鑑みて地球の發達より天文、地文、地質學を始じめ地理學一般の智識を尤も平易の筆を以て談話體に書き綴りたる有益なる家庭の讀物である、子女の校外讀本として家庭教育の教材として又絶好の良書である、希くば子女教育に熱心なる教育家は勿論父母兄姉の一讀せられんことを

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著 增訂六版

文鑑 千草の錦

菊判和裝
定價金六拾錢
郵稅拾錢

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄錄せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生新作
華族女學校講師 小野鵞堂先生淨書

新編手紙

（男子用）

木版半紙摺
無類の美本
男女各一冊
定價四拾錢
郵稅四錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振がな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

木版半紙摺
頗高尚優美
男女各一冊
定價六拾錢
郵稅六錢

新編女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば、又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を揭げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六 前川文榮閣

東海道由井ヶ濱



三宅克己先生筆

小島工場石印

大日本女學會

●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に戴き鍋島侯爵夫人會長として會務を統監す●小學卒業後進んで高等女學校に入學し難き事情ある女子達は本會の通信敎授に依て家庭に居ながら必須の學科を修められよ●本會發行の講義錄は高等女學校の科目よりも一層多數の諸學科を網羅し第一流の名家を擇びて講義を囑托せるものなり●本會は高等簡易の兩科を設け女子素養の程度に應ぜしむ月謝は高等科四拾錢簡易科二十錢とす目下入會に都合よし會則は葉書か電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事衞生（同上）○小兒衞生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌なでしこ

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下入會の好時機

東京市麴町區下二番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三二〇

女子文壇第三定期增刊

八月十五日發行

石版極彩色（口繪）＝月光（璚木清方君筆）

寫眞 ○秋草○富士の溪流○水車○蝦釣り
色刷 ○拾小舟○山村の溪流○怒濤○安岳
口繪 濱邊の夕景○海苔とり舟○漁村

をみなへし月

○男郎花、女郎花……………河井醉茗
○詩文を作る心得……………記者

○論文○叙事文○抒情文○消息文○短篇小説○新體詩○和歌○俳句○はがき文○新歌謠○新笑話○圖書

（大判六頁）大判百廿四頁 定價拾錢

◎附錄 文藝雜感（秋の卷）

○女郎花○秋草○秋の七草○星の美○西洋の女○子規の八月十四日○女郎花の俳句○女の富士山記○月の神話○京女○紅葉の句○『落葉』の詩○短き譯詩

其他例號の如く懸賞文滿載

下半季發行の第九、第十號とも發行旬日を出てす忽ち賣切の盛況なれば後れて注文あるも増刷は出來ません

東京 女子文壇社發賣部



笛の稽古

（英國ゼームス、サント氏筆）

日本女子大學校長
成瀬仁藏君

淑德女學校長
黑田眞洞君



東京高等女學校長
棚橋絢子君

實踐女學校長
下田歌子君

東京女醫學校長
鷲山彌生君

阿波徳島市の誌友



廣石わき子君
堀井とよ子君



奥村つる子君
懷野つた子君
秋月きく子君



(後列向て右より)藤村雪子君、廣木花子君、曾木つき子君、三村はぎ子君
(前列向て右より)谷たき子君、役野きみ子君、中懐靜子君

誌友おもかげ（其十）


（武藏）佐久間白菫子君


（大和）辻　直　子君


（美濃）木村佐以子君


（筑前）空野ふく子君、牛田つる子君


（長門）吉母はる子君、菅谷まさよ君


（羽前）佐藤うめの君、下山よし子君


（武藏）小川春子君


（攝津）森井せい子君


（薩摩）木佐木ます子君

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑ ム子スカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ 輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割増し

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき斯世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）



第二巻第拾貳號

九月一日發行
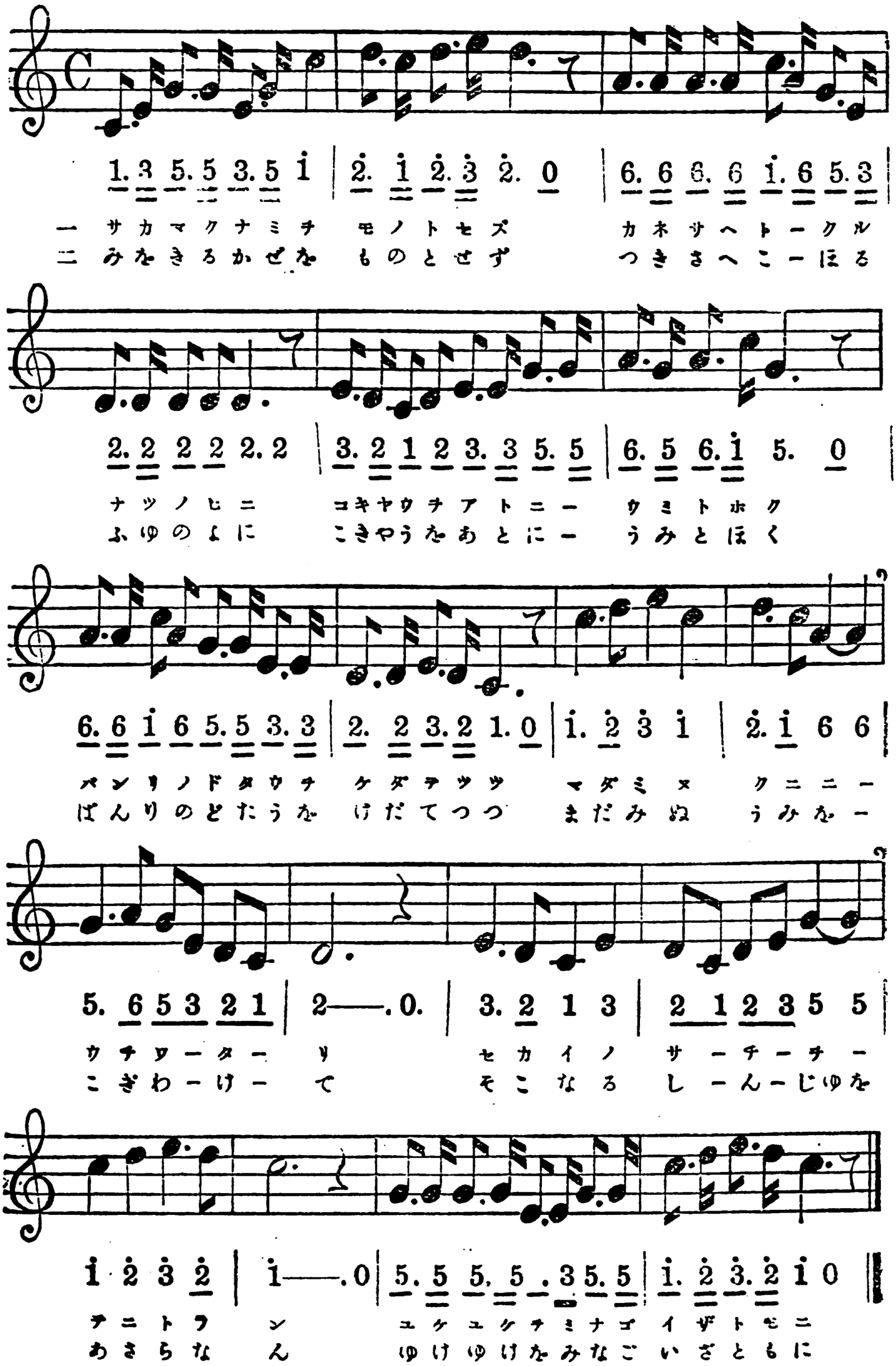


新學期に入る

節は秋に入り、學校は新しい學年が始るので、歸省して居られた女學生諸孃は東京に入らつしやるでせうし、新らしく遊學に志された少女諸君は、初めて東京を見られるでせう。新學期の始に世間から女學生に忠告する辭も、校長が新級生に注意する辭も、毎年別に變つた事もありますまいが、諸孃は新しい意氣を持つて、學期の始を迎へられる事と思ひます。女學生諸君は正しく世間から尊敬を以て迎へられる筈であるのに、過つて輕佻浮薄の名を取り、墮落の標本の如く思はれるのは如何にも心外でありませんか、是等の噂も新學期と共に、さらりと水に流して了ひ、もつと諸孃の體面を高めるやうな問題を作りたいものです。それには諸孃が一生懸命に學事に勉強し、傍ら品性を練る爲に文藝の修養を努められる事をお勸めする外はありません。一學期進んで、教科書がむつかしくなり、學科目が多くなつたからとて、諸孃はえらくなつたと思はれたら間違ひです、社會の活きた教科書は益すむつかしくなり、習ふべき科目は愈よ増加する許りで、諸孃は何處迄もえらくならなければならないので、一學級進んだのは僅に一歩進んだのです、前途や甚だ遠い、幸に勇氣と自重とを以て此學期もお勵みなさい。

海國女子

ハ調　四分ノ四拍子

快活に



海國女子

小森松風作歌
高井鳳南作曲

〇第一章

逆巻く浪を、物とせず、
故郷をあとに、海洋遠く、
まだ見ぬ國に、うち渡り、
ゆけ〳〵をみなど、いざ共に。

金さへ溶くる、夏の日に、
萬里の怒濤を、蹴立てつゝ、
世界の幸を、手に取らん。

〇第二章

身をきる風を、物とせず、
故郷をあとに、海洋遠く、
まだ見ぬ洋を、こぎ分けて、
ゆけ〳〵をみなご、いざ共に。

月さへ凍る、冬の夜に、
萬里の怒濤を、蹴立てつゝ、
底なる眞珠を、あさらなん。

學校時代の婦人に望む

羽仁もと子

女學生の成功と不成功……失敗したる人の實際談……學校の選擇……卒業後の身のふり方……女子自活の困難……結婚と戀愛

我こそは故郷に錦をかざらうと、年々東京に出て來られる澤山の女學生の中に、成功する人も多い代りに、不成功に終る人もまたなかなかに澤山でありませう。眞實學問する心でも何でもなく、名ばかりの女學生で、女學生の墮落などといふ評判を造り出すもとになるやうな人は姑く措いて、眞面目に志をたてゝ出て來られた方々でも、その注意の足らざるために、とかく成功の途に遠かり、自然都會の惡い方にのみ向いて行くのを、徒らに成功する人を羨んで運だなどゝ嘆いてゐる方も少くないのは、殘念でもありまた氣の毒にも思はれることであります、此種の人を見聞きする度に感じてゐた事柄を一つ二つ申し上げませう。

或人はまづ第一に學校の選擇を過りました。東京に出たならば一心不亂に勉强して、二三年の間には見違へるやうな人になつて歸らうと思つてゐたのが、敎へ導いてくれる肝腎の學校が、少しも熱心に生徒の敎育に骨折る譯でなく、萬事が商賣的で、生徒の機嫌を取ることや、世間の人氣に投ずる所の方法にのみ汲々としてゐるといふ風で、地方の學校に居た時よりは、却て勉强が出來ませぬゆゑ、ひどく失望して、種々に煩悶します。そして意志の弱い人は、いつの間にやら故郷を出る時の誓を忘れて、眞面目に勉强するよりは、いつそ皆と氣樂に遊んでゐる方がよいといふやうな氣になつて仕舞ひます。またそれ程までに薄弱でない人は、思案の果てに學校を取換へるのが普通です。幸にして云ひ分なしの學校にはいれたならば仕合せでありますが、これこそと思ふ學校は少いのでありますゆ

ゑ、一度不眞面目な學校に入學して、東京の學校や敎師のあらを見なれた目には、また〳〵今度の學校の缺點も、人一倍目に入つて同じやうに、慊足らぬ思ひになります、今度は充分に規律正しい學校へと思ひますけれど、さやうの學校は中途からの入學を許さないといふやうな事情などもありますし、年中學校に氣を揉んで、彼方に此方にかはる間に半年一年と損をしていつになつても卒業の時がなくなるといふやうな人もあり、ヤツとの事で卒業した學校は、その最初より入學した中で、一番下らぬ學校で、いつそ初めの學校に堪へてゐた方がましてあつたのにと誰れにても思はるゝやうなこともあります、いつまで經つても卒業の出來ない人は元より、こういふ風に自ら下らぬと思ふやうな學校を卒業して、自分の身に得た所は、實際何もないといふやうな人達は、多く故鄕に歸るのが氣に進まぬといふやうな感情から、自然東京で自活のみちを求めるといふことになりますが、立派な學校を卒業してすら、餘つてゐる人の多い中に、そういふ人達に何てよい働き場所がありませう。學校時代が思ひ通りに行かなかつた人たちは、仕事を探がす方面にも失望して、種々に苦勞した揚句が、俗にいふすれつからしともいふべきやうな婦人になつて、眞面目に大人しく家を持つて行くのにも向きてなし、それかと云つて、立派に獨りで生活をするだけの方法もつきかねるといふやうな都合になつて、落ち行く先きが、矢張り世にすれた輕薄な男子と結婚するといふやうになる向きもあります。

また或人は學校時代は最も無事に經過して、學問なり技藝なり兎にも角にも一廉の學校を卒業した上て、身の振り方に細かな分別を缺いたゝめに、矢張いつまでも適當な落ち着き場所を見出しかねてゐるのです。あい位置を求め過ぎて、なか〳〵に見當らず、二年と經ち三年と經つ間に、フトよさゝうな話が始まると、此方は充分に乘氣になつても、賴む方では、二三年前に學校を出たきりて、少しも仕事に經驗のない人だとい

ふのを聞くとまづ躊躇してゐる中に、競爭者が現はれて、それが仕事に經驗を持つてゐる人ですと、卒業した學校は少しは劣つても矢張その方にきめられるといふやうな風になります。さてその後は年來の抱負をすてゝ、ドンナ仕事でも、ドンナに少しの給料でもと探がすやうになるのでありますが、頼む方では左まで學力がなくつて、間に合う仕事ならば、なにも何々學校の卒業生などゝ、心の底では澄ましてゐるやうな人でなくつてもといふやうなことで不遇と云へば不遇でありますが、ツマリ自分の初めに取つた方針の惡るかつたゝめに窮地に陷つて來るのであります。また幸にして卒業後間もなく仕事に從事することが出來た人て、兎角一つ所に落ちつかぬ人があります、他人に雇はれるとかまた上の人の支配をうけるとかいふ中には、いづれも多少樂しからぬ事もありませうし、また仕事と云ふ事は、ドンナ仕事でも可成に苦しいものです、それてありますのに、少々の不愉快のためにコンナ所なら何所にてもあるといふやうな氣になつて、別の方にかはるとか、或はモー少し骨の折れない仕事もあらうと云ふやうな氣になつて、仕事の種類を取り換へるのて幾年經つても、何の仕事にも充分な經驗を持つことが出來ませぬゆゑ、いつでも學校を出た當坐と同じことで位置も上らず收入もふえないといふ人もあります。また職業を探がす心のない人て、唯一日も早くと嫁き先のあることばかりを待つてゐるといふ人もありますが、これも不幸にして、すぐに縁談のない時は、何となく心の落ちつかぬために、これといふ勉强も出來ず、うか〳〵年月を過して仕舞つて、さてこうしてゐるよりはと、始めて仕事を探がしにかゝる向もありますが、斯ういふ人には猶更適當な仕事が少いやうに思ひます、信用のある學校を卒業したからと云つて、それで必ず身のおさまりがつくものだと考へておゐてになつては違います、とかく學校を卒業して、是ぞといふ責任もなく、樣々の事を思ひ煩らひつゝふら〳〵としてゐる時代には、身のためにならぬ戀愛などに陷りやすく、學校時代を折角滿足に仕終うせて置き

ながら閑に任して空想を逞くした結果、可惜生涯をまゝならぬ境遇の中に葬るやうなことになり、教育のあるだけに人一倍の苦痛を感ぜねばならぬ事になります。

私はくれ〴〵も一片の規則書を見ただけで（私の知つてゐる限りに於ては、學校の選擇を過つたのは、多く故郷で所々の學校の規則書などを取寄せて見くらべてこれがよさゝうだなどゝ、ひとりで定めて出て來られた方に多いのです）、自分の入學する學校を定めるやうなことをせず、つてを求めてその向に明るい人に、自分の志す所を充分に打明けて、それにはどういふ學校がよいであらうかと尋ねた上で定めるやうにしたいと思ひます。また已に充分に聞き質してよいと思つて入學した學校ならば、いづれ充分によい學校の至つて乏しい今日のことでありますから、悉く滿足といふことは出來ないでせうけれど、同じ樣な學校を移りまわるよりは、矢張一所に辛棒して、ドンナ學校にても一人二人の眞面目に熱心な先生や、頼母しい友達のない所は少いのでありますから、さういふ人達を頼りにして、一心に勉强をする方が得策です、さうして卒業したならば、地方の方は成るべく直に歸國して、家事の手傳へをし、よき機會と暇があるならば、地方の學校にても眞面目に從事して見るといふやうにする方が、普通の人には、最も安全でもあり、また實際社會のためにも家のためにもなることであらうと思ます、學校でも卒業すると、一廉の人物にでもなつた氣で、多く東京に留つて、自活しながら、この上の勉强をしたいといふやうな氣になるのが十中八九といつてもよい程でありますが、それは云ふまでもなく間違ひです、女學校を卒業したのは、當節の女一通の仕込みを終へたので、それから實社會の經驗をした上で、初めて一人の並の婦人になるといふ、實はまだ一人前にも成つてゐないのでありますから、決して少しも大したものになつたのでも何でもありません、特別なる天才を有つてゐる人でない限り、矢張皆さんのお母樣が、謙遜なる地方の家庭の一主婦であるやうに、國に歸つ

て家をなすといふのが、今の若き婦人のなすべき最も穩かにして聰明な仕方です。しかもいつになつてあるやらないやら分らぬ所の緣談を安閑と待ち暮らして、なすこともなくしてゐるのが、第一人としての日々の義務にも背き、且つ前にも云つたやうに、閑な時には兎角種々の禍が起りますゆゑ、之といふ仕事がなければ、まめやかに女中代りの臺所働きでもするといふ位に、一日でも無駄な日を送らぬ工夫がこの時代にある人に最も大切なことであります、嫁くまでに職業に從事することの好都合である人は、餘りに高きを望まずに、初めは極く謙遜な考で仕事を探すのでありますが、それでもなか〳〵に得にくいのでありますから、矢張手を空くして緣談を待つやうに、うか〳〵と仕事のあるのを待つてゐるといふやうなことなしに、まづ自分の家の女中の仕事を引受けて、兎に角一つの責任を持つて、その日々を成るたけ有益に健全に送るといふ工夫をしなければなりません。その中思ふ仕事が得られましたなら、人の下につく仕事には、多少の氣まづさと、仕事といふ仕事には骨折がついてまわるものだと覺悟して、さういふことは氣にせずに、どこまでも自分の責任としてあてがはれたことを、少してもよくしやうよくしやうといふことに一心になつてゐると、自ら世間からも認められ、追々自分の才能ものびるやうになつて來るのです。それまでに仕上げると、他人に對して愛情の成立つた場合には結婚するし、さうでなければ一人でも暮らせるといふ自信も出て來ますから、不健全な戀愛に陷るといふやうな危險も餘程少くなるのであります。くれ〳〵も學校におはいりにならうといふ方々は、その選擇を輕卒になさらぬやう、また已に學校に居らるゝ方は、學校に對して二心のないやうに、唯一筋に勉强すること、卒業なさつた方々は、一日でもこれぞといふ用のない日を持つてはならぬといふことが大切であると思ひます。近來各女學校の卒業生の所を得ぬ人の多いのは、實に豫想の外でありますから、切に皆樣の御注意を希ふの次第であります。

短歌評釋（一）

窪田通治

▲ホンの慰みにまで歌を作つて見やうと思つて手を附けた人でも、扨て手を附けて見ると少しは上手に作らなければ面白味が薄い、せめて自分の感じたことに似てゐる位の所までは云つて見なければ滿らない、所が之れが思ひの外容易ではない、容易ではないが我慢して爲る、すると、何時の間にか此苦勞が亦一種の面白味のあることに成つてしまふ、斯ういふのが多くの人の經驗であるらしい。

▲兎に角歌を作らうと思ふと同時に作歌の稽古といふことは必要に感じられます。

▲作歌の稽古は云ふまでもなく多く作り多く讀むことです、一方では苟くも自分の感じたことは、決して感じつぱなしにしなくて歌にする。それと共に一方では、他人の作を讀んで見て、自分には見えない詩境を見せてもらふ、其想と辭との工合を考へて見るなどと云ふこともあるのです。

▲他人の作を見るといふことには、幾多の方法があります、例へば此作者は中心何ういふ觀念を持つてゐる人だらうと云ふことを、幾つかの作を通して窺つて見る人もあります。此作者と他の作者との相違する所は何所だらう、又何ういふ關係があるだらうと思つて見ることもあります、併し此所では然ういふ理窟ぽい方法は避けて、一首〳〵に就いて其面白味を味ひ、其想と辭と何ういふ工合に調和されてゐるかと云ふことだけを見やうと思ひます。

* * * *

▲第一に見やうと思ふのは太田みづほのやの歌で、昨年の春出版になつた「山上湖上」といふ集の中にあるものです。

▲此所で一寸云つて置きたいのは、作者には各自の作風と云ものがあります、例へば或景色を見て興を起したとして、其景色によつて起した此方の心持だけを歌

はうとする人もあれば、それは第二にして見た景色だけを歌はうとする人もある、又心技を歌ふ方にも、唯面白と思つたゞけでは滿足せず、其面白い所以までも考へて見て歌はうとする人もあり、景色を歌ふ方にも其景色はやがて自分の心の姿であるとして歌はうとするなど、數へるに煩雜い程ある、所で此作者の作風は自然の景色に對して面白いと感じたことだけを歌はうと云ふにあるらしいのです。

＊＊　＊＊　＊＊　＊＊

▲初秋の唄　田舍の野に近い家に住んでゐた、或朝夙く起きて戸を開けて見ると、秋の氣は水のやうに澄んで氣も蕭然する、見る程の物も悉く秋の姿に成つてゐるが、殊に此頃まで華美に咲いてゐた朝顏の花が小さく成つて了つたのが寂しく感じられる、それを見てゐると、野の鳥が寂しく人懷かしくても思ふのか、つい眼の先の垣根をくゞつて庭口へ入つて來て、其所で澄んだ聲をして鳴いてゐる。作者は斯ういふ所を描いて次のやうに歌つてゐる。

朝顏は小さく咲きて明け方の透垣くゞる秋鳥の
　こゑ

▲秋の夕暮、野に立つてゐた、秋のあはれは夕暮にある、つるべ落しと云はれる日は、ぱつと紅く成つたかと思ふと、最う向ひの山に沈もうとする、眼を移すと、自分の前の河原の、川下かけて生ひ茂つてゐる蓬にそよ／＼と、秋風が吹起つて、其葉を飜してゐる。作者は斯うした景色を歌つて、

向いをに夕日かぎろひ眼もはるの河原蓬に秋風
　なびく

と云つてゐる。序に、向いをと云ふのは古語で向ひの峯といふこと、「眼もはる」も古語で眼も遙かにと云ふことである、古語を使ふと云ふことは大體としては好ましくないことだが、斯うした境を描くには素朴な古語の方が適して居るやうに感じられる。

▲田舍に住んだことのある人は玉蜀黍を知つてゐる、よく脊戸の畑になど栽ゑてある物だが、彼の玉蜀黍の廣い葉が互ひに觸合つて、ざは／＼と音を立てるのは一

種佗しい感じを起させる、作者の聞いたのは、空が澄んで何となく秋の氣色を覺へる夕、颯と肌寒い風が吹き起つて、それが玉蜀黍の葉の上をさら〳〵と渡つて行く音だつたらしい。斯うした音は、何の音よりも秋の音に聞えたてあらう。

　玉蜀黍の廣葉がうれをなびかして今宵ぞ吹ける
　初秋の風、

▲月明き夜、虫の聲を聽ながら椽に端居してゐると、頻りに遠くゐる一人の人が思はれる、其人の家も此樣に月が照つてゐやう、虫も家をめぐつて鳴てゐやうと想ひやつた。作者は歌つて、

　秋虫は月がてらせる面かげのひとりが宿をめぐ
　りて鳴くらむ

と云つてゐる、云ひ方の如何にも婉曲なのが面白く、思はず微笑される。「面かげのひとり」と云ふのは、我が面影に立つ一人の人の意である。

▲門に一本の青柳があり。枝を長く垂れてゐる。春の日、何の思ふ所もなく、心長閑にそれを眺めてゐた。すると有るか無きかの風がそよ〳〵と吹いて來て、柳の枝が搖ぎつ、靡きつする、その動くのを見ると、何と云ふ理由もなく自分の心も嬉しくなつて來る、そしてそれと共に胸に思つてゐる人のとも思出して、彼の人は今頃は夢を見て、可愛い蝶でも夢みてゐるだらう、あゝ其蝶が舞つて來て此柳に弄られゝばよいにと思つた、作者は其心を斯う歌つた。

　わが門の一本柳風うごく君が夢なる蝶よ舞ひ來
　よ

取立てゝ此所がとは云はれないが、微かに靜かな面白味のある歌だと思ふ。

▲晩秋の夜、月光のさやかなのに誘はれて杜の中へ入いて行つた。落葉樹は悉く落葉して幹と枝ばかり、月光は障るものがないので何所までも照してゐる。此中に立つて月光と自分と相對してゐると、氣が澄んで、何となく一種の安心を覺えた、そして偶と夏、青葉の繁合つてゐた頃、聲を立てると聲に應じて答へ、默つてゐれば頻りに騷いだ魍魎、あれは何所にゐるだらう

と偶と思ひうかべると、其魍魎が憐れなやうな氣がする。

あらはなる落葉の杜の月影に魍魎よ何の隈にかくるゝ

畫家の細君（下）

かつみ

一夜明れば、目出度い御正月、世間では歌留多よ屠蘇よと賑しく打騒いで居りますが、奈何云ふ譯か妾の家のみは何か薄き雲にでも包まれて居ますやうで、夫れは淋しい御正月を迎へました。夫れと申すのも唯今御話致した事などがあつた後でも御座いませうが、又一つには正月の中頃と約束した手代への話もあつたからで御座いませう。

良人は元日と二日は夫れでも年首廻りに歩きましたが、三日からは又部屋に閉籠つて昨年から書きかけの肖像畫を色々と工夫して仕上て居りました。十日過ぎに漸く出來上つて良人も珍らしく上機嫌で、其肖像を持つて先方へ御屆かた〳〵參りました。妾は玄關に出て腕車に乘つて出て行く良人の後姿を見ました時は、初めて眞の御正月が來たやうに思ひました。サー最うこれで憎らしい手代に言譯爲ることもあるまい、此所の關所を超えさいすれば後は又奈何でもなるであらうと、それからは只管良人の歸りを待て居ります計り。

さうすると丁度午後の三時頃で御座いましたらう、豫て助けて呉れた伯母が尋ねて參りました。正月のことではあるし、さう心配事ばかり話す譯にも參りませむから、打沈む心を無理にも勵して、世間話や又近頃家の都合の好い話など致して居りました。すると夕刻でしたが良人は悄然として歸つて參りました、手には出る時に持つて行つた肖像の額縁を、包んだ儘下げて居ります、妾は出迎に出まして、直にも其譯を聞かうと思ひましたが、何に致せ其處には伯母は居りますし、めつたな話は出來ませむので、妾はその包を受取り良人を伯母の居る座敷に遣りました。マー貴方其折も妾

は顔から火の出るやうな辛い思ひを致しました。御話が餘り長くなりますから畧しますが、其時繪を持歸つたのは、先方の方々に御氣に入りが無く、種々な御非難があつて、何うでも書換なければならぬことになつたのださうでした。斯樣な風で正月は又貴方等にまさつて苦勞心配を致しました。處が夫れのみか良人の仕事も段々思ふ樣に行かず、伯母に對しては義理が惡し、里家の兩親は何にかに就けて良人の意氣地無しを言立てますし、間に挾まれた妾は最う毎日〳〵泣いて計り居りました、その内に以前の服屋の支拂もありますし、又種々費用は嵩みまして御耻敷御話で御座いますが、澤山も無い妾の衣服貴方マー失す樣な譯になりました、妾は此時程悲い樣な世間が薄暗くなつた時はありませんでした。そこで餘り堪りませんので、昔の大家の立志傳と申す樣な書物を讀んでも見ましたが、貴方自分が實際斯樣な境遇に這入つては、何の味も力も無いもので御座います。夫れに斯樣な悲境の裡に居るのにも拘はりませんで、時には貴方元の學校から同窓會があるから出て來るやうにと、○○夫人などと爲して立派な招待狀など參るのでせう、最う妾は愈々辛くこんな困つたことは御座いませんでした。するうち貴方不運は益々妾等を苦しめます。丁度其年の夏の初で御座いましたが、愈々その笄町の家にも居ることが出來なくなり、何所かもつと小さな家に引移らなければならぬ譯になりました、其時既う今の總領が懷胎爲て居りましたので、身は重しほと〳〵情け無いやうな氣が致しました、引越たと申す家は小石川の掃除町、タッタ二間に臺所と云ふ實に哀な割長屋で御座いました、丁度笄町の家を出ます時は六月の末で、庭の栗の樹は一杯花を持つて居りましたが、夫れを見るに就けても今度は什麼な人が這入つて、彼の栗を拾ふのであらうと考ひまして、我れ知らず淚が出たので御座います、愈々掃除町の家に引移りまして、或る一朝裏の井戸へ水汲に參りますと、確か傘屋のお婆さんと思ひましたが、「お神さん危い氣をお附けなさい」と、心附けて呉れましたが、妾は「お神さん」とこの一言を聞て

穴にても這入りたいやうな氣が致しました、良人はこの時決して唯遊むで居つたのでは御座いませむ、終日繪筆を放つたことは無いのでした。然し未だ世に知られない美術家の生涯は、何時も斯樣なもので御座います。

後に聞けば里方でもこの當時は、妾の身に就て種々な相談があつたのださうで御座いましたが、妾は辛棒に辛棒を致し最初の意地もあり、又良人の繪に就ての心懸もそれは〳〵感心致す處が御座いましたので、ヅーット辛棒を徹しました。然しねその時に熟々と考へました、最初未だ美術家の內情を知らず、自分一人の考ては如何程面白い樂しいものかと想像致して居りましたが、實際は想像の貧苦よりも遙に辛ひもので、妾は何時の間にか最初の希望や想像は消へて了ひ、唯家の暮向の勝手の好い樣、可成良人には臺所の心配迄懸け無いやうにと、夫れのみを務と致して居りました。その內に小供は生れましたし既う妾一人の手一つては迚も萬事が行屆きませむので、その苦しい中に思切つて少女一人置くやうになり、此度は最う行けぬ此度は愈々行詰つたと、夫れは〳〵二三年と云ふものは、唯苦しい火責水責の生涯を送りました、勿論これは妾のみては無く、良人に致しましては猶更て御座います。この間は唯暮向の爲めに繪を書て居ると申すもので、何んて繪らしき物が一枚でも出來たものでせうか。畢り繪筆握つた勞働人、妾がその本統のお神さんて御座いました。

その內に又一人殖ることゝなり、愈々妾も最初の考は夢の樣に捨てまして、暮向の研究大は小供等の世話から衣服の遣繰、小は醬油、鹽、味噌、油のことに到りますまで、一々と氣を配り心を籠るやうになりました、良人は妾が何も不平の顏も爲ず、家大切と立働いて居りますのを見ては、非常に滿足爲て呉れました。然し貴方時と運とても申しませうか、其後良人の仕事も段々に能なりまして、少しは餘裕も出來時には丹精を籠めました、肖像畫や風景の一枚が出來るやうになりました。さあ斯うなると段々氣强くもなり、本統の

希望も出來まして、丁度魚が水に這入つたやうに生々と致して參ります。

さあ夫からは毎年展覽會に出品致す樣にもなり、新聞雜誌では有望なる青年畫家とか囃立てゝは呉ますし、終には氏とか、君とか、先生とか何とか崇めらるゝ身分にもなりましたが、マー夫れ迄の苦勞は一通りでは御座いませむでした。

今日では難有ことに恁樣に致して居りますが、これも畢りは苦しき經驗を踏むで參つた結果かと存ます、夫れに良人も申すので御座いますが、美術家の妻と云ふべき者が、決して特別に繪の事に氣を採むだり、又叶ひもせぬ高尚な理想や希望は持つて呉れるには及ばぬ、美術家の妻として一番嬉しいのは、能く未來の成功を信じ什麼な苦しい生涯も、忍耐して甲斐々々敷働いて呉れるのが、何よりの良妻であると時々話しますが、マー妾の實驗致したこれ迄の經驗によりましては或は夫れが本統かと思ひます。

奈何もつまらぬ妾の身の上話し、嘸御迷惑のことゝ存じました、然し斯うやつて古い御話を申上る樣になりまして妾の今の身上は、誠とに幸福のことゝ存じますよ、アレ二人の小供が歸つて參つたやうで御座います。一寸此方に呼むで御挨拶を致させましやう。「清雄淸さんでせう。それから武さんも一寸此所に被爲入い。角筈の叔父さんですよ」

と細君は今歸つた二人の小供を呼むで、自分に挨拶をさせやうと爲るのであつたが、これを機會に細君のお話は中止となりました。

（をはり）

三行録

▲文壇も暑中休暇をして居たが秋の雲の動くと共に大いに活氣の添はる事であらう諸孃の作意果して奈何？

▲今夏の流行は避暑と旅行で殊に富士登山は本誌に於ても推奬した如く甚だ盛んで女學生の團體さへ有つた

▲富士の神は此花咲耶姫である女子の登山は素より其處由來吾國女人禁制の山岳が多い迷信の結果で甚だ愚

▲小説は問題にならぬ却つて新體詩が問題になる文藝の發展自然の大勢詩は新思想の源泉を爲すものである

▲『中央公論』現時の新體詩の價値を世間に問ふ答へた人は多く詩を侮蔑して居る詩を愛する者は青年のみ

▲『文藝倶樂部』は風俗壞亂を以て發賣を禁止された世間には若干も風俗を壞亂して居る雜誌あるが分らぬ

▲女傑奥村五百子年金三百圓一時金千圓を愛國婦人會より貰ふ人間は何でも一つの職務に熱注すれば宜しい

▲各女學校は新學期の準備に新築増築をする女學生の精神の新築増築は先づ是と共に必要であらう反省せよ

▲雜誌編輯術は面白くて爲になるやうにすれば可い敎へる態度より共にお友達になつて愉快に語る方がよい

▲昨今女子の往復文甚だ飾り多く小説的になつた實用文と美文と混同しては不可實用文は眞摯なれ實際なれ

▲文字は追々粧飾用にはならなくなる譬へ藝術的作品にても只意志感情を有の儘言表はす事になるであらう

▲女子の雜誌は未だなか〳〵多い女子の雜誌を男子が讀み男子の雜誌を女子が讀む由來劃然と區別するは非

▲文藝の人は須く自然の趣味を解さなければならぬ自然の趣味は秋に入つて殊に多い曰く雲曰く星曰く草花

▲星は詩人によつて創めて我文藝界に光輝を放つやうになつたが俳句の季では星月夜として秋に入つてあつた

▲見よ秋の雲を秋は最も天の澄む時て偶ま雲が出ると色の鮮やかな姿の奇拔な直ちに詩想の浮ぶやうな秋雲

▲桔梗の紫女郎花の黄萩の紅白と共に秋は向島の百花園でも宜しい是非草花を見て詩思文想を養ひ給ふべし

▲新聞記者の眼には凡ての女學生が墮落して居るやうに映り吾等記者の眼には凡てが可憐で眞面目に見える

▲男子の書生と言へば昔から尊敬さるれる女子の書生に限りて尊敬されない理由はない今に高まるに違ひない

▲蕗と云ふも草の名茗荷と云ふも草の名婦人と云ふも雜誌の名少女と云ふも雜誌の名兎角名で流行る世の中

▲『今の汽笛は未だ十一時少しなりとも草を刈ろ』蓋し正午前と云ふ事てあらう新歌謠でも巧い事が言へる

山中古洞先生選　懸賞圖畫　（其九）



○夏の橋（特別參賞）　本郷區湯島天神町三ノ三　德力富美子

○白　雨（天賞）　豐前國扇城　花溪女史

○淺さ瀬（地賞）　京都市西陣紋屋町　濵部郭公女

○銀　河（人賞）　本郷區湯島天神町一ノ九九　山本敏子

文學士　沼波瓊音先生選

論文

地　○文章の妙

門司　岡芳子

天の橋立松島は實に天下の絶景なり、されど世に類なき砂の粒あるにあらず、他に求むべからざる松の葉のあるにもあらず、海の水、峰の土、皆他所の者と異なれるなし、妙は即ち松砂山水其配合如何にあるのみ、文章の妙亦斯の如きか、敢て難字難句を澤山用ふるに及ばず、只平凡の文字のみにて足れるなり。然るに孜々汲々人の讀み兼ねさうなる四角四面の文字を並べ立て是れを至妙の文章と誇るもの、げに馬鹿の乘馬とも謂ふ可きかな、鹿爪らしき字多く書き連らねたる、文必ずしも妙ならず、平淡なる句のみ打續けたる章必ずしも拙ならず、要は只其配合の如何によるなり。

（評）字句よりは配合にあり字句配合よりは精神の有無にあり。

人　○虚榮心

周防國熊毛郡淺水村　岡部佐保

女子は虚榮心の權化なりとは、誰が言ひそめし言の葉ぞ、紅おべゝのお孃樣より、白髮弓腰の老媼に至るまで、虚榮心を離れて生活し能はざるは女子の通弊なりあゝ何故なればかくは澆淺なる、男子の徹底的眼よりしては、如何にはしたなく見ゆ可きぞ、げにわれも人も、戒むべきは虚榮心にてそあれ。夕滿目蕭然たる秋の野に立ちて、夕榮の火焔の淡れ行くを見よ、如何に堪へ難き寂寥の感に打たるゝぞや、さなりそは、夕榮の色の餘りに空しくして、襲ひくる暗黒の影の餘りに悲壯なればなり。されど虚榮心の果敢なさは夕榮のそれにも劣らぬぞかし。見ずや彼の、燃ゆるが如き虚榮心に驅られて、空しく光明の殿樓を夢みし青年が、やがて年老い血は涸れて哀れ再び故山に歸る沒落の姿を。あゝ成功の殿樓を築かむには、虚榮心は餘りに弱き礎なるよ。

醒めよ世の虛榮心に耽る者、夕彼の悠久なる天を仰いで醒めよ、汝等が過去に於ける虛榮心の歴史は、汝に取りて毫末も價せざるなり、徒らに空想の刺撃劑なりき、煩悶の導火線なりき、汝等は虛榮心の域外にあらざれば、終に成功の殿樓を建て、幸福の畑を耕す能はざるなり、思へば一時の流行の寵兒となりて、百年の幸福を得たるが如く、獨得々たる輩こそ笑止なれ、さるにてもかゝるものゝ女子多きは如何にぞや。

（評）人三十にして始めて虛榮心の愚なるを悟る。

秀逸

○交　際

赤阪　竹藤紫桂子

社會に活動をなすには必ず人と交はらざるべからず、御代の開け行くと共に此道は益々繁雜となるなり、今の世には出會の時、訪問の時、應對の時、などゝ其折折に心得べき交際法あり、さはれそは表面上の交際なり、我等學生の身はいまだ珍味佳肴に人を饗すべき時ならず只誠心を以て交はることそうれしき物なれ、さるを虛榮に流れたる都の學生界やがては社會に活動すべき人たちの心のうちこそいぶかしけれ表面其言の甘く陰にするどきとげを含める薔薇にたとへんもふるめかし昨日の味方今日の敵此方にへつらひ彼方にくみす、かくして當世交際界の大だて者なりとほこるうとましき哉、さりとて自世をすねんは愚なる事なり又人を疑はんは自心安からぬ事なり、されば人は人なり我さへ誠の心を以て交はらば恐るゝ所あらざるなり、實に花の朝月の夕同窓の友にたらちねにも明かし難きなやみをも語り合ひては慰めつ慰められつ誠をつくし合ふ程樂しきことあらざるなり、男女交際に於てはいまだ學淺く世事にうとき我の口にさへすべき事ならず、さはれ友の兄君兄の友の君など常々相知れるを殊更によそ〳〵しくせんことといとなめげなる事なり、されば、公に紹介せられしならば父兄の監督の下にて共に野邊の花もつむべし、綠の影に舟も浮ぶべし、月の夜の合奏もよし、雪の日の歌づかひも興あらむ、かくしてこそ誠の樂みなれ、かかるを罪ぞとさゝやくは其人のいやしき心よりなり、只清くあるべし、必ず秘密なかるべし、がいして男も女も友は選ぶべきなり熱しやすきはさめやすし、惡しと思ふば敬して遠ざくべく男は快活なる内に嚴格なる、女は柔和なる内に犯しがたきをこそ親しむべきなれ。



水馴竿（賞外）　府下南多摩　中島縫子

（評）殆ど言盡せり。

○偶言數則　京都　白的女史

○「物純粋なれば腐敗せず」といふ事、我此頃不圖感じ起しぬ、甘、鹹、酸、辛、苦、總て純粋なる一味の物には決してバチルスのつかぬ者也。之と同じく人の心も一向に一味の道に向つて進むときは、否生涯一味の心を保持するときは、必らず腐敗せざるもの也。

○神の在否は我之れを知らず、又我之を論ずるの力なし、さあれ少なくとも、世には眞と正との勢力冥々に流動して、常に人間の運命を支配するを信ぜり。見ずや成功はいつも眞と正との土臺に築かれ、失敗はいつも僞と邪との上に倒る。其間幾分の僥倖はありとするも古今を通じて甚だ稀也。

○「善く遊ぶものは善く働く」人間は始終働き續きなるべきものならず、時に適宜の娯樂を取て、之れを自家心靈の滋養物に供せざるべからず。然るに邦人古來の習慣は兎角遊ぶことを忌みて、甚だしきは目するに怠惰を以てし、人間に娯樂の必要あることを認めず、誠に誤れるにあらずや。

○此頃大いに女子の敎育進みしと稱ふ、さりながら我未だ墮落女學生の攻擊頻々なるを聞けど、德操たかき女子を見ず貞婦烈女も聞かず、紫式部、淸少納言、和泉式部に比すべき女流作家も見ず、あゝ名士濟々たる明治の世、芳名長く後世に傳ふる女偉人はなきか。

○人の愛嬌を喜ぶは多く人の己より愚なる點にあり。

（評）首二節深く味ふに足る

○同情　播磨にしき

人の子が死んでも我子がこけた程にも思はぬとか、人の心はかくまで薄きものかわれはこの言を聞くごとに思ひ出づるごとに、いかなるいたづらもののこの惡魔の如き諺を作れるにかと恨みに思はざることなし、されど、あゝされど、事實はこれを證明して餘あるを如何せん、情あればこそ人は鳥獸にも優れこれなくても萬物の靈長とはいかでいひ得べけん。

旅順の苦戰をききて悽愴の感に射られはしても、愛子の出征せし人ならでは心より泣きし人は多からざりしならん、桑港の震災にもまこと袖を絞りし人は幾人ぞ、壯健なるものの病者をいたはり富者の貧者をあはれと思ふも少し、人としての此世はかくてもすむものにや、滔々たる天下かくの如くならば、精しき倫理の學説も何にかなる、釋迦の慈悲や基督の愛やはた孔子の仁、今人には土の如く捨てられたるにや。

人々たがひにおもひやりあらば、社會は平和に圓滿に神聖に保たるべく、これを欠かば怨恨起り爭鬪生じては修羅道をも現出せん、工場主に同情なくして同盟罷工起り師弟の間に同情なくして學校騷動を見る、夫

婦の間に互におもひやりあらば破鏡の嘆もなかるべし、我國古來家庭の一大缺點たる姑と嫁との間に起るいまはしき現象も同情を欠けるに基づく、ああ待つべきものは同情よ同情てそまことに社會の柱人の命なれ

（評）着實。

○信仰力（古山秋子の君の自然美を讀みて）

伊勢　守田一翠子

偉大なる哉、信仰力。靈妙なる哉。信仰力。懷疑も、煩悶も、之に觸るれば、忽ち解くべし。

吾人が逆境に立ち、生死の境に臨みて、尙ほ且、悠々として、眞理を語り、自然を樂しむ事を得るは、一にこれ、信仰力の無限に靈動すれば也。

冷酷なる科學觀を以て、宗敎を否定するを止めよ。吾人は、自己以上の勢力あり、權能ある者に、信頼すべく生れ來れる也。信仰によりて立ち、信仰によりて生くべき運命を有せる也。

試に思へ。一擧手、一投足も、悉く運命の神の支配する所となりて、一も意の如くならざる、吾人が、毫も信仰の力に頼らずして、よく憂苦を排し得るや否やを。

人は、煩悶ある者に向つて、自然に對して慰安を得よと勸むれど、信仰なくして、いかで、默示に接するを得んや。自然が如何に、精美なるも、如何に崇高なるも、悉く煩悶の材料たらんのみ。人生の不如意に、狂する者これ也。萬有の不可解に、眩する者これ也。

即ち知る、信仰力の鞏固なる者にして、初めて、自然が、吾人の慰安者たり、敎訓者たり、指導者たるべくして、我を忘れ、時を忘れ、心解け、形釋けて、遂に自然美と冥合一致する事を得んと。

故に、われは、自然美の崇高精致なるを渴仰すると共に、深く〳〵、信仰力の偉大靈妙なるを信ずる也。

（評）この論者の意は極めて明白なりされど秋子君の主張はこれが爲に毫も動かざるなり、自然物をすべて料理して後味はゝむとするが一翠子君の論、自然一物を其儘味はゝむとするが秋子君の論なり、借問す、ジヤムにしたる覆盆子に覆盆子の味ありや否や。



水車（賞外）　神戸二ノ宮町　德永みれ子

○初春の樂

京都　高須　初子女史

寺々の鐘の聲はたちそむる霞を透して耳を穿ち、金鷄いさましく鳴き立ちて、夢をさましぬ、げに立かへる

年の朝には、野も山も鄙も都もあらたまりて、九重の宮ゐも、賤がふせ屋もへだてなく武藏野の野守も、萬代の春の初のわか葉つむらん、朝日影ののどやかに、氷とく天つ風も吹きそめて、谷間の鶯もたゞあるべきにもあらでや、梅が香の打にほひたるほとりに、まだいときなき聲して囀づるもいとつき〴〵しや、目に見るもの耳にきくもの、萬づ皆のびらかに、心あるさまに見ゆるは、新年のけしきにこそ。

鬼やらひも過ぎぬれど、空のけしきまた冬にかへりて雪げの風いみじう身にしみわたり、寒さほと〴〵堪へがたく、櫻のかれ枝にちりかゝる白雪の春にしあればなほ花とも見よとにやあらむ、さりや春の名たてに、いかで花といはましやとぞ思はるゝ、しかはあれど、今一しほのといはれし、松の木の根に白う殘れる見れば、これも亦た千とせの陰をたのみてにやといと心にくゝ、なか〴〵にあはれふかうなむ。

まつ人の香と昔の人のめてけむ梅の花ばかり、世にゆかしきものはあらざりけり、雪にこもれる年のうちよりおぼつかなく思はせ、春たつ風に匂ひそめては、かたへなき時をほこり顏に遠方の人の袖さへ隔てぬはうゑて見る主人の爲には心淺き方にも思ひなさるめれど、かゝればこそあはれは一しほふかきなれ、あるは鶯さそふしるべともしつべく、あるは人を誘ふ便ともしつべし、さては香をたづねてぞしるべかりけるとも、やみにこゆれどしるくぞありけるとも歌ひ出づ、いかであはれならぬかは、まいて小かめにさしたるが、燭火の消え果てゝ後なか〴〵にさやけく枕に香ひくる何にかはたとへむ。

つとめての夢の浮き橋とだえしてま木の戸おしあくれば、春もまだ淺間の嶽に立つ煙の、むらさき立ちたる霞になびくあけぼのゝ空こそ、清少納言のいひげむも實にも思はれていとゞあはれなれ、されど夕日の赤う霞みて、山本の寺に入相の鐘ひゞく頃、をしの打ち群れて利根の川原におつるもまたなくあはれなりや、年ごとに目なれては居るものから、ふと忘れてはまだきに雁の歸るにやとむね黯かるゝも我ながらをかし、ゆうべは秋となに思ひけむと、太上天皇のの玉ひし水無瀬川のけしきも、かくやと思ひ合はされてこよならうたのし。

山本の霞もいまだ深からねど、夕ぐれの空いとくらう、心もと無きには照りもせず曇りも果てぬ月かげの梅と共にかすみつゝも、星とも見ゆる花のひまよりにほひ出てたる、いとゑんにうるはしく、秋の色よりもと思はるゝよ、おぼろ月夜にと千里ぬしの詠まれしも、かゝる夜のけしきにやとげにしくものも無く思はるゝぞかし、

あはれ春の初めつ方よ、たのしとも樂しく、うれしと

もいとうれし、さるはたのしみのこゝに盡きねばなり、樂みのこゝにつきずして、なほ樂みのあまりあればなり、みちてかくる世のならひなれど、このみてる樂みの、いまだ缺くるにいたらずして、あとになほ花あるを頼めばなり。

（評）佳なり、末段の如き「力」のなほ所々にあらむを望む。

○愛

名古屋　小山かく子

愛は人類の生命也、最高の理想也、最大の光明也、愛なきの生存は死せる生涯也、愛なきの社會は暗黒なり、愛なきの人は土偶に等しき也。

かりに世界の宗教中より愛の教義を除き得たりとせんか、人は宗教を以て無用の長物となし、其存在を許さゞるべし、大なる哉愛の勢力！。

使徒パウロ曾てコリント人に語りて曰く『雄辯、知識、信仰、施與、愛なくば數ふるに足らず。愛は嫉まず誇らず、たかぶらず。不義を行はず。己の益を計らず。輕々敷怒らず。凡の事に就て寛大に、信じ、望み且つ忍ぶ也。愛は永久に墮ることとなし云々……』と、人は女子を目して愛の花と云ふ、麗しい哉其名！。

我らは使徒パウロの說ける愛を理想とし進んで麗しき愛の花の香を放たざるべからず。これ我ら婦人の義務にして又理想ならずや、麗はしき名の、責任も亦重しと云はざるべからず。

今や愛に飢る者日に多く悲観の極自殺を思ひたつ者漸く多からんとす、これ時代の愛を要求する明證ならずや。聊一言を記して世の識者に質す。

（評）物足らぬ心地す。

○孅手の力

岩代　若草子

傾國傾城の譬も古し、女が社會の裏面に有する勢力は誠に恐ろしき程なり。

去秋以來東北地方の凶荒に當り、幾百萬の老幼男女が喰ふや食はずの困苦の淚によりて、世間同情の寄する所、金穀實に百餘萬圓と稱すれども之を窮身一人に分與せば數拾錢に足らず。しかも婦女の一笑を買ふ爲によく數拾金乃至數百圓の大金を抛たしむる事あり。

之を田舍に見る。婦女子の敎育普及せずして文盲の儕輩多きは、主婦老婆の遮ぎり止むるによりて然る也といふ。

東都における學生界今日の狀態はいかに？髮を梳り油をそゝぎ口紅さして香水麝香の匂に浮身をやつす男學生の醜狀痴態は笑ふ可しとするも、其こゝに至らしめしは女學生に非ずや。

日每々々の新聞紙に散するも、慘酷無情なる殺人犯の大半は、其裏面に婦人の關係せざる事少なく、所謂御家騷動なるものが、婦女子に原因せざる者稀也。

勳位榮爵、婦女子多く之を得るの權利に乏しけれども、而も此等の人をして活動せしむる、よく婦人の孅手によりて左右し得るを思はゞ、あゝ婦女子の勢力豈偉大ならずとせんや。願はくば諸姉、社會の表面に活躍し得ざるを恨み怨ずる勿れ。そは男子の天職なれば也。婦女子はすべからく絕大なる潛勢力によりて、內は平和圓滿なる家庭の帝王となり、外は夫、子女をして世に善美なる活動の士たらしめよ。良妻賢母は即ち女子が、最も尊重すべき天賦の職務なれば也。

河井醉茗先生選

新體詩

特別第三賞

○曙の曲

倭子女史

遠く流るゝ新潮の、あふるゝがごと夏雲の、
みそらの海にいざよへば、短き夜の明けそめて、
あかつき清く吹く風に、波間の星の華落ちぬ。

朝呼びさませ夏鳥よ、早や織姫の夢さめて、
天の連理の枝くちて、比翼の鳥の影もなく、
わたるふなびと梶を絶へ、流れむなしき銀の河、

かへりて見れば佐保姫の、高き宮殿の大柱、
笄にうたるゝ老松の、青雲ちかき尾上より、
千尋の谿に落つるごと、春の柱は仆れけり。

建てよいざとく熱き日の、ほがらに照らし其の影に、
雲行きかよひ雷霆の、光をまとひ荒鷲の、
翅を張りて譲り飛ぶ、ふとしき夏の大柱。

露まきちらせ野に岡に、山に麓に谷かげに、
緑をまとへ若葉して、梢はしげき高ばやし、
ゆふべの夢は短くも、光りにかへせ夏の曙。

奇しき香、新しき香、妙なる香、曙の香は威りました(評者)

天

○斷絃

下野小山町神島谷　新井翠子

足にまつはる晝顔の、蔓の響きに戰きて、
露にもろかる黒蝶の、飛ぶに力の弱い哉。

行くとしもなきがれの、我を導く奇し幻影や、
夕、花野のさびしらに、漂落れたりな我姿。

例はゞ古き塔の、幽玄暗に溢れたる、
階登る心地して、迷ふに深き我が思。

吹く風翔る頬の寂や、額、俛れてイめば、
落つる涙の多かるに、慰藉の光を憧憬ひては——

泣くに限りの聲擧げて、今宵は許せ御神よ、
苦愁を胸に秘めたれど、世には微笑む罪の子なれば。

暗愁の詩として根本には別に奇想もないが、句法盡し凡ならずて、黑蝶と草の莖と、塔を上る幽玄とは、此作者が優に創造の才あることを示して居ます、今少し奮發したまへ、天晴一かどのものになれるでせう（辭者）

地

○楡の葉かくれ

新潟縣南蒲原郡見附上町高野平之助方在宿　やもめ蝶子

楡の葉がくれもれいづる、
禱のうたの安らけき、
烈しき白日のたゝかひの、
けふの首途や送るらむ。
げに天の矢のゆくところ、あえかに匂ふ紫の、
將たくれなゐの雲さけつ、神の默示ようつくしき。
わかきは君よまごゝろの、戟のきらめき怕れなく、
まがつみ堅き額をしも、とはに碎きて歸らずや。
たそがれうごく虹の梁に、君がほまれをたゝへつゝ、
うまき眠のいのりこそ、楡の葉がくれひゞくらめ。

煩悶あるものには出來ない詩（辭者）

人

○蜻蛉よ

京橋區新榮町三ノ一　曾村幸子

繼葉音して地に復る、雜木林の暗がりや、
さゝやき低き小流の、水の香漂ふ陰路に、
薄翅長尾なよ〳〵と、飛び交ふ。あはれ蜻蛉よ。

晨、孵りて夕は逝ぬ、
脆き生命に瞬間の、
世よ怡樂もありもすれ、
あゝ徒に身は老いて、
紅涙ぞ繁き妾なれば、
羨まれぬる、汝が短命を。



母さま（賞外）福井市佐佳枝上町　石川秀子

「あゝ徒に身は老いて」と言はないてもよろしかつたのです、併し詩ごゝろはなか〳〵あります（辭者）

秀逸

○藝の宮

越中　佐藤つき子

藝術の宮の使し女ひと夜わが夢ゆすりつゝ、
魂の奇戸に訪れね。使命を負ひて自在の身ぞ

努力の羽うち日に夜に、美し詩歌の野をかける。
利や名や戀や歡樂や　泡沫の如もろき世に
常代の相、永久の光　何等いみしき輝きぞ
詩歌の生命詩聖の　心の花の御言はも。

近い詩集を讀んで居られる方でせう(醉茗)

○熱誠　根岸　太田あきつ子

華やかなれの青春を、悲しからずや顔のやつれ、
亂れ毛かみて世をば泣く、君を慰むすべもがな。
をろかの女に生れし身の、哀れ諫言の句も出です、
君悲しめど詩もなき、我胸餘りちさくして。
七尺絹に描くには、自然の天地廣くして、
腕にふさはぬ業なると、知りては筆も折り捨てぬ。
心を籠めてかき鳴らす、緒琴あやしき音の亂れ、
君を慰藉の技足らで、涙ぐまし恥の身よ。
さは云へ已まん若春の、乙女が胸に溢れたる、
熱誠の二字に冷えませし、君がみ胸を溶かさでや。

熱があつておとなしい、まこと女性の代表作物(醉茗)

○最後のうばらに　無才少女

春の女神の愛姬が　ま白きほゝや紅の口
恨情にやむ人の　胸幾ぞ度いやしけん
詩に打なやむ歌びとの　詩はてきたりぬ汝が笑に
畫筆をふるふ畫かき人　汝が装をよろこびぬ。
飾にまとう乙女子は　姿美しきやさしなれ
是ぞ飾の花なれと　口にあてゝは嗅き
息ふきかけてめぐるなれ　又彼の蝶は汝が色に
甘き味よき花蜜に　うれしきとてか舞ふなる。
やよ歸ります花うばら　下界の總ての物象は
汝が笑や清けき香　汝の装花蜜を
皆よろこぶとたらちねの　春の女神につげよかし
またこん春はさほ姬と　きたれましや花そうび
清けき香花蜜と　よそほひてらしし姿にて。

薔薇も斯う云ふ處を捉えろと、日本化してよろしい、少しは西洋の臭もしますが(醉茗)

○落花　赤坂　齋藤紫桂子

とはにねむれる蝶のたま　さそうてひゞく鐘の音
くれ行く春をおしみつゝ　しばし園生にみだれちる
花のしもとのたゝずまゐ　胸になやみの淋しみや
君に別れて一とせを　いかに過して我なるか
開かば花にとちかひしを　咲きてうつろひかくちれど
ちかひし君はとひまさず　かくして待ちし春は行く
散りし花片あつめつゝ　うなじにかけてほゝえみし
そは一とせのゆめなりな　ちかひし君はとひまさず
みだれてちれよ且ちりて　かくせよ我のほゝえみを
つれなの君は來まずとも　ちりてかくせよ我えみを

わざと興がつたのでなく、落花をかざして笑をかくせよと云ふのも、自然にきこえきした（酔茗）

○佐渡なる友に

長野市 安孫子美子

ひらけし南春の海や
油流るゝ靜穏も
島の子春の幸知らず
風に面を洗はせて
額青黒うるみたる
瞳に憂の痕深う
秋乗せて來し高潮に
さびしくも飛ぶ白鷗の
行方たゆげに見守れる
あゝ四十九里浪の上
ひとりの友を思ふ哉
島は都に遠ければ
あらず消ぬべき天地と
母ます京もなほうくて
夕べ〳〵を岩の上に
若し夫れ雲の灰色に
鳥とならびて白き帆の
鬢うす白き母を吹く
潮ゆた〳〵むらさきの
繪草紙に見る光景とのみ
北の極より吹きよする
胸打つてときわづらひも
噓流落に厭きし身は
そこに三年の漂泊や
涙のごひて立つらむか
嵐に落ちて行くところ
唄悲しげに歸る時
都の秋の風を戀はずや。



とんぼ釣り（賞外） 秋田下亀六町 大友とし子

佐渡なる友に、好詩題、情は盡くして居るやうですが、技工の點に於て飽き足らない、起首と結末は力が籠つてゐますが、中だるみの氣味があります（酔茗）

○わかれの詩

能登 池野いさみ

すだれにかゝる久方の、流れは細き天の川
細ききづなに憧れし、望みも今は絶たりな。
もとより幸の天地を、遠く追はれし鳥なれば、
鄙唄清き草がくれ、
朽ち果つるべき身ならんに、
巷に三年漂落ひて、
何とて人を戀ひしけん、
誠にわれや薄倖の、
翼折れたる野の鳥よ、
されば惱みも悲しみも、
ちいさき胸にひそめては、
思みだるゝ夕間暮、獨泣きたるものと知れ。
げに次の世も儚かる、運命なるらんわが戀は——
とばかりわれは慕へども、とばかりわれは狂へども、
秋神無月永き宵、夢にもみへぬ戀路かな。
あゝさよ姫のそれならで、此限りなき哀愁の、
潮路はるかに浮ぶ時、石となるらんわが戀は——
夕薄るゝ落日の、影は漂ふ浪間より、

とびわかれ行く水鳥を、
われならなくに眺むれば、
悲しみみてる浪の上、
静かに渡る夕雲の、
漂ふあたりはる〳〵と、
何處の沖を行くらんか。

すだれにかゝる天の川は宜しかつたが、細ききづなに掛つたので、稍いやみに聞えました『悲しみみてる浪の上』のやうに、いやみなく、想ふ事と、景とを充分に言ひ表はしたいものです(醉茗)

○名なき蟲　岩代　すみれ子

勞働に獲ては身を養ひ
身を養ひて世に働く
いと易きこの理を
鈍くも我の悟りかね
空は小春の今朝もまた
火鉢懸しきもの思ひ
遊ぶか餌をば尋ぬるか
窓の障子の白紙に
名も無き小蟲たゞ一つ
さまよひ居るを見出しぬ
名も無き蟲を人の身の
あるか無きかの心より
眺めやるらむ二個をば
斯く思ひつゝ我はたゞ
愁思にはなれうか〳〵と
蟲のまに〳〵たどりたり
さやかになりし我目もて
いつしか遂に一と時の
あだに過ぎしを憐けど
名も無き蟲は今も尚
一つの小間を行き戻り
倦かずもあるか小休みなし
名も無き蟲よ汝はそも
何を縁のいかにして
世をしも過ごし果てはまた
いかに絡らむ身なるにか

所謂詩的な材料でもなければ、言ひふるされた短歌や俳句の想でもない、たゞ作者の見た趣を幼稚ながら歌にして行かうと云ふので、初め新体詩の領地も、かゝる發足點から招かれるのです(醉茗)

○春の鐘　高輪　鈴木きく

花の宴のおぼろ夜に
伽羅の香まよふ五百疊
まばゆき許り銀燭は
月常住の春の宵
美し姫のふりあふぐ
きぬの緋扇おごそかに
男神女神もふりはへて
白き御あやの御衣に
ぬかには黄金の御冠
くれなゐ深きひなげしの
かたへに清き水ばんに
黄金の盃そと浮けて
笑むや女神の二人三人
神にも嫉あるものか
一人の女神金扇に
打たれて弱く波みてし
ひゞきに似たる
春の鐘の音

想像も隨分復雜になつたやうですけれど、こんなのは稀です、過ぎたるは及ばざるが如しの感もあります(醉茗)

○夏の一日　紫野　紅綠子

椰樹の葉影に
あしたをむかへて
うちよする夏の潮の
湧く音をきゝつゝ
詩歌の才をいだきて
新らしきいきをすはせよ
萬象皆日盛かり
白きひかりの
塵をまき〳〵
むらさきの山はたゆたふ
酷熱とつぶやき
水田にはみどりひろごる

古木しげりて苔まとふ　幹のましたに
暑さけつゝ　唱はなむ神の榮を
君の手をとり　凉をいれつつ

かの夕べ葡萄葉しげりて、月とみ星の
影を仰ぎつ、そゞろあるきや、みどり葉かぎつゝ
少さき理想も、　千年の思ひや夏は嬉れしと
もろ腕に努力こめつゝ、　かぢとりつ
オール漕ぎつゝ、　下らまし川の岸邊を
岩の上に花はのこりつ、　水泡には戀ひの音たてつ、

一個の調、未だ整はないが、努力すれば何ものかを得るてせう（辭若）

○臨終の笑　翠柳

花のかんばせ色あせて　紅染めしくちびるは
薄紫となりにけり　されども安けく平らけく
かすかに君はゑまいつゝ　平和の神の手にすがり
眠るが如く永久しへに　かへらぬ旅路にはるばると
高き理想をゑがきつゝ　尊き望み夢みつゝ
君行きましぬ天つ國
神のむかへのにじの橋　夕べの空にかゝれども
未だうら若き君一人　渡すはいとも悲しきに
君が笑まひの消へし時　君が情のとぢし時
彼の世に近きみすがたを　仰げば落つる露の玉
たとへば野邊におく霜に　朝日の陰のさす如く
臨終の笑みのはかなさよ

虹のところだけ際立ちて感じました（辭若）

○テニス　下總　小林はつ子

咲きつゞきたる花かげに、　小砂蹴たてゝ入りみだる
今を半ばのロンテニス、　なげやる球はポン／＼と
チットーわたる春風に、　かよわき胡蝶舞ひ入りぬ
風ゆらめきの勇ましさ、　春の遊びのおもしろや

今少し詳しく詩的に味ふことが出來たでせう（辭若）

○四季の雲　茨城縣　小泉波濤子

小羊若草の香に醉ひて、　しばしを野邊に群るゝ如、
緑流るゝ大空を、　遙にめぐる白雲や、
平和の色に韻ふ哉。
炎帝翼さしのべて、　此の世をしばしつゝむ時、
紫閣白樓幾百千、　西のみ空に聳ゆこと、
莊嚴威ある高き雲。
前の世野邊の川の面に、　花をふくみて流れよる、
白鳥のむくろを見るが如、　流るゝ雲の色形、
影に無限の憂愁あり。
亂れ髪凄き狂ひ女が、　刹那の思さとこめて、
さきてとばせし白衣の如、　寒空高く散る雲や、

悲絶しき影のひそむらん。

比較的冬雲の狂女の裂いた白衣に譬へたのがよろしい、春雲の羊は陳、夏雲の襤褸はよけれど句に力なく、秋雲の鳥のむくろは寧ろ難でした（醉茗）

○夏菊

磐城　富田時子

日中起る雲の峯に、　夏姫乗りて來りけん、
色とり／＼の夏菊の、　眞夏の白日を花咲きぬ。
晨に淡き朝霧の、　蘼に花の夢覺めて、
幸多き身を謳歌ふ時、　人の夜てゝに甦る。
西に集る彩雲や、　色とり／＼に匂ふ時、
夕に清き白露の、　蘼に花の夢、結ぶ、
朝光、うつる白菊や、　白日に映ゆる黄の菊や、
眞夏の晝を花咲きぬ、　夏姫の輿、地に降りて。

夏菊、秋菊、何れも詩に入り難い、要するに輿を惹く事の少い花は菊であらうと思ひます、此篇の如きも必ず菊でなくとも興味があるやうです（醉茗）

○麥笛

佐渡　谷川桂月

目路はるかなる南の　ふる里の野は曠うして
かの夏草にうちむれて　さまよう野馬の嘶きや
牧場を出てゝ更にまた　南にはしる野の水の
思ひをさそふせゝらぎも　ながれて末の草間川
あゝ風ぬるき春の日を　柳の糸の小枝や
黒髪ながき君にして　げにわが野にも肖ひたる
夢おぼろなる夏草に　しばしまろねの手枕や
かへりてはまた麥笛の　愁をさそふひとふしよ
荊棘がくれに香をとめて　紅褪せし野の花の
名殘の春をしたひよる　匂たゆげの白き蝶
夏の光りのつようして　瞬きまみのしかすがに
仰ぐにたへぬ弱き子の　思もそこにともなへよ。

斬新ではない、寧ろ陳套の方でせうけれど、麥笛に故郷の野を懐ひ、夏の光の弱きに堪へずと云ふ詩情の濃かなるは、再誦却つて感興を深くせしむ（醉茗）

○黒雲

名古屋　小山かく子

バアルの信徒屠られて、聖なるエリヤカルメルの、
山に登りて曰けらく、「海の彼方を望み見よ、わ
が雨乞ひに開かれん、三年とぢたる天の戸の……」、
かく若者を遣しぬ。行きつ戻りつ七度の、終りに

使者の日けらく、『雲は見えたり人の手の、形狀をなして海の上に……』 風は起りぬ黑雲を、載て大雨を降すべく、民は狂ひぬ感謝の歌に。（列王紀略上十八章）

價値は原意にあるのですけれど、之を詩に採ったのは此方の手柄でした、わざと圏點をつけませぬ（評者）

○浦づたひ

千葉縣　綿貫滋子

大海原ははろばろと、八百重の波もゆふなぎぬ、
誰ぞ櫓を押しつ島かげを、漕ぎてぞかへる舟一葉。

夢、靜かなる大浦の、
磯にうまれて磯百合と、
なげきに染まぬ胸まろく、
海人少女とはなりにしか。

「都のともは云ひ寄りぬ、
海のうれひは大浦の、
眞砂にふるひ人の世の、愁は若き身を燒く」と。

こぞみな月の望の夜に、あれし苫戸になげき凭り、
運命かこちし都女は、波に沈みぬその夜さり。

海のそこひは深うして、百の魚くづむらがれば、
ひとりをみなのうら若き、魂はすまふにやすからむ。

うまれしまゝの黑髮に、馬醉木のはなの香はなくも、
かゝるゆたけき海の日は、浦回づたひにうたふなれ。

あるは大潮わきのぼり、海あれくるふ日はあれど、
智の魚罪の魚棲める、世の大波といづれぞや。

ああ綿津海は青草野、
海人の男等をみならは、
げに帆にのりてやすらかに、
波にかはるる牧の群。
玆にきよらの戀ぞある、
眞珠のごとく海のみやゐに。

景より情の分子が多いだけ、又物語りが含まれてあるだけ多趣多樣で、最も多き海の詩の單調を破つて居ます（評者）



大洋（賞外）　小樽南濱町　藤田武子

○蝶の歌

滋賀縣　文隆女史

朝風夢と野を吹けば、瓔珞ゆらぐ菜の花の、
夜毎の褥今覺めて、金絲銀絲の羽根ひろげ、
君美くしう舞ひ立ちぬ。
瑠璃と流るゝ里川に、君美くしの影うつし、

小鳥の夢を眺めつゝ、
合せて舞ふや何の曲。
花の香さつと誘なへば、
ひらり／＼と舞ひ踊り、
あれ現なに接吻するよ。
花咲く中に生れ出で、
地の上四尺けがれなく、
君は詩の子また春の節。
水がせゝらぐ樂の譜に、
君が血潮や湧きにけん、
翅休めてよき莖に、
花と運命を共にして、
いとのどやかに過すなる、

○夏の雨

德島市　小川なみ子

祈禱の窓におとづれし
『汚』れと『罪』をすゝぎては
こうの香ひもおさまりて
馬の蹄と夏の雨
鼻孔おそひし菖蒲
澱める澁はよみがへる。

聖者の『豫言』尊とくも
夏のもろ花露に咲み
翅かるげに笑はしく
緑りの木蔭水湧きて
草、獸びの葉は生ひて
『生命』を吸いて鳥たちぬ。

かくて雨霽れ虹射せば
蒼穹に『天帝』の光あり
うれしの雨よ、いみじくも
空氣は滑う新らしく
奇しうも玄妙の天地よ
こゝに萬有の象現へぬ。

○弱き我

長野縣　山田くに子

胸よ我胸何いたむ、
目を蔽ひては永劫に、
君待ちわびし無花果の、
優しみ顔の浮びきて、
君思ひては胸しむる、
など斯ふいたう悶ゆるぞ、
君をば見じと誓ひしが、
桀に夕月の淡き夜は、
御胸花野に泣かるゝを。
弱き心にたへやらて、
亂れ心の歌ぶりを、
君をへだてし羅の、
小さき水の彩さきて、
書きながしやる花舟は、
恨かよへる小流に、
みぞは近くも導ひゆく。

○淋し其の夜は

熊本縣　三浦文

淋し其の夜は星暗き、
茂みの小路を透しみて、
大なる筆朱塗りの、
神垣繞る大楠の、
幽冥深き眼の鈍み、
文術奪ふと戰きぬ。

淋し其の夜は月の色、
泡沫に似たる涼風に、
繞るゝ熱の游森は、
黄なりと見しが喘と打つ、
藍濃き柚の神の氣と、
消しぬ黄のみを添む如と。

淋し其の夜は欄の、
曉るともなき淡明り、
卯花、鐡と眺めしは、
兇る手に落ちし蝸牛、
血に染む武者のうら若き、
あらで紅なす若楓。

○夕燒雲

石見　牧岡惠子

龍宮よりか天上ゆ
鷗の彩羽ゆすりては
餘韻うするゝ銀鐙や
摺裳ひきたる七少女
涼しき風にあふられて
天の河より大海に
彩色うつくしき夏の雲。
紺青の海のはてしなう
波をなひ遠方に
舞樂はやみぬ、目もあやの
瑱玕刻むきざはしを
そよろ下り來るあて姿
ながしてうつす夕榮の

○勞働者の妻

千葉縣　高橋幸子

白々あけの東に、
天の勞働の儕らで、
合歡の夢搖る朝の蟬、
昨日も今日も同じ日や。

日を夜を繼ぐいとし夫、
眉に皺曉腰に種、
恙なかれの神頼み、
今日も昨日も同じ業。

○秋海棠

横浜　吉川霞峰子

百日紅の花木犀の花、
剝れし柘榴の紅深く、
里のうなゐに取り殘されて、
夕の風のをとづれ見へて、
小やみし雨は又もや細く、
鳴るか遊鐘響きにくれて、
軒の玉水湛へ溢れて、
古きに小瓶の秋海棠の、
うすき衣の襟かき合し、

砂地の水の清きにこぼれ
葉ごとの雫見るも爽けし
うら枯れそめし蚊帳釣草に
靜かにうごく雨雲の影
澄みたる水に紋波つくる
辿るやいつか薄闇の色
細くながるゝゆるきが中に
一花つみてなげつけやりて
何くか鐵のあなた見送る

○夜の賦

山口　柳井露花

黃金色に日は入りぬ
夜の大神は現れぬ
星に默示の光りあり。
罪や汚れやかなしみや
犯し領する夜の神の
人よ息めと虫の聲。
倚るや夕戸の欄に
痛さをほゆる胸の中
流れて星は西へ行く。

最後の征矢を山に射て
仰げばさゆる大空の

胸に抱けるわづらひも
秘密の腕につゝまれて

破れし戀をかこちては
神よと祈る心にか

○行く春

大分　工藤たまき

春の光の短かくて、
せめて今宵は終夜、
雨も音なき闇の夜を、
あゝいかにして佐保姫の、

若き命の惜しければ
ちり行く花に歌はんか
砕けて落つるふかみ草
春の車を止むべき

泥にまみれし花片を、
春の快樂を數へ見よ、
泡だつ酒に熱情に、
憂を忘れて歌ふとも、
少男よ君がもゆる頰に、
さえゆく春の色みては、

くらき火影にすかし見て
哀しからずや人の世は
ればりし舌をしめらせて
さむればもとりに歸へるなり
しばしはゆるせ我が唇を
若き愁のたへざるに

○詩　人

磐城　原田清子

貪慾あくなき花賣男は、
利鎌にかけて市に賣りて、
熱涙多く血にとみし、
守ひたりし甲裂もなく、
花に同情をよせし詩人は、
黃金の香に醉ふ罪の子は、
花賣男がゑひ眠るとき、
紫雲に乘りたる天つ女神は、
一卷の詩集と一片の花と、
やがて詩人が美しき歌は、

夏野を飾る白百合を
罪惡の酒に醉はんとす
詩人は花を守らんと
地主なりとてはれられぬ
愚なりとて世に嘲けられ
智すぐれりと人にほめらる
詩人が空の星になくとき
下界はるかに下り來れり
詩人に授けて影きえたり
女王が琴のしらべにのぼれり。

○瀧の音

品川　小林のぶ子

白絲たるゝ山影に
四弦のひゞき嘈々と
藍を流ふる瀧つぼに
銀漢くだる操きぬの
水は激して璧々と
谷にはおとの星川の
隙なく靄のぞゝぎては
狹霧に朝日かゞやけば
七彩浮ぶ水の色。

かぜの奏づる琴の音か
千仞ふかき音のそこ
たぎりて落つる瀧つせや
天つ乙女の戯れか
天の鼓の樂の音
自然の琴の音たかし
樹の綵り色まさり
神の彩色美はしく
永劫たえぬ瀧の音

文學士
沼波瓊音先生選

叙事文



天

○汽車の中

神田區三崎町三丁目一番地　大澤さりゆ子

久々にて瀧の川の友を訪ひ、其歸るさ板橋驛より汽車に乘りました、將にかくれんとする唐紅の夕陽が、青青とした麥畑の上に光線を投げて、飛ぶが如く私と共に南に走ります。

長らく田園の光景に接しませんので、故郷へでも歸つたかの樣な氣持がして、一種懷かしい樣な云ふにいはれぬ興味に驅られ、ジッと窓に凭れて眺めて居ると、やがて池袋の停車場に着きました。

上下の雜沓にふりむきて不圖向ふを見ると、アラ綺麗。板橋から共に走つて來た、研き上げた銅の金盥の樣な夕陽が、紫ばんだ遠山の上から畑中のばら〱松の枝を掠めて、前面のガラス戸に映り、そして夫れが又向ふのズーッと煉瓦塀を取り卷いた、大建物の巣鴨監獄の上に、旭のさし上つた樣に輝いて見えるのです、前者は應擧の筆の樣で、後者は不折のスケッチにでも有りさうな、實にいゝ景色!!!

恍惚としてあかず眺めて居ると、汽笛がピユッと鳴り渡つて此美景が徐々と動きはじめました。

驛の瓦斯燈を過ぎ、柳をくゞり、森にかくれ、竹藪の上に現れ、さては又飛ぶが如く走りて、大變化の活動寫眞を演じつゝ。

（評）夕陽の光まことに眼を射る如く描かれたり。

地

○病葉日記

丹波福知山字堀高橋方　青木はな子

七月一日、やう〱鷄が啼いた、先程の夢の恐ろしながら、起き出て窓を開けると、さと快い風の夜衣の袖吹いて、桃色に香ふ東空の美しう。眞白い雲の一團、西紺青の空へと走る。此の快い曉をどうして闇で悶てたかと可笑しく思はれる。二度目の鷄が啼いて、やうやう下女は起きた、顏を洗はで、竈の前に蹲り、十分間程も呆然して、漸く火を燒きかけた、けれど、そをだまつて、みたる我も罪深き者と思ふ。早いねと聲かくれば、まあと驚きて居住ひを正す、可笑し、昨夜、誰れに、惡戯されしか、墨、黑々と額に塗られて、燃ゆる火にあか輝りて、いよゝ顏の墨の可笑しくみゆるに、堪へ得で知らすれば、忙わてゝ顏洗つてくる、坊

ちやんのお惡戲ですよと云ふ。

七時、弟も妹も學校にゆき、寂しうなる、亦、今日一日をいかに暮さんかと考ふ。

妙子を連れたけれど、まだ眠つて居るに、起すに忍びず、枕元にて、昨日の新聞をみる。半時も經たりと思ふに、未だ起きざれば、そと身を搖つてみる。目と口の邊を、少し動かせしが目醒めず。思ひ切つて、搖り起し、抱き上ぐれば、暫し不思議顔であつたが、嬉しさうに笑みて、姉ちやんお話をと、此の兒、朝と、晩と取り違へてるのである。

朝飯のミルク飮ませて、我が居間へ、つれて來、『花守』を讀む、可愛兒、靜かにしてきいてる。

そと膝に抱き上げると、我が顔をみ守りて、姉ちやん、やゝちやんが居なちやると云ひて我が目を指す、さう、妙ちやんみたいなやゝちやんでなくつてと云へば、解らないと云ふやうな顔をする。

三時、妹が歸つて妙子を連れて行つた、後のさびしさに、外の道をみる、今來かゝつた、一人の可愛らしい妹に似た下げ髪の子、何思ひてか、ひとりほゝゑみながらいつた。見送つてると、燕の急忙しう目前をすぎて、前の家の柳の中へはいつた。またいやになつて、室に歸る、徒然なるまゝ、源平盛衰記を讀む『あはれなるかな、花に喩へし十善の御粧、無常の風に匂を失ひ、悲しいかな、月にかゞやきし萬乘の玉體、蒼海の浪に影を沈めおはする事を』以下百誦、飽くを覺えずである。

また泣かされた。かくて病床の一日はやうやうくれ初めた。

（評）書放しの筆つきなか〳〵味深し日記はかゝる躰こそよけれ。

女學生（賞外）　京都上京　東田操子



人

○池畔

上毛新田郡鳥之郷村　關根意磨子

雨につけ風につけ天地の靈妙を現はし、妾に慰藉を與へ、喜は共に喜び憂は共に憂へ、妾の無二の親友否、父母とも姉妹ともなるは此池てある、翠緑滴らんばかりの蓊欝たる松の大木、永へに新田氏の英魂を止むる金山の麓に、只一つポッヽり此池はあるのてある、建武の昔、新田義興賊軍に圍まれて此金山に立籠つた、所が賊の方では千早城の樣に、水攻めにする考てあつたので、之を覺つた義興、未だ水のある事を敵に知らせて、其

鼻を明かしてやらんとした、然し此巖嶮たる山嶺水は甚だ貴重である、そこで長い石の樋の樣なのを見出して、其て敵に見える樣に米を流した、不思議にも、其米は水となつて下に滴つた、其が即ち此池であると、口碑に殘つて居る、現に少し上ると、長石と稱して長さ三四間程の岩石が、蘚苔に埋もれて當時の事を語り顏に殘つて居る、池畔は老松森々と生ひ茂り、遠く望めば恰も、魔神の蹲してる樣で、國の爲め勇ましき死を遂げた英雄の勇魂が、凝つて此松と爲つたかと疑はれ、其枝は欝々として天を摩し、蒼々として池の面を蓋うてゐる、風も無いのに小松の音微かに響いて、盡せぬ古の秘密を私語やく樣、池の面はドンヨリとして小波一つたたずに、金錆の樣なものが浮んでゐて、丁度血を流した樣、日の光も松が枝に遮られて、池の面には達しないけれども、眞中の小さな島に生へた鵜の樣な矮松の影が、水の面に映つて血の色に綠を交ぜて居る、人の聲も鷄の鳴聲も聞えず、只聞えるものは梢渡る松風の音と、得知らぬ鳥の聲とのみ、實に人里離れた遠い／＼山奥の樣である、其靜寂な壯嚴な此池、自然と崇高の念が湧いて來る、さはいへ其間に、一種言ひ得ない慈愛とチャームとがある、溢るゝばかりの同情と燃ゆる樣な情熱とが含まれてゐる、妾は喜憂ある毎に何時でも此池畔に立つのである、一度此池畔に立てば、神の御懷に抱かれて、苦痛を忘れ憂悶を忘れ、希望も忘れ理想も忘れ、果ては自己をも忘れて、杳然と無の境に入つて、醒てる樣な眠つてる樣な、優しき神のみ歌は耳端に響いて、慈母の子守歌を聞きながら、乳房銜んで甘寢してゐる幼子の樣、花の霞に醉ふ胡蝶の樣、白雲の上の天國に遊ぶ樣、オヽ其時の樂しさ其時の嬉しさ。

世智辛い浮世の苦痛を受けつゝあるものは此所に來よ、池のみ神は其苦痛から脱れしむるであらう、はかなき物思に憂悶しつゝあるものは來よ、池のみ神は其の憂悶を慰さむるであらう、脱れぬ運命に失望しつゝあるものは來よ、池のみ神は其に或る光明を與へるであらう、妾は此池畔に立つごとに、斯く絶叫するのを禁じ得ないのである。オヽサブライムなる池のみ神よオヽチヤームある池の面よ。

（評）池の成立ちの不思議なると、忘我の境の神秘なると照應して面白し。

秀逸

○磯日記

鳥取　上山千重子

六日、梅雨晴れの磯館。久しぶり窓押せば、名もしらぬやさ鳥、金色の天かけりて、落ち行く彼方白帆三つ二つ、朝もやを分けてすべり來る、何とはなく清々しさを覺えた。午前中髮結來る、御祖母樣は高髷にと宣ふ、兄樣は大反對なり、結局あまり廂ならぬにとて、夏子卷にし、水色のリボンをかざした。午後は御祖父樣と能の衣裝の手入れする。夕ぐれ、隣の茂平爺釣葱一個携へ來て、ほどよき軒につるして呉れた、端居して輿を添ふる幾何！「爺やありがたう」「ドウ仕りまして」と、禿頭を撫でまはす、爺は私の愛好者（フエボリット）である。初夜つぐる頃東京よりヴアイオリンの糸が來る。

七日、今朝も天氣だ、木鋏を取つて何氣なく庭に立つと「僕の書齋の花瓶にもたのむよ」つて、兄樣の氣の早いこと、其の癖お花はいつでもひつくりかへしてある。とまれ心地よい朝露を踏みしめて、百合と夏菊を切り取つた。午後になると高子樣が入らしつた、あ今日は食道樂の研究日なのだ、すつかり忘れて居たつけ、各自純白の料理服に身をかためて、蕎饅頭の製作に着手した、三時すぎやつと出來上る。嬉しくつて互に笑くぼ深めつ、ホッと風を入れて居ると、いつの程にか兄樣が御臺所まで御出張、御毒味役とは恐れ入る外なし、一番美味さうなのを、高子樣の御家土産にと重箱につめ、其餘を一同に分配し、御祖母樣を上座に茶話會を催した、何か餘興をと父樣の發議て。兄樣はヴアイオリン、高子樣は琴、私は獨唱と定る。其内新鮮な魚を調理した夕食は、母樣より進められた。夕月淡く磯馴松をかすめて、夕なぎの海は至つて靜かである。

（評）羨しき御身の上。

○夕立の後　東京　さと子

鼓膜も破れよと許り、降つて居た雨が、はたと止んで太陽は白ねりぎぬの幕の中から、下界をのぞきはじめた、がま蛙がつはぶきの下から、殊勝らしい顏を出す草木の新緑燃えたつかのやう、行潦にうつるすゝきの葉を、心なくも踏みにぢる弟を、叱つて居ると、外の面に豆腐屋のラッパ、ねぼけたやうに聞える、木の間隱れに、友の家から立ち昇る烟、あまり暑かつたので、風呂でもわかしてゐるのであらう、其景色、まるで水彩畫だ、思ひ出したやうに時々雨滴れの音がする向うの霧に包まれた大きな松の木の方へ、飛んで行く鳥が二羽、後から一羽二聲三聲、なんだか心細くなる眞赤な李が落ちた、水溜りの中のも合せて二つ、お隣の小供が電車唱歌をうたつてゐる、家の弟も同じやうに、うたひ出す、蛙があゝ鳴いたのも一しきり。蝸牛は、まだ動かずに、無花果の枝にくつついてゐる、ジヨ

ンが尾をふり〳〵出て來たから、頭を撫てゝやつてゐると、座敷の方て、弟や妹が「姉さん御飯よう」、もう家の中は暗い。

（評）精細な穏む妙甚。

○四つ竹の主　愛知　石原田鶴子

人は皆、花見衣に身をやつす春三月の末であつた。日當りのよい四疊半で妹を相手に編物に餘念なかつた折から突然、キチャ〳〵〳〵と耳を驚かした四つ竹の音、妹はめづらしげに柴折戸あげて見て居たが、姉様可愛らしい子てすよ一寸來て御覽なさいと、わざ〳〵の御注進、云はるゝまゝにかいま見れば、成程見目美しい女の子、やう〳〵十か十一であらう古びた袷一枚に足袋もない、透る聲張り上げて、つく〳〵〳〵何をつく、旦那のお出かけ供がつく、供のあとには辨當つく、辨當のあとには乞食つく、乞食のあとには犬がつく、犬が食ひ付きや疵がつく、疵がついたら醫者がつくキチャ〳〵。皆笑ひこけた、自分は何となく哀れを催したので椽近く呼び入れ、お父さんあるのと問へば、お父さんねてるのや、お母さんは。おつかもねてるのや、わしはなあ、ほんとのお父さんもおつかもないのや。まあ可愛さうにどうしたの。あのな、ほんとのお父さんが目を病んだらなあ、ほんとのおつかがわし連れて今のお父さんと逃げたのや、すると又今のお父さんがわしばか連れておつかを置て逃げたのや、そんでわしはほんとの親なしじやわな、それにな、毎日貰ひが少いと二人でな、ぶつたり、つねつたりするのや。物語りながらほろ〳〵と落した涙。たへられずなつて皆が共に袖しぼつた。かくて小さい其手に十錢銀貨一つ渡せば驚いた樣な顔つきして居たが、終に幾度か〳〵禮して涙納めて嬉しげに立去つた。

其夜臥床に入つてからも彼の女の姿が目の前にあらはれて、春とはいへ此夜寒むを、木賃宿の一隅に、薄い夜具にくるまつて、今頃どの樣な夢を見てるだらう、自分は中々、眠り得なかつた、側を見れば二人の妹は夢安らかに、ほゝゑんでねむつて居る。

（評）子の物語聞くやうなり。

○うぶすな　神奈川　芳子

故鄕出てゝ三年目に初めて、戀しい懷かしい夢寐にも忘れ得なかつた故鄕の土を踏んだ私、日頃寄宿舍の窓に南五十里夕雲低き果を眺めては幻にのみ畫いて居た故里と、今實在の此故里との間にどれ丈の差、どれ丈の矛盾が有るか見究めたいと思つて、夕餉後是非一緒にとせがむ弟妹をすかして。と云ふのは心ない幼い者にかゝる夕の興を殺がれるのも少からず恐れたから、緒のゆるい庭下駄を引かけて浴衣の袖を風に吹かせ乍

らぶらりと裏の枳殼垣を出た、あゑかな夕映えの色の薄れた黄昏の空は山際暗く、連山の翠微は今夜の幕に閉ぢられようとして一きはこんもり、こんな黄昏に彼山奥に分け入つたら、草色の衣を着けた山の精が屹度私を小手招ぎするだらうと思つた、稲田は青い浪をよせる、路傍の草叢に咲きまじる月草の花を數へて一つ〳〵摘みため乍ら、路の二股に成つた所で何とはなしに立ち止つた、眼を上げると右手に産土神社がこんもり、引付けられるやうに足は其方を向く、花崗石の鳥居を潜つて敷石を踏み乍ら様々の思出を胸に繰返して云ひ知れぬ懐かしさ、三年前の産土神も三年經つた今の産土神も思つた程に變つて居ない、變つたは私只の知らぬ花崗石の燈籠が誰人かによつて奉納されたのと。神木と崇められて居る大銀杏の注目繩が新らしく成て、諸病諸難に祈願をこめた善男善女の捧げた色々の繪額が殖えたばかり、段段染の鰐口の綱を引くとから〳〵とけたゝましい音が廣い夕の色の迫つた神の庭の寂寞を破つて、向うの山が谺を返す、それも消えると又元の寂寞に返つて夕風そよろ森の梢をゆるがすばかり、ぢつと耳をすますと風の加減で泣く兒をすかす守唄の聲が切れ〳〵に遠く聞える、私も昔は守女の背に朝に晩に聞いても眠くなりさうな調子のいゝ守唄をきかされて安らかに眠つた事を思ひ出してうつとりと成つて居ると、拜殿の庇間からぱた〳〵と黒い影が飛び出して夕闇の裡に紛れた、蝙蝠なので有らうか。



出勤後　（賞外）　神戸水木通　春田愛子

御手洗の中に流るゝ光が有つて煌めくと見るのは、知らぬ間に月が出たので、仰ぐと果もなくさえ〳〵と澄み切つた空に新月がほの白くほの青く、天の川は白く南より北へ、其流に棹す人の櫂の雫の飛び散つて煌めき出てたとやうに星がまばら、去りがてに鳥居の此方で又振返つて合掌の、我世のさちを神に祈りつ、斯して私は産土神森をはなれた。

(評) 初めに空想の故里と實在の故里との差を見むとありて、後段その事無きは惜し。

○夏の夕　南多摩　中島縫子

涼風や十里の青田すべり來る

綿を千切つた樣な白い雲が、遙か向ふに連なれる山の上に動いて居たが、何處からか黄色の雲がヌーと出ると、間もなく其の中から茜色の夕陽は、野となく森となく丘となくまばゆい程その光をなげかけた。鎭守の

森で喧しく日暮しが啼き初めると、何處からか清らかな馬子の唄も聞える。時々思ひだした樣な涼しい風がまだ一番草も取らない左手の廣い青田をすべりながら吹いて來て、丁度果しも知れぬ青海原の小波を見る樣である。

野に佇む瓜盗人や夏の月

夏の夕は既に暮れようとして、今しも東の空を隈取つた眞黒な森の間から、圓い嫦娥の顔がその最初の光りを、夜露の深い一面の瓜畠に漲らして居る。森に近く閃々する火影は瓜畠を守る與作の一軒家であらう。と灯火と自分の眼とを結んだ絲を、眞黒な怪物が唐突に切つた。心を落ちつけてよく／＼見ると、それは稚兒を脊負つた一人の女の影であつた、その影が恰も盗み足に入ても來はしないかと云ふ風にためらひながら、瓜の葉の繁みに隱れた。

水打て一家涼しき夕餉かな

涼しい月の光に誘はれて無意識に歩んだので、身はいつしか生垣のつゞける草家の側に來た。垣の隙間からのぞいて見ると、裸の男が水を打つて居る、紫陽花の垣根にしなだれかゝつて居るのに水を打つたので、花瓣に紫の露の玉が一ぱい宿つた、それがぽたり／＼と落ちて如何にも涼しい。暫くすると一人の小供が、徳利をさげて家に歸つて來た。燃えのこりの蚊遣の淡い烟が折り／＼立登る邊に、平和な夕餉の宴が開かれることであらう。

灯は虫に取られて寢たり草の宿

涼み臺の上で大勢で面白いお話しをして夜を更かしたが、早やお隣りの春江さんや甚作翁など皆歸つて了つた。空には月影一つさも淋しさうに照つて居て、獨り蛙の月に啼く聲が喧しい。座に歸つて蚊帳の中から聖書を繙くと、心が自然と澄みゆきて恰も紅塵繁き人の世をはなれて、遠い仙境に遊ぶ樣な心地がする。ページを繰つて次の章を讀み初めると、突然！灯火に虫が飛び込んだのであらう、消えて眞暗になつたが、目がつかれたので其の儘寢て了つた。

（評）面白き評釋とも讀まる灯取虫に聖書はちと釣合はぬやうに思はるいかゞ。

○夏ぐさ

門司　岡　芳子

夏とし云へば、只むげに暑くのみ思ふものから、家居堪へがたく、あるは海濱を思ひ、或は瀧の邊泉の下をしたひ、あながちに涼しき所のみもとむれど、さりとて住みなれし家の内を涼しくもてつくろひ、庭の面には時にあひたる草花を栽ゑ、盆栽など、いと涼しげに並べたるも與多からん、これやかれやをながめつゝ、下手ながら、ヴワイオリン奏づるもたのし、團扇などは要らず。

（花菖蒲）　さは立ちて品高からねど廣やかなる庭の面

に、幾はたとなくおし並べ、うゑわたしたるさま、いとばえあり、ことに曉の眺あかずよし。

（正午）　日は今なかばなり。梢の蟬の聲いそがはし、隣家の井戸のあたり俎の音高くひゞく、ひるげのまうけにやあらん、裏の櫻樹に童一人忍びよるを見る、何かと思へば蟬を捉へむとするなり、あはれ短かき虫の命を、心なきは童なり。炎けたる路は行く人も少し、妾は文壇の投書に苦む。

（火影）　夕立は今しがた止みぬ、ぬれたる紙に畫きし樣なる夕月は、鎭守の杜の空にあり。里の小川は水增したり、石橋を渡りて來る農夫が簑笠の姿も、一つ二つ見ゆ。しばらくして彼方の山かげの藁屋に火かげ一つ點れり、家内にては今、やう／＼夕餉にとりかゝりたるならん。

（夏の虫）　夏の虫とて厭ふべきものゝみにはあらず。傘ひろげたる如き芭蕉の葉に、同じ色なせる雨蛙の、うづくまれるを手にて輕くゆれば、靜かに他の葉に住みかふるいとをかし。朝顏の蔓、物干竿などに、おぼつかなげに步める、蝸牛は、誰も惜まねば、恐れんともせず。

雨の朝、霧の夕、庭の檜葉、杉などの枝に、白く玉を宿せる、蜘蛛の巣の見えたるまた云ひ知らぬ趣あり。

（評）夏の虫最妙なり。

○雷後

群馬　柳つぎ子

今迄荒れ廻つて居た雷が大分靜になつて風も止み雨も小降に成つた樣だから、恐る／＼頭を上げて室内を見れば、神棚に供へて有る燈明は朧に室内を照して、香ひ高く舞ひ上がる線香の煙と共に何となく神々しく見える、家内五人は座敷の眞中に圓く成つて耳を掩うた儘、お名號と高天が原を交もとなへて居る、自分は外を覗くべく戶に寄りかゝつた刹那の電光一閃戶の節穴を貫いて目も眩まん計りに自分を射た、續いて起る雷鳴は殷々として耳も聾せん計り、自分は思はず耳を掩ひ目を閉ぢたまゝ直ぐ其場へ……しばし夢中……「アラ虹ガ虹ガ」と往來で小供の呼ぶに氣が付いたが、先つきの一つに懲りて出て見る勇氣は無い、漸く人々の騷ぐに勵まされて出て見れば驚いた、庭一面の大洪水軒端に掛けて置いた簑は庭の眞中に吹き出されて泥まみれ最早用に立ちさうもない、半ば熟して枝重さうに垂れて居たすもゝは中途からへし折られ垣に咲き初めた白百合は哀にも雨に打たれて地へへたばり付いて居る、何處のだか餘程の忠勤らしい麥藁帽子が一つ水溜に泳ぎ廻つて居る、からもう大亂痴氣、雨は未だ止

まぬが五六十尺の高さを通る薄黒い雲は山の端に尾を引いて東へ、東へと大急ぎ、虹の掛橋は美しく五色に彩られて、天神山の麓から茶臼山の頂に半圓形をなして二重に掛つて居る。自分はしばし恍惚として居たが及ばぬながらも此の塵の世を去つて此の自然のなせる美くしき橋を一度は渡つて見たい氣もした、虹の色漸く薄れ行くにつれて太陽は西の方八幡山の麓で焔と燃えて居て、天神山茶臼山に目眩ゆい程眞赤に彩られる、彼方此方に起る日ぐらしの聲、早や、里の小川には雜魚取る村の童、鍬を肩に畔路をさまよふ農夫、など中中の奇觀である、やがて日が沈めば、日ぐらしの啼聲も止んで、四隣は薄黒い帷幕に包み去られて寂としてしまふ、只時得顔に啼く雨蛙の聲計りである。

（評）室内の光景却て妙なり。

○ころも更へ　靜岡　喜惠子

しどけなき寢卷の前をかき合せたまゝ、とけかゝつた扱帶を結びもせず、直に座る鏡臺の前、密な小櫛でなでつける花月卷の前髪、紫のリボンを樺色のと挿しかへて、鉢のを一輪折取た露の白薔薇、つとさし込んで、もう頭は宜いの、襟は少し濃く、み園の雪を水でといて、あつさりと刷けば、ひや〱として心もちの快さ、紅も入れてぬれ手拭で押へてお化粧は出來た、立上つて衣桁のふだん着をするりと下ろして襟まはしをちつと見ると、緋ちりめんへ菊花を白抜にした襦袢のも、紫の矢筈飛白の着物のも、白粉垢がうつすり。

雨上りのあさ日がぼか〱青葉を透してさしこんで、いつしからうつらふ夏氣色に、今日の温さも思はれて、いつそ單衣にと簞笥の引だしへ手をかけた。

どれにしようと取出して見くらべた中で、一ばん派手な英ネルのかつを縞のにきめて、肌着はとき色メリンスの通し、ゆきを合せて重ねて、ぬくみ深い寢着をすつぽりぬぎ、手を通す夏衣のかる〱と心地よう。淺黄ちりめんの腰帶でゆるく結へて、帶は海老茶繻子と紅入友禪の腹合せ、お太鼓に大きく、緋絞匹田の帶揚て脊負いあげて、少し身をもぢつて後ろをうつす大姿見の前、紅い花模樣が大きいんで帶が少し派手過るわね、「秋ももう十七、昇樣さへおいやでなくばねえ」と庭を隔てたお祖母樣のお部屋から低い話聲、姿見にうつる姿の顔は見る〱紅のやうになつた。

（評）厭味あれど面白味もあり晶子女史の歌に似たりといはむか。

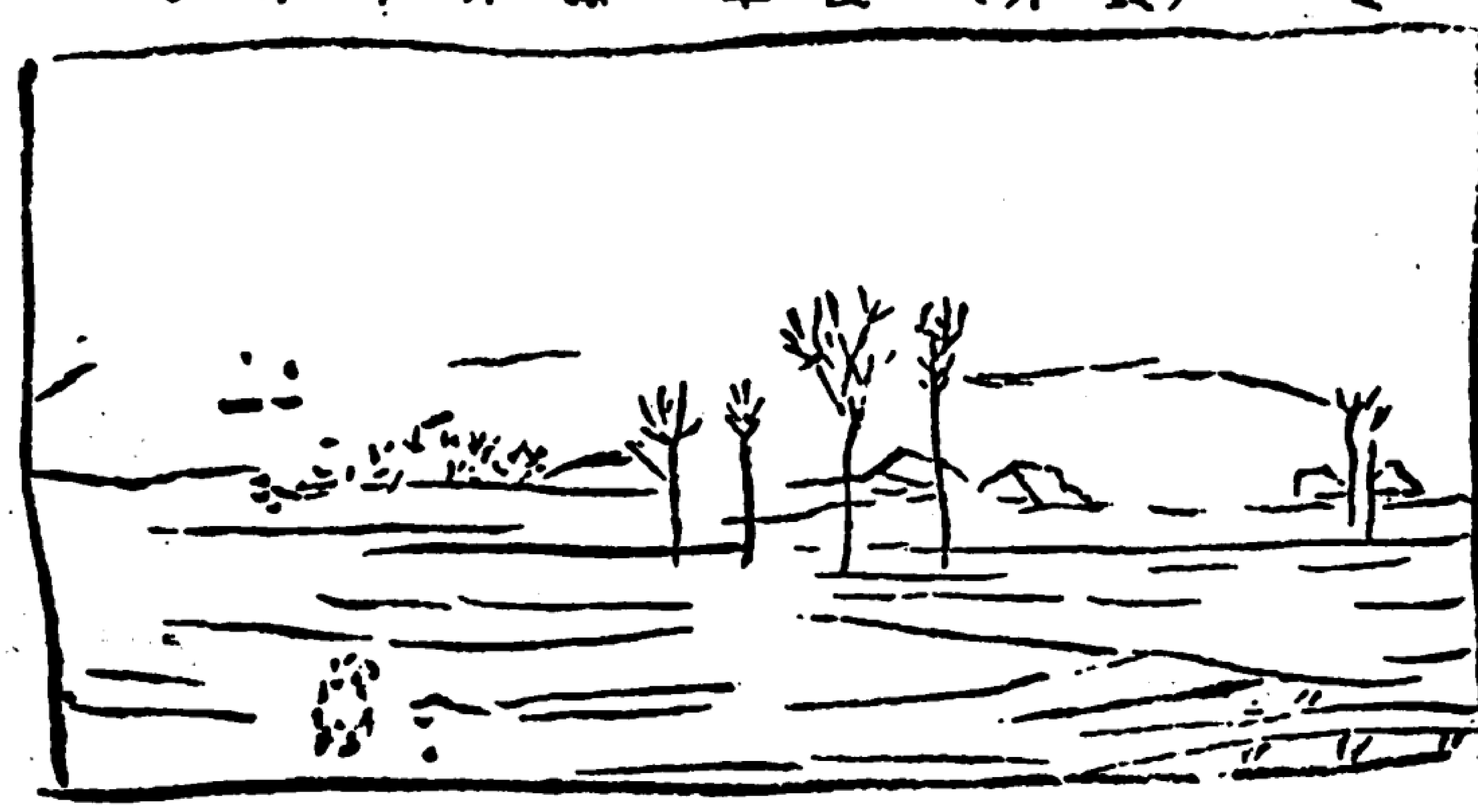
○村役場まで　陸前　高橋花子

手紙を役場まで持つて行けと、姉さんの命で、朝飯を

食ふと直ぐ支度にかゝつた。まさかこの羽織では役場に行かれまい、さう下駄の緒も切つてあつた。帯がないが姉さんのを締めよう。さうかうしてゐる中に最早十二時近いのである。それから家を出た、雨降のあがりで、道も思の外悪い、畑の中を行く、馬鈴薯の白い花が最盛りに咲いて居る。西には雄神と云はるゝ須川嶽は靄に包まれてかすかにその頭を空に突き出して居る。

役場の前まで來ると、何圓何十錢なりを讀んで居る嘸忙はしからう。小使室に一寸休み手紙を渡して歸つた。森ヶ原までくると、靜さんに逢ふ。村では櫻といはるゝ靜子さん、今日は何處に……?、何と言葉をかけようとは妾を向ふにみとめた時の妾の考なので……、いつもやさしい福々した顔に愍浮べて、「アラッ誰と思つたら花子ちやん」、妾綾子ちやんと思つたの……、何處に御出と愛嬌のない言葉できくと、「國子ちやんに一寸用があるので」さうですか、御歸りにはきつと寄つてくださいね、私によい繪はがきが澤山きてゐるから、左様ならと別れた。

冬（賞外）　淺草　藤井華津子



家の近くにくると、雨がざつと降り出し木の上の雨蛙がキャッ〳〵とないてゐる。おゝぬれてはこまるよ御母様は晝食の調理にいそがはしからう。

（評）歸途少し物足らず。

○散歩　横濱　長谷川波南子

あまり考事をしたせいか、少しく頭痛し、何だか氣が鬱々して來たので、丁度今日は野毛の大神宮様の縁日なる故、ブラブラ氣まぐらしにと、家を出る。

妾は櫻木の澤山植ゑてある日の出町を過ぎ、何時もゝ賑やかなる野毛町を、此に向き二丁許り行きて、右に曲り、二ッ三ッの段を上る、其處には不動様の御宮がある、其前に立てば、實に横濱は一目である、高く聳えた正金銀行、廣い船渠、長き停車場、俗に言ふ山の手の風車女學校、長蛇の様な堤防、内外の軍艦、商船等、恰もパノラマを見る様である。

不動様の上が、即ち大神宮の社で、大なる鳥居がある、數十の段の左には、櫻木が澤山ある、段を上れば、正面に社は嚴めしく建てられてある、妾は大神宮を拜し、左に折れる、其處には、日清戰爭日露戰爭に、名譽の戰死をした士卒の紀念碑

が、空高く建てゝある、妾は此れを拜す、其中に大分心地が快なつたので、そろ〳〵歸る。

商人は野毛通りの兩側へヅッと、店を出して居る、手品師が小供を合手にやつて居るかと思へば、十五枚十錢の繪葉書を、大聲出して賣て居るし、此方では飴屋が、忙がしさうに飴を切て居る、風船屋が、立て客を呼ぶ、古本屋が店を開き始めて居る、側でおでん屋がキョロ〳〵して居る、一寸法師の見世物、指輪の店、田舍口調で惡口を言ふ陶器物賣、時々手を拍ては、人を招く蓄音器の店、植木屋等數へきれない程、種々雜多な店が出て居る、妾もツイ、あまりの賑やかさに、釣込まれて、日の出町を通り過ぎ、吉田町へ出てしまふ、時は正に六時半、妾はそれから歸宅すべく急いて歩む。

（評）横濱の寫眞帖。

○松島の夕立

石川芳子

汽車にて仙臺につき、鹽竈を出帆して松島に向ひぬ、折しもあれ、墨を流せし如き雲の、忽ち滿天に崩れかかりて、物凄きまで暗うなりぬ、鳴神の音おどろ〳〵鳴り響きて、劍の如き稻妻閃き渡り、忽ち葡萄大の雨粒パラリと額を打つかと思へば、またしも、雲踏み破る雷の一聲頭上に轟きて篠をつくが如き急雨一しきり、沛然、此方の島を過ぎ、更に彼方の島を襲ひ、松を越えて、又松にかゝり、やがて、浦の方より明るう霽れ渡れば、歇みしかも蓬窓の中より出す顏に上りきはの白雨二條三條かゝりて、あゝ夕立ははや陸上に進みゆきぬ、對岸は今や雨の音の凄まじく、森も山も宛ら靡越に見るが如し、時に入り殘りし夕日眩きまでに射來りて、見る見る半輪の大虹は、彼方の島の根元より立ちて、松を彩り、白帆を染めなして、その一端は遠き山邊の天の一方に跨りぬ、瑞巖寺畔に船を繫ぎし頃は、空さりげなき十三夜の涼月、淸く〳〵澄み渡りて、松青き島、島多き浦、名にし負ふ八百八島は、正に金波銀波の裡に包まれ了んぬ、漁火散る沖の方より吹きくる風に、露やら玉やら、はら〳〵〳〵と落つる月の下、松の陰、天つ乙女の舞ひの袂を飜して立ちにけん、松の梢には小琴の調べぞざんざめく。

その歸るさ、月淸き夕、平町を發したる汽車は、幾度か暗き隧道を出入して、山を縫ひ、海に緣り、忽ちにして松林凉風を車窓に送り、忽ちにして波濤明月を浮べて迎へ、時に削立千仞の間を過ぎりて忽ち暗く、時に白砂青松の裡を走りて忽ち明かに、風を月と山と水と、極めて多趣多樣なる景色を送迎しつゝ、夜ふけて磯原驛につきぬ、曙色を賞せし二つ島はいかにと見渡

せば、濱千鳥の聲、月に寂しく、漁村の燈火は豆よりも小さし。

（評）活寫、繪に勝る。

○蛙の喧嘩

名古屋 宮脇俊子

藻の香高き風一渡り……。偶と、先の程愛ちやんの、水鐵砲で矢鱈にちう〳〵やつた水の、かあらぬか、青葉に宿る雫の、はら〳〵搖られて、ぽつりッ、夢の額を打れて愕、と釣床上。

見廻した時沖遠く、水や空、空や水なる、あれ、あそこに鷗飛ぶ。

茜さす空や落日の香に醉うて、美しの眺よ風を孕んで往きかふ白帆、近くは漁船の曳き上げてある、濱の夕暮は風清く、日中よりは打寄する浪の、音も高く、汀邊白く泡と散る。

避暑の、うれしさは實に夕暮です。朝々の風に裳裾弄らせつ、ざく〳〵砂濱を辿るは可いはいゝけれども……、それはさて、妾はまア、つい今し方こゝへ上つた許かしだのに……と、其邊を見廻すと、樹は些し茂つてるけども蚊は居ないし、小い淺い池があつて、緋鯉や龜を見たから明日は愛ちやんかえとるんだつて……と偶と氣が着くと、おかしい、蛙が二疋居て、あれッ、喧嘩、蛙の喧嘩です。

これは、と瞳を据る上に妾のあるとも知らず、呼吸を計つて、大きさも同じ位の、二疋がパッと飛び突き合ふと、眼玉パチ〳〵、あの手で頭を摑み合ふ、うちに同躰に轉ぶと又、別れて二疋睨み合ふ……また摑み合ふ、轉ぶ、別れる、とまア這麽事ををかしい三遍も繰返したか、四遍目——今度こそはと烈しう組んで居つたそれが、漸々緣へと寄り行くうちに、どちらが何うやら、どぶん、と許り二疋。

小波ゆら〳〵池へ落ると、その態！、あわてゝあたふた、辛と淬へ泳ぎ上ると、けろりッ、一疋、頭を撫て相手は、と見る片方は、向うの岸へと泳ぎついて、これ又きよと〳〵見廻して居る、其時で。

『姉さん〳〵』と消魂しう、母家で妾を愛ちやんが。

（評）鏡花好きと見えたり。

○夜の外壕線

赤阪 森ふさ子

蚊を瑕にして五百兩といふ夏の夜こそ心行くこと極りなくそゞろ歩きの身はいつか興に打ち乘りて溜池橋に至りて電車に乘りぬ、露を浴びたる葉櫻は其影しつとりと地に落ちて動くと見れば恰も水晶の玉なんどのまろび入るべき心地すなる、日吉橋に人影珍しく絶えて密樹深く繁れる山王臺にはいづこの草間にか蟲の聲して細き階段を照して瓦斯燈はふもとに眠げなる光を投

げたり、閑院の宮邸の御塀に當れる木の間も梢のさゝやきに送られて見附を右にいつしか小波寄する壕邊を危く走るなり、電線より放たるゝ蒼き光りはつと走りて小さきサーチライトとしばしを輝きつ、涼しき風は絶え間もなく油氣なき髪をこぼして其心地よきこと浮き上るばかり、其しるしにや前なる紫紺の袴長う垂れ給へる令孃のお頭次第に下りきて前髪に結べる水色リボンの明らかに見え來りぬ、汽笛の音を迎へて四ッ谷見附近うなれば我もいつか睡魔に誘はれて堪へやらず、叔母上のお住ひには未だ間もありと知れど、早々に下車なしぬ。

（評）東京電車沿道中最風景に富める部を寫されたり、字句なほ洗錬を要す。

○精靈送り

福岡　濱中かた子

文月十五夜魂送る夜半なり月影さやかに八重葎にも障らず葉末にはいつしか露置き添ひて風なく浪なく洸々として夜は更け行きぬ、閼伽汲み替へ燈明掻き立てつゝ靈前に額けば今更にいとゞ名殘の惜まれて生ける弟にも別れむやうなるたゞ漸々に氣を取り直し樊火手握りて河口にと出でつ、折しも一團の黑雲は嫦娥を呑んで海色闇澹、鮎翠の如き三里松原は淡く模糊として夢のやう黑ずみ立てる辨天の瀧一點燈火のほの見えて絃の音斷續初秋の風に宿れるは吾に同じき人あるべし、此處彼處好き程の場所に靈船下させ燈籠吊しさて浮べんとすれば復も湧き來る別離の惜に離しともなき小さき靈船、西方淨土の道ながら闇き冷たき中有の空獨り行くらむ心の中如何ならんと行衛も知らず思ひ遣りつ、やう／＼に經誦し終り曇る眼に打ち見遣れば風なきに燈火餘搖ぎて立ち登る線香の烟も五彩の雲のやう、觀音臨終の姿して亡き弟の乘り込めるらむ心地せらるるに黑白なくも露ぞ置き添ふ袖の上、さてしもあるべき事ならればと思ひ惱みの纜斷てば有情無情船は得去らず暫時岸邊を漂ひしがやがて泛々として流れ出でつ、波のまに／＼一高一低搖々として沖に去り行く靈船の灯火やがて螢火のやうになりて渺懸の岬を廻ると見れば俄忽西風一陣颯と音して靑光一條戌亥の空に流れつ。

○銀河

石見　千代延俊子

自分は今里の翁にをしへられた様に、とある急流にそうた街道を辿つて取るのである。急激なる奔流の、一頓挫して折れる所は、丁度、瀧をかけたやうて、それが薄淡い色の月の光を浴びて、雪の様な一帶の玉を濺してゐる狀は、夫に淵壁の寂寞を破るさまといつたら、何ともたとへむ方ない心持がする。

さと夜の風の吹き來る度に、小笹の露が、はら／＼と散るなど、あたりは靜閑をきはめてゐる、行手の方の山々は、薄衣を被つた様にぼうつとしてゐる星の光われは顔に煌めいて、一帶の銀河は、西のみそらに横つて居る。夜もはやふけたのであらう、草の葉末に置きわたす露は、月の光をうけて、衣の袖も、何となう濕つて、一入寒さが身にしむこゝちがする。何處の里であらう、犬の遠吠、長く尾を引いて、物さびしいやうな氣がする。色々な空想に耽りながら辿つてゆく程に、自分の訪れんと思ふ家も見えそめた、薄黑い庭の木と共に。と見れば、一抹の浮雲に月は隱れて、折節、星二つ三つ銀河を横斷して流れ去つた。

○故郷日記

女の子

花の散り初めしも昨日とのみ思ひ居りしに、歳月夢の如く去りて、早や夏も半過ぎとなりぬ。

明日は愈々故郷に歸る日なれば、足のはこびもそわ／＼しく、土產物などとゝのへてさて故郷の事など思ひ出づれば、只嬉しさのみわき出てゝ絕えて眠られざるも苦し、故郷には戀しき父母のさても同じ思ひに待ち給はんに——

＊　＊　＊　＊　＊

昨日漸く着きし許なれば未だ顔出にも行かざるに、見舞にとて人多く來

りぬ、我は旅の疲れのあればか何日になく眠り過して妹にゆり起されしもはづかし、顔洗ひ口嗽ぎ等して漸く出で來れば、見舞の人の我を見て等しく頭を下げつ、我は只言ふ事もなくて迎へとりぬ、見覺えあるは二人許知らぬ人のみ多くして、何とも言ふべき言葉なし、母の答へにこそその人とも知れば、髪など分けて鹿爪らしく見ゆる人の昔を思へば、彼長松が事など思ひ出でられて可笑し。

我故郷を出でゝ八年短しと思へるもさてなか〳〵に長し、知れる人の今は世に無きも多かり、庭のあたりそゞろ歩きするに家の作りさへ所々變りたる、塀端近く植ゑありし梅の木は影だに無くて、松の葉のみ緑深く茂りあひぬ。

午後よりは伯母の家に行く都合なりしを更へて、見舞の人々と打ち連れて程遠からぬ裏山に行く事とせり、辨當など用意しつゝ連れ立ち出で行くに、道々遊び戯れ居し子供等のいそぎ走り來て挨拶する愛らしさいひ知らず可愛し、暫くにして山につきぬ、峯の社は昔の儘ながら山の景色のいたく變りたれば、知らぬ山にも來たらん心地して幼き頃はしたしき友どち集ひ來て遊び戯れし、其山としも思はれず、それより彼方此方と見廻るに時鳥の近く鳴くも興深し、都にては絶えて聞く事なし只何事も珍らしく思はるゝが我人の心がらなるべし。

日も暮れかゝりければあかざれど歸りぬ、今日一日の樂しさ思ひうかべられて眠られず、さて今宵の夢には何かあらはるべき、明日は日和にもやあらん青空一面只星の影のみ。

○夏日の田園　群馬　飯塚美起

一

朝の風こゝ地よき草苅りてのかへり路、日はいまだ昇らず、晴れゆく霧のまに〳〵村長殿の白壁、土橋の柳、さては馬引出す童のかげもあらはれつ。

家づとにと折りて籠にさしたる白百合の露をふくめる姿やさしう、清き香鼻をつく。

二

苅りたる草は飼馬に、摘へたる白百合はやさしき姉の手にてはや文机の瓶にさゝれぬ。

今日の仕事は庭の草とりと定まれば、弟をうながして、菅笠片手に下りたつ。

三

去年横野の叔母よりもらひ來て植ゑたる夏菊の草の中にも生ひたちて、さても美しう咲きいでたることよ。

手に持ちし鎌投げすてゝどつとばかり草に坐すればそれに驚きてか紫陽花の葉かげより黒く大きなる蝶は翩翻として飛びたち、やがて築山の彼方に見えずなりぬ。

四

一日の業も終りて瀬戸の小川に足を洗ふ。

蜩のこゑいつしかやみて、友の家よりははや夕餉の烟ゆるやかに立ちのぼりつ。姉さんかぶりの乙女節面白ううたひつゝかへりゆく。

家に入りて衣を更ふ、花瓶の白百合やさしうほゝ笑みて我が一日の勞をなぐさむるが如し。

五

晩饗も終りて机にむかふ。

風おとづるゝ東の窓、かんばしき香をこぼす白百合のさしいでし月に照らされたる實にけ高き神々しき姿なるよ、誰のすさびか笛の音きこゆ。

涼しき月、涼しき風、涼しき笛の音、涼しき花。

あゝ涼しきはわが家の夕べなるよ。



踊（選外）　高松　瀧きみ子

○白百合　伊勢　岸うたの

○

おゝ白百合私はこの白百合といふ語を聞く毎に、一種いふべからざる感想が胸に湧いて來て、いつも愉快で堪へられないのです。

何故だらうとの疑問はこの感想について起つて來るのですが、これには

いつも、適當な解釋を下しえたことがないのです。凡そ花といふ花の中で私は白百合が一番すきて、極端にいへば、白百合は私の命であるので、あの純潔な色、清潔なかをり、白百合は決して地上のものてないのです、どうしてあの白百合が、この低い／＼地上のものてあるべき筈がありませう。さやう、白百合は決して地上のものてはないので、白百合はたしかに、薄命なる天使に外ならぬのです。

○

夏の朝、見はてぬ夢のあとを逐うて、そゞろ裏山の森にさまよふと、木と木との間には夜霧がほの白う、恰も羅衣の襟に漂うて居る。涼風が一陣、葉末からは朝露がほたり落ちて、ひやりと袖にはいる、その刹那、私は神の子と化して了つて、すてに人の型を脱して居るのです。幾百年經たとも知れない程の杉木立、木々みな飄々と天を摩して立つて居るその下に、一つの小さい泉があつて。地中からは、水晶の碎片てはないかと思はれる水珠がひくい樂を奏しつつ絕えず湧き出て居て、その傍に、三本の白百合が、泉をまもつて居るやうに咲てゐて。折しも、木の間を射透した眞夏の日の一條の征矢が、その水に反射して、現じ出す、金剛絢爛、白百合は纜を得たかの如く、天を仰いて唇を動かしながら、一齊に神の德を讚美する歌をても謳ひ出すかの風情。私はかゝる聖き地に足を踏みいれることが、何か罪惡でも犯す樣に思はれて早々そこを辭し去つた。

○

私の家から二三町はなれた所に、幾代か前の古屋敷がある。そこに一面名もしれぬ雜草が、いやが上にも生茂つて居て、わたくしは今年珍しくも、その雜草の中に白百合を四本ばかり見つけたのです。併しその時は、未だほんの蕾てした。その後といふものは、私は每朝每夕、その白百合を訪ふのを日課のやうにしてました。それから十日ばかり。…………經たある一夕、私はその白百合が蕾を破つてほの白う草の闇にきらめいて居るのを見て、私は愉快／＼堪へられなくその傍に暫し恍惚として佇んで居ますと夕風が一しきり、大輪の白百合はゆら／＼と二三度うなづきました。

ふと、われに返つて見ると、白百合の清烈のかほりが、誰となく秩となく漂うてきて、次の瞬間には、全くその香につゝまれて了つて、恰も天上するかの如く思はれました。

○

さやう確にさうて。白百合は天使に相違ない。あの純潔な白色、あれは何處までも、世の穢れに染まない、清淨無垢な彼の心を現はして居るのです。そして、夕方、人の子がパチリとして眼て空を仰ぐやうな樣子を白百合に見ることがあるのは、いふまでもなく、かの高い／＼天にある、父なるみ神の旨をうけるのです。私は白百合を思ふ每に、小さい天使が、何か私の耳元て囁いて居るやうに思はれます。

あゝ、愛らしき天使の化身なる白百合よ！　げにや、白百合は私の命といつても可いのである!!

然り女子の守る可き女神なればなり。

◎雨中の田舍

讃岐たけ子

げに雨中のけしきほど、おかしきはあらず。五月雨のいく日もふり暮らして、文の卷々繰りかへしつ、いつしか倦みければ、小窓おしあけ外見やりぬ。いとしめやかにふる雨は軒ばをうるほし、間遠に落ちくる玉の水は庭にたまりて、さながら小なる池のやうなり。

楓の濃き若葉のもえ出てたるが、思ひかけぬ青葉の中よりさし出て、大きやかなる松に、藤のさきかゝり、風になびきて時々露の白玉を散らし、垣根のうつ木の苛やかに茂りあひたるもとに、白うさきたる卯の花など、共に美くしく、繪にもかゝまほしき風情なり。

遠く見やれば、西につゞける山々皆白き雲につゝまれて、麓の小村のみ薄う見え、なちこちの桑畑には、燕の雨にぬれてとびかふ樣またをかし。にごりし小川の流れに、雜魚漁る村の童、蓑笠に鍬を肩にし、畔路さまよふ農夫、あるは焚火にして蠶飼をかわかす野婦など、一時の趣に集りて都人の常に見る能はざる好趣なり。

折しも日もやう／＼くれかゝり、遠山寺の鐘の音ほのかに響きて、心お

のづから澄み渡り、表の小田の蛙の時を得顔にすだくもをかし。月なき頃の宵の事とて、一入くらく、いづくともわかれど杜鵑の一聲高く鳴きて過ぎ行きしあとは、四邊いと靜かにて、雨のしたるゝ音のみにして、遠近に魚とるにや篝火數多ほのみえ、御空渡る雲の足いとはやし。

○ひさし髪

長野　上石小夜子

そよ吹く風に軒の風鈴がやさしい音を立て、未だ藝目のあざやかな小庭に面して毎朝のお掃除につや〳〵した巾の廣い廊下に今しも母樣が鏡臺を直して髮を解いておいでなさる所へ、紫紺のお袴を裾短に着けて紫の風呂敷包を抱へて小聲に桃太郎の歌をうたひながら出て來たのは今年の四月から初めて學校へはいつた其名の樣にうつくしい花の樣てある、母の姿を見るやいそがしく馳けよりさま、かあ樣なぜあのひさし髮に結びなさらないの私の方の先生もそれからお隣の君子樣の母樣も結つていらつしやるの私大すきですから結つて見せて下さいれ、かあ樣としきりに母の顏をのぞきこむのてある、母笑ひながら、あのれかお樣は髮の毛がわるくて人樣のやうにふつくりとてきませんから結はないのと答へると花子は猶もかあ樣よりもつといやな毛の方でもみんないゝ風に結つて居てよ、かあ樣後生てずから一ぺんきり結つて御覽れーかあさんれ、れ、と熱心にすゝめるのてかあ樣が毛筋立て一寸前髮を分けて手早くざつと結つてさあ御覽と云ふと花子は大よろこび、まあかあ樣ほんとに似合てよいゝ風なのこれから始終さうゆふ風に結つてゝ頂戴ねと後からも前からも眺めてよろこんで居つた、折しもお隣りの君子樣が花子樣學校へいらつしやいませんか今日は少しおそい樣てすよと呼ばれたので花子は母にあいさつをしていそがしく學校へ行つてしまつた。程なく花子の家に髮結ひが來て母樣は又も例の丸髷に結ひなされた、あゝ花子樣が學校から歸りなされたらどんなに力を落しなさるのてせう。

○夏の夜

長門　國子

十六夜の月影隈なく照り渡りて窓よりさし入る光身にあびながら今しもゆあみ終へて立ち出づれば竹の上葉を渡り來る夕風涼しくひるのくるしさとみに忘れ果て身は今天國に遊ぶの思ひぞする。川の面吹き來る風の絶え間より誰がすさびにや向岸より横笛の節面白く絶えつ續きつかすかに聞ゆるにぞ庭下駄引掛け音する方へあくがれ行けば聽が蚊遣の烟細う軒端をかすめて立昇るも面白し、夕風そよ〳〵小川のほとりさまよへば清き眞清水に影さして玉と亂るゝ螢の光もいと凉し、昔唐土には汝が爲めに名を千歳に殘せし人もありとかやげにも愛でたき蟲なるよ、其草葉に宿るを見れば葉末に結ぶ白露のごと川の面飛びかへば空を流るゝ星かと怪まる、更に夜深くなれば澄み行く月も冷かにかすかにもれし笛の音もはや絶え果てゝあたり靜に只いさゝ流れのせゝらぎのみ耳に止まる、夜風身にしむ頃ゆるやかに歩をめぐらせば野邊の夕露しめやかにやがては此處も松虫鈴虫の宿とやならむ、いでや此清き故郷のいとも平和なる夏の夜の樣を都なるなつかしき姉君のみもとに文してまゐらせむと我家の方へ急げばふけし月影白う我身を照らしぬ。

○農家の生活(其五)

靜岡　臨井貞水子

第七月。仕事は畑耕作、田草取り、草刈り等てすから別に取立て言ふに及びません、て今回は諺言を少し申上げます。

○カケムカヒ。舅姑を失つて夫婦て兒を育てる暮し、又は弟妹の分家して聟や嫁を迎へ、新世帶を造る家、是等の家を坐にカケムカヒと言ふ。下等農家のカケムカヒては夫婦の共稼ぎと云うて、女房は兒背負つて夫に從ひ、どこへも彼所へも付いて行き、夫に力を添へて非常に苦勞するのです。財産家の弟樣が分家へ御嫁にゆく女姓は、氣樂て安樂て誠にうまひ●

○財を造る家。不幸さへ無ければ家内一同不味な食物て身なりを構はず廿年乃至三十年くそ働きに働けば家屋敷と諸道具が元手て、中等以上の財産家になるのです。

○財を潰す家。兩親は寒暑は厭はず、おとましい苦勞をして一代に千圓券の三つも四つも働いてたくはへ、惜しくて〳〵壹厘の錢も無駄に費さず、燐寸(マッチ)を使ふのも付木を使ひ、盆か正月てさへ手織木綿に小倉帶麻裏草履位の位臥て、儉約に儉約を重れ、まづ營い處へ出た是て樂が出來ると思ふと、其息子は親の苦勞を知らないから金が惜しくないので、彼へも之へも手を出し失敗した自暴(くそやけ)に放蕩をやる、親爺の意見て肯かなく成

つて人樣の御世話になる、すると息子は猶自棄(やけ)て、折角兩親が働いた財産を、四五年が內にボロ／＼無くして了ふ。

○樂しい家庭。僅かに千圓券位の財て、家內乳兒共に七八人の暮しを誠に安樂に樂しく暮す家もある、二三年不幸が續いたとて、さして苦痛も感ぜぬのである。

○道樂。農家にも皆それ／＼道樂があるのです、馬を飼ふとか、鶏が好きとか、犬猫を飼ふとか、其他蠶が好きなら蠶を養ふ。茶が好きなら人より餘計に作る。青年の道樂は失敗し安いが、老人の道樂は皆當りと言つても宜しうございます。

○身だしなみ。老幼それ／＼好みがあつて、衣服道樂とか食道樂、物見遊山が好きとか、くそ働きに働いてお金の守(もり)をするが好きとか得手勝手があります。

をこがましい事を言ふ樣ですが未婚の妾、血統の正しき身體壯健の美青年てお金の守をする人がすきてすよ。

○田植の一日

伊豫　栗の花

朝晴れのした東の空は山火事か許(ばかり)紅いのに北の山の頂天(てつぺん)からは眞黒な雲が西へ／＼と流れて居る。

隣の左吉は今日の日和が氣になつて短夜の夢も結ばれなかつたのか、お宮の太鼓が鳴(な)らん前に川岸に立つて東の空に手を合した。

村は今日からの田植て老若男女凡ての顔が希望に輝いて居る殊に若い男は今日が働の見せ時てあると云つた樣に黒い二の腕をかすつて足を踏み〆る樣が如何にも勇ましい、後には評判者のお花坊や、お菊さんが其天眞爛熳な顔に薄化粧していろ／＼と從うて居る。

我れは其神聖な姿が實に羨ましかつた、怎かして行きたいものであると思つて浦の新さんに賴んて手傳はせて貰ふ事にした、嬉しい乍ら怖さも交つておづ／＼と水田に下り立つて扨て人々の樣子はと見れば如何にも面白さうてある、けれども一時間計りの後我は惱みするのを禁じ得なかつた、田植は實に苦しいものてある、事馴ぬ我れの格別に苦いのてはあるけれども樂しげに見ゆる人々には決して樂しいのてはない、彼等の額を見よ、淋漓たる汗が流れて居る、殊に西の空には雲重なりて村人の眉を蹙むる間(ひま)もあらせず雨さへ降り出てたのである、笠の雫の首筋に滴るさへ惡寒(おかん)を感ずるのに嵐は雨を顔に打ち付けて其苦しさは譬ふるに物もない、若し一點の望がなかつたならば誰れが此苦しみを爲し得るてあらう爛々たる希望に充ちてこそ彼等は初めて此れ等の苦しみを忍ぶ十分の勇氣が湧くのである、確乎たる目的に向つて彼等に眞面目であつた、彼等の汗、彼等の涙、彼等の血は、日と共に生長し、頓て花咲き、實を結ぶてあらう、實に精なる、實に美なる、實に雄なる其果實こそ幾千萬の人類が代々命と賴む尊きものである、斯く思ふと心の底から一種の樂しみが湧いて來た、そして村人と共に誠の田植をしたのてある、手も痛く、足も痛く、身體も勞れ果てたけれども夕空に雲晴れて眞紅の入日が松の影に大きかつたのを見ては、唯自然の美に何もかも忘れて了つたオレンヂ色は薄く山際をぼかして松並木の向ふには緋縮緬に波打たせたやうな夕燒雲がだん／＼と中空へ棚引いて居る、東の空には眞白な雲が太古の雪かと許り氣高い、ともすれば雨は含んだ黒雲が舞ひ下つては少しづゝ西へ走つて居る、此れ等の模樣は一帶の綠地に織り出されたので其美しさ眼もさむる計りてある、何時の間にか野には人影も見えずなつて月はかり田毎に映つて居る。

我はつく／＼と思つた、勞働は神聖である、然も至尊至善なる無限の寶てあつて決して汚れたる黄金を以て購ひ得べきものてはないと、不意に後に足音がした、其れは花坊てあつたので日頃自慢の好い聲て。

　日ぐれ／＼に駒を何處へつないだー
　　山谷こえて小松原につないだー

村の戸毎に點火して樂しき團居に晝の勞れも忘れるのてある。

和歌

佐々木信綱先生選

天

熊本 逝く春

託摩原尾花が末を白くふきて
秋風阿蘇のけむりにそゆく

【評】潦野の末遠くたなびくらむ見ろやう也。作者に云ふ何故にまさしく姓名されざる。歌にはむかしより實名をかく習はしなるを。

地

上毛碓氷郡東横野村 眞砂 すみれ子

琴あれど其笛あれど君まさぬ
淋しき秋をひとり月みる

【評】月の前にこぼるゝ雫は軒端の眞萩の露に露を添ふなるべし。又云此作者の姓名ばた實名にや、いかゞ。

人

福井縣吉田郡圓山西村開發 野坂 まさを子

蚊遣火の煙細りてあめの夜は
昔語りに更けにけるかな

【評】形は新らしからねど蚊遣火濕れる雨の夜がたり景あり情あり。

秀逸

ほろ〳〵と淩霄花散るゆふべ
世になき人をまた思ふかな
磐城 鈴木紫子

哀れとも知りつゝ蝶を追ひにけり
姉のみ墓にさゝぐる百合の
上毛 紅ばら

靈ありと傳ふる岡のふる杉に
梟鳴きて月落ちむとす
香川 松永竹子

世の塵に染まで世をさりし少女子の
おくつき清し白菊の花
成東町 紫花女史

すだれうる人の呼び聲いと涼し
夏あたらしき葉櫻の村
上毛 和田季子

髯白き翁てもあむ日あたりの
わらやのさ庭梅の花咲く
千葉 天美 桂花女史

いたづきさや力もあらでほゝとゑむ
千葉 岩瀬信子

五月雨細き夕暮の窓　陸中　大立目白羊

◯

旅ごろも露にぬれつゝ我が脊子は
今宵むしの音いかに聞くらむ　伊勢　三井陵子

◯

筏流す人に花ちる多摩の春
一人はほしき聲好き船人　上毛　關口初子

◯

うつくしき神のみ園にむらさきの
あやめぬゆれて白鳩あそぶ　千葉　石渡久女

◯

夕暮や戀のやさ歌ひくう誦して
西に流るゝ雲仰ぎ見る　陸前　佐々木巴泉子

◯

吊の棺行く秋の芒原
虫の音細き黄昏の雨　福井　楯星蘋子

◯

つれ／＼に平家を語る木曾の旅
小雨ふり出て日は落ちむとす　群馬　飯塚美起子

◯

なつかしき君におくらむ歌かきて
ひとりほゝゑむ白萩の窓　群馬　吉田きみ子

◯

花散りて鳥はうたはず蝶舞はず
かくてわが世の春ゆくらむか　千葉　石渡みそい女

◯

夕闇を雨に怪しうなく鳥や
灯細う萩のこぼるゝ　上総　小川國子

◯

夕暮をもみぢこぼるゝ雨に濡れて
山の小道を妹送り行く　新潟　小野塚松風

◯

病む母の薬求めて歸る夕べ
寒身にしむ木枯の風　横濱　勢子

◯

しめやかにくれゆく春を妹が
歌聲さびし葉櫻の雨　紀州　村垣靜子

◯

はぢらひの少女の頰の色に似し
牡丹くづれぬ南の窓に　品川　小林のぶ子

◯

紫陽に雨やはらかきその夕べ
歌かき居れば時鳥なく　下谷　辻直子

◯

◎
神々のみゆるし受けし夢さめて
　白百合かをる明方の窓
千葉　小川みどり子

◎
君ゐます西の方へと美しき
　虹はかゝりぬよき夕かな
藤浪子

◎
君と見る牡丹くづれてわが胸の
　すゞろはしくも春のゆくかな
横濱　花舟子

◎
なき父ににたる翁とかたりけり
　初瀬御堂の春の夜の月
上毛　磯貝すゑ子

◎
旅にやみてたらちね思ふ雨の夜を
　うつゝ心にほとゝぎすきく
山口　河津才子

◎
朽殘るうつぼ柱の一もとに
　音を集めて春雨の降る
三重　帆山靜子

◎
美しき夢のあとおふ朝あけや
　香りつめたき白百合の花
福井　遊蝶花

◎
紫のかつぎまとひしあけの姫



一里塚（選外）　磐城　三瓶たか子

今わたるらしあさの香高き
美濃　傍島敏子

◎
平和の風の行き交ふ夏の村
　百合の香清ら野川よろしき
上毛　飯塚ちすゐ子

◎
何となく朝の雨をなつかしみ
　歌かき居れば蝶舞ひ入りぬ
豊前　藤本千代子

◎
日は落ちぬ西のみ空を赤うして
　水まさ雲の北に流れつ
京都　高須初子女史

◎
われこそは野べにしをれしすみれぐさ
　君のいぶきにまたよみかへる
芝浦　岡田すゑ子

◎
蘭燈の露けき宵を姉君と
　星祭りして星に泣くかな
殘雪女

◎
馬の背に殘夢ゆられて虫のねを
　とほしときゝし朝月夜かな
白萩女

◎
山寺の鐘樓は朽ちて夜もすがら
　やれしばせをを風ふきめぐる

○青嵐木蔭の晝の釣床に君がやさしきゑまひふくかな　美濃　あけぼの女

○兩岸の綠ふかはの清水に舟こそとゞめ髮洗はなん　備後　松本塵子

○よわき子の希望はとくに奪はれぬ何慰みに世を渡るべき　豐後　月見草

○鳩のなくゆふべの梢いつよりも霞むと見れば春雨ぞふる　下總　大日方生

○とも〳〵に眺めし花も今ははや折りてたむくる世とぞなりける　埼玉　遠藤秋葉女史

○君訪ひて柴戶あくれば夕月夜垣の李の花散りかゝる　大阪　永島豐子

○吹きすさぶ夜半の嵐に月さえて尾花の波と心亂るゝ　茨城　板橋きやう子

○賤がすてし朽ちし草履にもえ出でぬ笑うつくしき小すみれのはな　若狹　長谷川英尾

○病いえし母がうたげのさかづきにうつるもうれし白ゆりの花　小石川　小林芳子

○山遊び水の假枕の一ねむり杜鵑のこゑに夢を覺しつるかな　陸前　高橋花子

○雨はれて夕日に香ふ花いばらこぼるゝ露の美しきかな　下總　霞川女史

○かなしみを笑にかくしてさりげなくわかれし折のしのばるるかな　西宮　中西甲南生

○花に置く露に逢ふ瀬なかごつてふ星と百合のゝ清き戀かな　羽後　佐藤ひさ子

○仰ぎ見る富士の神山紫の雲こそかゝれふじの神山　群馬　福田つる子

○時ならで涼しき風の通へるは夏のうちわに秋やこもりし　上總　きく女

○友失せて悲多き此の夕窓にしよれば螢飛び來る　岩手　しの子

○海原を波止場にたちて眺めつゝうら若き人何を思へる　名古屋　原田琴子

○故鄕の親しき友とたづさへて涼む橋の上ほたるとびかふ　下谷　菅谷よれ子

○音もなく卯の花くだつ寺にして姉に似たりし尼を見しかな　伊勢　守岡みどり子

○住みなれて今ぞたのしき柴の戶に虫の音聞きてよき夢に寢む　信濃　成澤とき子

○月の宮の桂手折ると京へ行く旅のやどりの春の夜のゆめ　東京　齋藤紫桂子

○亡き父が貧てしを何の名殘なく夕日に榮ゆる緋牡丹の花　上野　佐藤露子

○心なき友の身の上思ひつゝ小窓によれは紫陽花の散る　安藝　伊津美

○只一人濱の磯邊に佇みて暮れ行く空に物思ふかな　安房　川名泉子

○湯あみして池のめぐりを歩みつゝ月を待つ間の風心地よき　山形　今井美惠子

○松原の葉ごしに海も見え初めて夕風涼し磯の山道　美濃　內藤みち子

○夏山の森の下かげしづくして朝まだきより日ぐらしのなく　美濃　美知子

○一聲を聞きて思出多きかな小窓によれば五月雨のふる　磐城　佐久間ちよ子

○思はじと思ひはすれど運命なき身を思ひ出て今宵も泣きぬ　三重　松木しげ子

○　丹波　紫津子

湯上りの丸窓に寄る薄月や絲を流る百合の香ぞする　上野　松子

○うつき散る野川の水を堰入て浮べる蟹に早苗とるなり　茨城　美紫山子

○まつ宵のねやのともしひかげふけてきえもはつべき我思ひかな　愛知　多田辰子

○あばらやの園もる月に聲さえて夢むすばせぬきり〳〵す哉　岐阜　田中悦子

○照る月の影もらぬまでしげりけりきのふ花見し岡のべの里　栃木　小木曾園子

○こほろぎのちいさき翅に思乘せて君が文窓に世を泣くを得ば　丹波　赤城柳子

○櫻葉に歌をかきては流しては春の行方を悲む夜かな　遠江　増田富士江子

○思ひ入磯の少女のしほくみに髮のみだれもつくろはずして　埼玉　今村幸子

○里の子がつゆふみわけて嗾かる野原に淡し朝月のかげ　徳島　住友時子

○若草の堤にたれしつりさをのさきや繪に似し淡路島山　安房　忍足靜子

○暮鐘は遠くうすれて久枝の浦靜かに暮るゝ磯ばたの宿　千葉　石野靜子

○夜は更けて月はいよ〳〵澄みにけり一人たゞずむ花園の中　周防　渡邊靜子

○小さき旗小さき岡に數見えて小さき子等の軍ごとする　秋田　高階すゑ子

○袖ぬれてあやめ賣る子や歸るらん五月雨かすむ野路の夕暮　群馬　磯雅井萱子

○魚つりの子らは歸りて夕ぐれの里の小川に花藻みだるゝ　芝區　花蝶

○梅雨に小川の橋のくちはてゝ草刈る少女わたりなやみぬ　神戸　大澤滿佐子

○清よき水流れもはやき黒川のそこをてらして飛ぶほたるかな　大阪　赤松よし子

○隅田川にごらぬ水の涼しさに風こそ渡れ夏の夜の月　横濱　吉川霞峰子

○萩取りに野を分け來れば青嵐草もみだるゝ露も亂るゝ　豊後　後藤榮美子

○堪へがたき思ひ亂れて雨しきる宵の端居に遠蛙きく　上總　關芳蘭子

○いづちより流れこしかや百合の花ねむれる蝶をのせて過ぎ行く　上毛　關口梅子

○いさり子の小舟ましろにほのみえてをり〳〵よする夕がすみかな　上毛　五十貝須江

○沖遠かしほふく鯨ほのみえて波たゞしろし初秋の海　上毛　眞砂燕子

○わが琴のしらべみだして一しきり花をまじひて雨ふりいでぬ　鳥取　藤井あやめ子

○霞にぞ薄らぐ家を望むれば別れもをしき汽車の窓哉　徳島　木戸玉緒

○こがれたる雨は黄金の降る思ひ早稻田の畔に踊る人影　徳島　楠根信子

○憂き思ひむねを痛めて踊り消聲あはれげにほとゝぎす啼く　神田　藤掛なみ子

○夢さめて獨寢の身をかこちては今見し人の面影をさぐる　紀伊　紫瀧女史

○夏の月青葉すゞしき片岡の松はなれてすみのぼる哉　常陸　大綿秋月

○寺跡の本堂あたり荒れはてゝ青葉がくれに白百合の咲く　筑東　大橋淡月

○うちつけに玉をま袖にふらし來てさもこゝちよき夕立の雨　廣島　ゆり子

○

海原や響く汽笛の音冴えて霞の中を行く白帆哉
○ 相模　井上たけ子

日は西に月は東に峠道の一里は遠く鵑の鳴く
○ 磐城　富田時子

旱天に河床あらはの大河や河原砂地になでしこの咲く
○ 下野　淺野揚子

あけやすき夏の一夜をいれがてにきくや鞍馬の山ほとゝぎす
○ 相模　愈田たまき子

あてもなくとひし岡べにうれしくも人にあふちの花さきかゝる
○ 茨城　秋山隆子

つく〴〵とすぎし世織ふる夕ぐれは鐘のひゞきもたゞ涙なり
○ 大和　里の乙女

踏みおろす足の下にもいそしめと数ふる者のありと知らずや
○ 紀伊　高野鐵蓮

れがはくば闇夜にばかり咲きなゝむ月にはあたら庭の卯の花
○ 小倉　田崎保子

淋しくも片山里の夜はふけて蛙の聲のかしましきかな
○ 福島　村岡やお子

友病むと聞きて傘蔽くこの夕雨螢つたへほとゝぎすなゝ
○ 磐城　橋本綠子

七月の小雨そぼふる草の庵蛙なく音に更け行く夜かな
○ 磐城　村岡満津子

陽は赤う潮紺碧の遠近に帆舟むれいぬ朝あけの海
○ 上總　小川くに子

百合花の共にゆらぎて東屋に清き香つれて風は吹きゝぬ
○ 備中　稲本千恵子

嵩綸によりてなぐさむみなし子の心を知らぬ人もあるなり
○ 石見　牧岡嘉子

朝風は霧ゆく舟の矢がすりにかざりを寄せぬ白鷺の袖
○ 靜岡　高木とく子

鯡鯉ま鯉浮びて遊ぶ池のおもに紫ゆらぐふぢの花かな
○ 牛込　はつ子

ふりつゞくさみだれ空に今日も亦わびしく暮れぬ友もなくして
○ 神戸　徳永みれ子

さくら花小夜更けかたをひら〳〵と舞りに散りて衛士まどろむ
○ 下野　波多野満佐子

朝露に鈴ふる虫を聞くによし音も住吉の深草の庭
○ 磐城　花溪女史

溪奥の月美くしき紅葉山今宵おばしま詩人生まるゝ
○ 南多摩　信子

悲しみを袖に秘めつゝ別れたる君なつかしき満洲の原
○ 千葉　高橋幸子

妹が母を祈りの夜の室や髪は亂れぬ燈細うして
○ 近江　武村琴音女史

一とすぢに眞の道を辿りなば人知らずとも神ぞ知るらむ
○ 陸前　畠山探石子

かなしみの懺悔を語る琵琶法師淋しく更ける山寺の宿
○ 大阪　ひろ子

嬉しかりし夢は空しく覺めはてゝ枕邊近く五月雨の降る
○ 仁川　賤の女

五月雨にふりこめられてつれ〳〵にいとも戀しき敷島の空
○ 京都　小林淡舟はつ子

さらぬだにさやけき月のさす窓をさゝれんものか虫の音もして
○ 上毛　得子

いにし春語りあかしゝ梅月夜今宵もおなじ月はかゝれど
○ 神戸　今井晶子

行く春のあはれを知るか姥櫻名残りを惜しむ春の夕暮
○ 大分　松木青雲

業とげて十歳のむかし夢みつゝ歸りて見れば母はよみぢに
○ 宇都宮　芳野靜子

百鳥の聲もしめりて降る雨に花ちるころの春のつれ〳〵
○ 山城　太田露花

萩の原羊追ふ子の影きえて孤小寺の鐘夕つぐる
○　美濃　坪内華子
旗立て戰爭すと大鼓うちてうなゐ一むれ森に消え行く
○　滋賀　武村女史
蛙なく夜半の夢路ぞ破られて耳そばだてば山寺の鐘
○　東京　つゆ草
思ふ身は春の快樂も何ならずたゞ落日の榮へおもひしか
○　日本橋　栗山紫柳子
君住める里より流れくるときゝいよゝ小川のしたはしきかな
○　下野　きむ子
あれはてゝぬしなき庭の松が枝に淋しく宿る夏の夜の月
○　泉州　濱江子
美くしと今日見し花の夢となりて神になりしよ白百合の花
○　滋賀　宇野民子
曇りなき雲井に高く君が代の八千代をよばふ鶴のもろ聲
○　橫濱　白妙女史
橘の香をなつかしみ過ぎかれて歎思ひたれば杜宇なく
○　千葉　內田直子
かけよりてとらんとすれば里の子が紙につゝめる螢なりけり
○　本郷　坂上たか子
言葉のみはなやぐ人にすかされてよき子半ばは惡魔のふちに
○　武藏　大野こと子
加茂の川皆燈火にいろどられ京は花なる夕涼みかな
○　羽後　前田ひさ子
事繁き世はあかつきにいぬ物をなどて水鷄の夢たゝくらむ
○　神奈川　富子
紅の紐頰そむる少女笠かむる少女子田植する見ゆ
○　茨城　春歌女史
春を惜しみ花にすさびの琴の音の亂れがちなる朧月夜かな
○　羽後　阿部はな子
青葉かげ姉の歸省を指をりてひとりほゝゑむ垂げ髮の子よ

○　神戸　村上きん子
梅の花はや咲きそむるにはのおもにつれなくのころこぞのしら雪
○　宇都宮　芳野靜子
春さればみやこ少女もおりたちてやまだの原に若菜つむなり
○　磐城　睦木一枝
いにしへをしのぶの里に思ふかなともにめでにし逝限の月
○　埼玉　遠藤秋葉女史
星一つ又星一つ見えそめぬ雲ふき拂ふ吉原の水
○　牛込　蒔田えい子
月落ちて由井が濱邊に啼く千鳥ねざめし我れは何ときゝしか
○　伊豆　上原ゆき子
ながめやる夕煙昇るふるさとはいつもかはらじ豊なりけり
○　信濃　乳深初音
不忍や紅蓮白蓮咲き出てゝ鐘の音水にひゞく朝涼
○　上毛　關口絲子
朝夕べぼだい寺といて新墓に花をたむけて泣くはたが子ぞ
○　芝　瑠璃子
歌によき月は昔の月ながらすぎし今宵の友なきぞうき
○　長崎　鷲崎瑞香
うたゝねの夢にも友の偲ばれて共に語りし昔戀しき
○　陸中　小松澤白菊
こもりゐの窓にてる月影うすしやむ我が友はいかに見にけむ
○　仙臺　すみ子
契りにし姿をすてゝ外國にゆきにし人のあとぞ戀しき
○　福岡　すみれ子
悲しみをかくして君を見送しあとにていづるわが淚かな
○　東京　すみれ子
五月雨のぼゝ降る今日はことさらにわかれし君を打ち思ふかな
○　大阪　永島豊子
青空をうつせる池の水の面に咲く河骨の花白くして
○　姫路　鄕なほ子

五月雨のまとゐ淋しき今宵かも亡きたらちれのいよゝ戀しき
○
讃岐 松之舍女史

ほのかにもはゝの御はかにさす月を心なき雲のかくしけるかな
○
麹町 熊田みつ子

小兎に朝の餌をやる人若し秋霧淡き岡の上の家
○
徳島 仁木奘根子

二里の舟路ものいはざりし心にくの君何となく忘られぬかな
○
相模 長峯代志

朝露をふみ分け行きてそと手折り手向けまほしき白百合の花
○
石川 濟田芳子

竹馬に乘りつゝ遊ぶ子等の中にまじらぬ身とはいつ成にけん
○
下野 入江靜子

宵の椴のながき冬の夜只ひとり汽笛の聲にもの思ふかな
○
武藏 鈴木濟子

松が根に牛をひきとめたゞすめば夕日なゝめに眞帆かた帆見ゆ
○
武藏 近藤しき子

古への人をともとし見る文の机に通ふまどの百合が香
○
丹陽 代子女史

水にさすかげもゆられて葦の葉のそよぐ川べによしきりのなく
○
高松 江川紅花

み法やみて靜しづかなる奥の院青葉がくれに杜鵑鳴く
○
播磨 平谷古月女

寄もなき身は荒海の捨小舟君なかりせば誰かたよらん
○
山口 川濵百合姬

月見舟ふえのすさみのほろ〳〵とすみだ川原に涼むころ哉
○
福岡 岡村その子

宵の間にくすべ置きたる蚊やり火はまだ消えやらず夜は明けにけり
○
成松 秋山靜女

いさゝ川堤を下て北二丁花うる家と蝶に問ませ
○
信濃 竹田湖水

怪し火は小雨降る夜の丑滿に寂しく燃る墓の邊りに
○
京橋 霞千鳥

白壁に夕日まばゆく横さして垣根のあたり蜻蛉とぶなり
○
越前 まきを

につき宵くと取出てたりし旅硯たびの宿りの燈火こ暗き
○
大隅 迫木よし子

火のくらうもの思はする小夜更けてれられぬ夜半のむしのこゑ〳〵
○
會津 佐藤香子

いづかたも蠶飼ざかりとなりにけん賤女が繭つむうたの聞こゆる
○
周防 山上照子

月に倚りて見送る母と行く我のなかを斷ちたる野の霞かな
○
備中 ふて子

やれ垣やしほれてかこつ朝顔の後の世承けて夕顔ぞ咲く
○
京都 島本久喜

ゆめにだに思はぬものを父ゆきて鐘のあわれを今ぞ知りける
○
播磨 秋山敏子

今日もまたみどりの林はや暮れてせみの鳴くこゑいとあはれなり
○
埼玉 川越 在千代子

しげり合ふ若葉のかげもうつろひてみどりぞふかし山川の水
○
和泉 桂香女史

まゝごとにむつまじかりし君ゆきぬうつしゑいはず石ぶみ語らず
○
堺 白桃子

學べとて兄のたまひし此手本かたみなりとは思はざりけり
○
三重 中村てつ子

打ちつゞく水田三里はたそがれて近くきこゆる犬の遠吠え
○
下總 小林はつ子

ながめんと思ひ我が家を出て見れば霞たゞよふ春の山々
○
上野 つぎ子

眞錐賣る少女十三色白う小雨降る朝町呼びて歩く
○
群馬 きく枝

ほたる狩る子等もをちこち蛙なく水田に映る月のさやけさ
○
武藏 登代子

假寢の夢の行方は朝霧に島隱れ行く船の中かな

○ 尾張 渡過俊子

もへいてし岡のわか草はろかぜに末うごくまで早成りにけり

○ 大坂 西端花子

人知れず袂をぬらす眞夜中に哀れ知らずや山寺の鐘

○ 越前 流水

忘れじと思ふ心のます鏡夢にも浮ぶ君が面かげ

○ 橫濱 丹波百合子

夏の來て我が庭前の草花は時を得顏に咲き競ひけり

○ 上總 北田靜江女

足びきの山をはなれてあらいその海原遠く千鳥鳴くなり

○ 靜岡 岩堀紅百合子

鵜飼舟くだしも果てずかゞり火のみぎはにしろく蘆の花さく

○ かもり 曉花子

病む姉を慰めんとて只一人里の川邊に螢狩する

○ 常陸 宵柳愛子

小夜更けてゆめのまに〳〵ほゝゑめる子と見くらべる床のうつしゑ

○ 東京 あらし

山寺の幽にひゞく鐘の音に亡き母思ふ秋の夜半哉

○ 下谷 西川千鳥子

茶の釜のたぎりしづけき丸窓に若葉かげさす木母寺の庵

○ 新潟 岩瀬波子

村鍛冶の扉越しにもるゝ宵の火にふと紅梅の蔭はくづれぬ

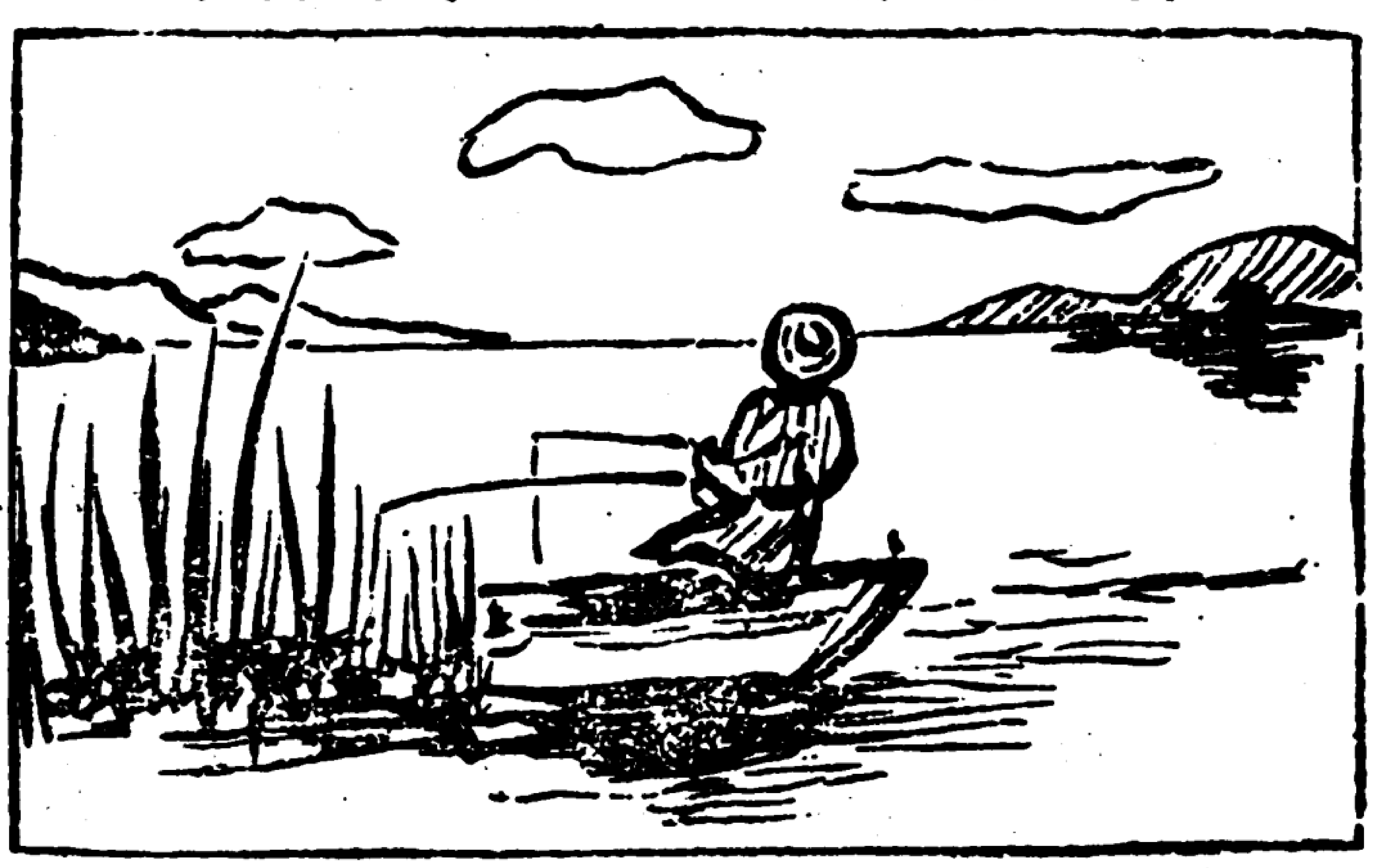
○ 尾張 奥田久江子

山猿のこずゑをつたふ聲たえてゆふぐれすごし森の下みち

○ 上總 小川幸子

白浪のよるかとみれば花薄風にゆらるゝ秋野なりけり

釣 (選外) 近江 宇野民子



○ 東京 小宮きみ子

うるはしき百の藥草を手にとれば心の底に涼風ぞ吹く

○ 群馬 東操子

玉章に色香を秘す八重櫻花ある木には實も結ぶらん

○ 水戸 かつら

古池にしばし宿れる月かげに老僧ひとりなにをさゝやく

○ 麹町 山下里子

うらぶれの身をなげく子に秋風は悲しとばかり花なびかせて

○ 深津 刀禰春子

母上よ明日はかならず行くほどにとまたも泣き出す少女いぢらし

○ 西宮 中西ゑみ子

美くしき姉の小袖を見る度に夕ぐれさびし五月雨のふる

○ 安房 忍足しづこ

黄色なす麥畑一叢夕榮えてつばめしづかに群うたひ舞ふ

○ 埼玉 山口邦子

この花の咲かば癒えんとのたまひし君あらずして花ひとり咲く

○ 越生 少文

暗き夜半光る螢を見る毎に思ひぞ出づる唐人の窓

○ 播磨 横田すみゑ

かをりつゝ桐の花ちる明ぼのに山ほとゝぎすうらがへり啼く

○ 下總 姬百合女史

河添へや宵朧かけし家のさま小さくはあれど數寄をこらして

○ 見附 山田てつ子

ひさかたの天にかゞやく星よりもかずかさねてもよまむとぞ思ふ

○　三河　山田夢烟
村をさが背戸の薔薇畑花さきてゆふ日靜かに小鶸なきしきる
○　美濃　木村竹雨
うるはしき君が寫し繪見る毎に思ひ出多き夜半の月かな
○　大阪　白さぎ
みてしがなやさしき君が白砂の衣つけたる清きすがたを
○　柳河　無名草
そゞろなりや我身二十を今更に歎くは弱き／＼心ぞ
○　栃木　田野ひろ子
里の子が螢呼ぶ聲聞えずなりて鎭守の森にふくろうの鳴く
○　兵庫　柳田白ゆり
小舟ひとつ詩人やのせし湖はたゞ寂として月ぞたゞよふ
○　長野　上石小夜子
落ぶれて人とほざかる我宿の古巣とひ來しつばくらめかな
○　澁谷　芳野
ひとしきり降るさみだれの雲晴れて玉なす露に宿る月かげ
○　宮城　秋月女
夜る光る玉も始めはあらいしの研けるかひのあればなりけり
○　周防　征舟女
雛僧の白き小傘にふと觸れてざくろこぼれぬ京の三條
○　越前　清子
亡骸の胡蝶埋むと妹は梨散る下に花かきあつむ
○　湯河原　原田八重子
君偲ぶはなれ小島の夕まぐれ破れ小窓に雨細う降る
○　堺　竹叟文子
來べき人來ざる今宵を月明かき湖沿ひ行けば時鳥なく
○　尾道　秋津よし子
朝な／＼露の白玉おきそへて紅愛らしう朝がほのさく
○　伊豫　福井白百合
くもりなき玉にも似たるしら露はいかに心をこめてみがきし
○　鹿島　元木初子

小琴とる聲もすがたも去りにてしおのが妻にも似たる君かな
○　薩摩　白菊女史
さし潮に藻の花匂ふ朝ぼらけさまよひの吾れに波のさゝやく
○　東京　若林文子
夜もすがら聞きし砧の音絶えて月に更けゆくふくろふの聲
○　陸中　若林なか子
なき母が云ひ殘されし言の葉をくり返へしてはさめ／＼と泣く
○　明石　すみれ子
かやり火の烟もきえてみどりなす木のまにすめるなつの夜の月
○　周防　美子
秘め置きしうつしゑまたも取りいでゝ袖うるほしぬ五月雨の窓
○　遠野　わかば女史
富士山も新高山も海原も如何で及ばん親の恩に
○　神戸　藤堂清子
朝顔はとなりの軒に垣こえてほこり顔にも花咲きにける
○　甲斐　T I 子
我が庭の藤もつゝじも咲きにけり蟬の羽衣まづ夏の來て
○　播磨　石井ひで子
ひく糸の主は見えねど杉木立火影におくる唄の麗はし
○　茨城　前原琴江
小山田の蛙なく音頻にて十戸の村は雨にくれ行く
○　茨木　紅茨子
蚊遣り火の烟に小村たちこめて葎のまろやに水鳥のなく
○　岩代　翠涙子
月やどる蓮の珠の滴を硯にうけて歌添へんかな
○　洛東　都築登志子
少女子の姿も見せぬ山影に何を賴みてすみれ花咲く
○　千葉　鵜岡よれ子
ぽつ／＼と落つる雫も耳なれぬ幾日ふる屋の軒の五月雨
○　千葉　高山朧月子
うら／＼と流るゝ川の其末の君住む家に水車めぐれり

播磨　吉田翠子

○さ夜中にひとり目さめてぬれ琴をかなづる頃や五月雨のして
名古屋　林田糸子

○大そらの星にはあらで河水にうつるは岸のほたるなりけり
高知　黑牛女

○花咲きてめではやされし掛茶屋も綠の中に軒傾きぬ
岡山　波子

○詩にせんか歌にせむかのたゆたいはくまなき月に啼くほとゝぎす
下總　猿坂秀嶺女

○夕月の秋にもまがふ冴やけさをめづるまもなく夜はあくるかな
上總　小川幸子

○晴れし夜の月を惜みて行く道に我を招くやしの丶小游
京都　鈴木女史

○雲の夜を墳樹に宿り土に泣き黃泉の父母のそゞろ戀しき
下谷　太田あきつ子

○雨過ぎし若葉の庭に夕陽してかぜに涼しう風鈴のなる
群馬　林膽子

○をちこちの田面奕し若みどり御代の榮ぞ今知られける
岐阜　山田萩子

○彩毛の孔雀羽ふりて舞ひ〳〵ぬ神代に似たる春の花庭
岐阜　山田萩子

○夏蝶がなさけ消しかおばしまもつらき此世と鄕なく日和
岡山　鷺田泰子

○離島のやるせしもなき入相の鐘に時雨れて蟬騒ぎたつ
若狹　梧かな子

○舟すぎて花藻みだるゝ里川に牛洗ふ人歌かすかなり
備後　池田華月子

○別れては淋しからめと病む人にそひつゝ聞きぬ山ほとゝぎす
常陸　佐野清子

○亡き父の御はかのほとりかるかやのあはれ一もと秋ふけにけり
佐世保　すみれ

○木下闇いざよふ月の影洩れて夏もよそなる涼風の吹く
長崎　文子

○夏ながら汝のほか行く心地して月面白し舟の夜すゞみ
播磨　吉田翠子

○白き花の雫あつめて書く文に赤き心のあらはれにけり
芝　つれ子

○水無月や池のあやめの色あせて雨よぶ蛙歌しきりなり
芝　常子

○青葉陰背戸の小川にまどゐして夕べ涼しき賤の山里
德島　征川益子

○かどちかき野川の水の音すみてふけゆく月になく水鷄かな
京都　藤木かよ子

○野中路を雨になやみの匯白し湖上の暮を勢多に行く人
京都　高田あい子

○今日もまた親しき友を誘ひ來て菫たんぽゝ摘みためて見む
橫須賀　堀江茂子

○百千の胡蝶の綾羽身におほひ七彩の雲にまきれていなむ
埼玉　新井なつ子

○夕立の晴れて涼しき門の戸にみどり色そふ青柳哉
大阪　楠靜江

○母上の身上ばなしに小夜更けて幽かにひゞく山寺の鐘
丹波　白菊女史

○夏の夜はとく明ぬらし涼さのあまりて月の清きひかりに
千葉　田村瀧子

○亡き母の背に負はれて螢狩りし昔戀しき古鄕の小田
札幌　高橋玉柳

○散るぼたん袖にとゞめて花作りいさゝ小川に流しては見し
岡山　なみ子

○流れ行く男浪女浪のれもたゝて渡らまほしき憂き世川瀨を
攝津　赤松操子

○猛獸ことひの牛もうなひ子の鼻は引手に任せてぞ行く

○　上毛　千鳥子
うなゐ子が遊ぶかたへの姫百合に胡蝶舞ひきぬ歌人きませ

○　越後　麗子女
山寺や朝霽よろしと今日もまた呂蚊帳はづせば雲ほとゝぎす

○　岩代　翠洋子
人もかくあらまほしやとおもふかなゆきに葉かへぬ庭のひめまつ

○　飛彈　萬小夜子
青葉若葉枝さしかはす下かげの水車の小屋と尋ねて來ませ

○　飛彈　松野みどり
葉櫻の木かげにひとり逍遙ひて有りし昔を戀ひ詫ぶるかな

○　飛彈　紅涙女史
消えがてのともしかゝげて今宵またつれなき君が文に泣きつる

○　福岡　濱中たか子
百日紅書院の眞晝靜かにて經寫す僧筆重げなり

○　伊豆　加藤篤子
白百合の花咲く、岡の草にねて小松が末の月を見るかな

○　熊本　黒瀬さわ子
梓弓射る箭涼しき月の宵に漕ぎ行く舟に銀波きらめく

○　京都　堤とく子
五月雨のつれ〲にとて琴取れど胸は亂れて彈くよしもなき

○　京都　橋本八重子
望みにし業ならずしてうらぶれのあはれ十九の春暮んとす

○　京都　華子
何事も世のならはしと思ひてよ花咲く春にめぐり逢まで

○　千葉　鎌瀬たい子
武夫の露營の夢の醒る頃月傾て時鳥なく

○　四谷　さゆり子
青葉しげる木の下蔭のよしず店よらぬ先よりまづぞ涼しき

○　秋田　佐藤ひさ子
深山路や若葉木立の隧道を吹き通し來る青嵐かな

○　佐賀　山邊つる子
風吹かぬ蟬の聲せぬまひるなかに板屋靜に桃の實落る

○　陸前　猪又きつ子
虫の音の止んで靜かにくるゝ野に哀れに一つ立つ女郎花

○　富山　小林芳枝子
故郷に君をすてたる夕暮を無心の雲の西に流るゝ

○　安藝　少女
さなきだにわびしき今日の五月雨を母に逝かれし我が身なりせば

○　陸前　靜香
早苗とる少女の姿おぼろにて歌ふ聲のみ賑しきかな

○　千葉　安西せつ子
散る菊をのせて流るゝ平群川その行く末は君がすむ里

○　牛込　阿部きぬ子
夕立のすぎ行くあとのそよ風になびくも涼し野邊の夏草

○　長崎　倚子
五月雨のかげも今夜は跡なくて雲間もれ行く月おぼろなり

○　佐野みさを
文よみし燈火消えぬ寄宿舎にさし添ふ月の影ぞやさしき

○　上毛　關根意磨子
みなし子を雨にあてじと袖かくる鬘に一聲不如歸なく

○　山形　五十嵐くめ子
清らけき月の光さしそひてふせやの庭にほとゝぎすなく

○　羽前　五十嵐豊子
故郷の父母忍ぶ宵のまにうつゝ心に虫の聲きく

○　山形　高橋綾子
夏木立茂くしげりし山の端も秋風たちて紅葉しにけり

○　筑後　美佐加正子
早苗とる少女が歌の面白さに文書く手をばそとやめて見る

○　筑後　正子女史
降りつゞく五月の雨の晴れまなくて隣の人も訪ひて來まさぬ

○　盛岡　白ゆり子
秋の夜の月にもまさりてすみわたる賤が少女のきぬたうつ音

○　　　　　　　　　安房　川名泉子

いと清き故郷の君を聲たかう呼ぶ夜もとりぬ若きつみ入

○　　　　　　　　　安房　渡邊香園女史

なつかしき君と植ゑにし青柳に夕吹く風いとぞ涼しき

○　　　　　　　　　岩手　吉田俊

ひめ神のあやまくあけて雲間より笛のしらべに雨細うふる

○　　　　　　　　　大分　工藤たまき

鏡ひくう尾花みだるゝ野の末に秋をなやみに乙女一人立つ

○　　　　　　　　　茨城　きみ子

抱かれて花見しころのおもひでと紅き小さき春衣に泣かる

○　　　　　　　　　船津　千代子

嬉しさに聲もくもりて迎へけりかちどきあげて歸りまゝ君

○　　　　　　　　　靜岡　貞水女子

人は若青葉若葉と樂しめど姿は他郷に一人泣くかな

○　　　　　　　　　越後　水野きよ子

里川の若柳三里色出でゝ日永靜かに春の雨降る

○　　　　　　　　　下關　梅田糸子

枯つたのかべにしみ入る夕日かげ秋逝くらしき風の音かな

○　　　　　　　　　新潟　大崎とし子

春の雨玉簾なして紅梅の君が朝戸をとざしぬるかな

○　　　　　　　　　越後　鈴木たま

山さかのよからぬ途も厭はずに行く世の人の末ぞなつかし

○　　　　　　　　　岩代　岸野常子

雨晴れて朝日にほへる笹小窓歌おもひ居れば時鳥なく

○　　　　　　　　　靜岡　石神喜惠子

鍛冶焔く火よりもあつきやきがれをあつとも胸のかく迄にやは

○　　　　　　　　　梅　子

裏のたんぼ（選外）　羽前　阿部久子



踊りくる峠なかばに日はくれて木の間に夏の月を見る哉

○　　　　　　　　　神戸　今井品子

ほの〴〵と明けゆく空に星淡く淡き白雲ゆきゝするなる

○　　　　　　　　　群馬　江原よし子

いなづまの過ぎにし刀根の夕まぐれ蘆むらそよぐ風の涼しき

○　　　　　　　　　山口　野守秋子

殘照の影しづかなる地に消えて癡嗣冷たう島の日暮るる

○　　　　　　　　　山口　川涙顯子

苔の上に散りしく花のしら雪はふむさへをしきこゝちこそすれ

○　　　　　　　　　大阪　河原多喜子

名殘りなく夕立はれて夏草にうつる夕日も輝きにけり

○　　　　　　　　　長崎　乙女

外人の我が日の本を慕へるも尊き君のみいづなりけり

○　　　　　　　　　紀伊　夏菊

悲しさを語らん友なく人もなくいつかは晴れん此の胸の中

○　　　　　　　　　横濱　敷島花子

落葉かく子らはかへりて夕月夜をぐらき森にふくろなくなり

○　　　　　　　　　横濱　青葉子

幾度かふりかへり見る峠道里の木立は霧にかくるゝ

○　　　　　　　　　東京　橘子

たらちれの君と別れて只一人物思ふ夜半に雁なき渡る

○　　　　　　　　　仙臺　黒澤たます子

朝月夜磯の假居の欄干に聞くや干潟に寄る波の音

○　　　　　　　　　新潟　わか子

梅の實を拾ふ童にふまれけり間垣に匂ふ撫子の花

○　　　　　　　　　新潟　高橋しづ子

ほとゝぎす鳴く一聲にみなれさをさしてたゆたふ渡し守りかな

神戸　足立あい子

○沖津風夏もなぎさの芝浦にしばしがほどは住居てしかな

神戸　足立あさ子

○眞帆しろくわだ中遠く行く舟は雲のみなとをさして漕ぐらむ

下總　飯阪朔子

○雨晴れて野澤の面にすむ月を見よとや叩く水雞なるらん

美濃　木村竹雨

○書にうみてそと戸に倚りて立ち濟めばかすかに聞ゆるヴアイオリンの音

新潟　岩瀨なみ子

○牛飼ひし家の隣の門の中鶯聞きぬ紅梅の匙

熊本　三浦丈子

○言問ふに何耻ぢらひの口籠り眉根重きを涼風拂へ

横濱　園枝子

○たゞけどもこたへぬ庭ににほへるはたれに櫻の心なるらん

安房　翠紅女

○今日も亦たどり出てけり彼浦に君と愛でにし松を慕ひて

神戸　大谷秋月子

○朝づく日東の空にかゞやけば疾く起き勵め世の中のひと

廣島　箕岡琢子

○やるせなきつらき思を胸に秘めて川道行けば春の雨降る

深田ひで子

○よもすがら巳が光をたのみにて行方も知らず飛ぶ螢かな

德島　齋藤鶴子

○雲間なくふりつゞきたる五月雨に心のはるゝ日はなかりけり

麻布　加藤のぶ子

○苔寄き墳墓のあたり雲寄せて夕日冷たく身に迫り來る

淺草　樂津子

○亡き母のかたみの箏を取り出てゝ彈くも涙にぬるゝ袖かな

廣島　箕岡きみ子

○去年今宵君と誓ひし女夫岩今はくずれて我樣に語る

上總　石川清水

○ともは逝きしひとり淋しき山寺に二つの蝶のむつび來し哉

紀伊　森川千代子

○見渡せば垣根もにほふ花菖蒲花は櫻となに思ひけむ

磐城　原田清子

○夜嵐に硯は碎け筆は折れ紙はやぶれて吾事やみぬ

とし子

○をちこちと螢追ひつゝ思はずも戀しき人の門邊にはきつ

八王子　朝倉田鶴子

○初夏や土橋に垂るゝ葉柳をくゞりて低う燕とぶ

名古屋　小山かく子

○筑波根に靄靆見えて大利根の海となりたる朝まだきかな

千葉　小山すゑ子

○暑さにぞいたみたりける草も木も夕立帶びて生き返りけり

神田　佐藤柳子

○夕暮の鐘に名殘りの櫻花心して撞け鐘撞の人よ

名古屋　木村操子

○かた來のあはての浦の月影に波も姿もたゝぬ日ぞなき

讃岐　東原蓮女

○情なき世をば恨みじ茲に來て吾名は君に問はれしものを

加賀　常盤女史

○ゆく水にうつす姿や青柳のかげさへかすかおぼろ夜の月

千葉　小川まさ子

○色あせず古寺の庭の姫百合に胡蝶眠れるうす月夜かな

渓子

○うちなびく春の手染の糸柳ひと日〱に色まさりけり

金澤　嵐友女

○和かろく岸の藻間に夕ぐれて涼む小舟に月ぞくだくる

淺草　大沼きさ江

○草の香のゆるう流るゝ夕のべや尾花が末におぼろ月みゆ

伊豆　遠藤智惠子

○標の實落つるその日にやまひ得て綱引く聲をあはれと聞きぬ

○　埼玉　鳳水女史
やせにやせし夢の三年をかへり見れば大野が末に秋の富士こき
○　麻布　加藤廷子
そゞろにも君待つ夜を夜もすがら言寄せ居らば萩の花散る
○　水戸　小田野しげ子
ながめやる霞立こむ夕暮に聲うちそへて蛙なくなり
○　岩代　松山啓毅
姉君にそのまゝなりと泣きゝて心にゑがく母のおもかげ
○　淺草　小野寺花子
いとしごの此の世を去りし夕より折々來啼く山郭公
○　上毛　星野花子
去年までも住みしはこゝと今更に涙ぐまるゝ葉櫻の宿
○　大阪　島田ひろ子
咲き匂ふ花の木蔭に彳みてうら若き君何もの思ふ
○　芝　鈴木きく子
みさぶらひ萩の戸によるあて人にひぶさのつゞみ坐りてまゐる
○　上野　大沼波子
上つ毛や湯女がやさ手に數へられて榛名路いそぐ都詩人
○　三潴郡　中原てつ子
まこと言へば我れも願ひの子なりけり花の吹雪に笠かたげてや
○　上總　霞女子
知らざりき花を炎と知らざりき刺のかくれし我れ知らざりき
○　武藏　青柳彌生子
百千船打ならびたる帆柱のかたへに涼し夏のよの月
○　播磨　秋山敏子
麻のごと亂るゝ胸をまる窓にまだく縫れつ五月雨のふる
○　紀伊　村垣靜子
愛くるし花賣少女の歸り路や小蝶追ひつゝ桑の畑にかくれぬ
○　安房　入重子
己が身のつとめ重きを悟りぬればなほ行くすゑぞ樂しかりける
○　伊勢　歌子女史
君が家はこの川上と聞しより流るゝ水も懷かしき哉
○　福岡　安部信子
鶯のなくやぶかげにさきいでし一木のうめのおもしろき哉
○　大阪　金森よしゑ子
にごりにし世にたゞ獨り清けきは小川にすめる夏の夜の月
○　横濱　勢子
金銀の彩織る雲よ松原よ湖畔の夕べ故郷に似る
○　伊豫　清風女
片われの月の行末をながめてぞ甲斐なくぬるゝ露のたま袖
○　磐城　大平浪子
五月雨の晴れし夕に庭のべをそゞろあるけばあやめ花咲く
○　磐城　鈴木葉子
道づれの若き繪たくみ繪を畫きて友なき旅も淋しくあらず
○　松琴女史
やめる子をさむきふしどにかいゝだき都の夫を思ふ夜半かな
○　秋田　黑丸登美江
あいぬ等が屠る熊の血たばしりて血けぶりすゞし門の白雪
○　秋田　黑丸登美子
うき秋の身にしむ聲のきりぎりす故郷の空を思はるゝかな
○　岩代　石川すみ子
手車の上に眠れる少女子はいかにうれしく夢結ぶらん
○　埼玉　よれ子
うつし世の君に思ひのますかゞみくもりてのみぞはれぬわが胸
○　小石川　吉田斐子
門川の柳の影にたゞずみて空行く雁を數へてぞ見る
○　福岡　大神はま子
植ゑ果てし田の面に早も水澄みてうつれる山の影ぞ涼しき
○　福井　笹原清子
なつかしき君はかなたのみ空にと見やる顏の面藤の花散る
○　千葉　立野自然
海士が子と月のいづるを待ち居れば京のはなしを問れける哉

○　上毛　綠野　菫

はなれやに繪筆持ちつゝ少女子のあちさい見ゐる梅雨の窓

○　鳥取　上山千重子

月のほる眞萩が岡の病窓や琴の手とめて小簾卷くあはれ

○　神戸　梶原しづ子

初雁の夕鈍色の雲に低う啼きて母への文いそがるゝ

○　神戸　岡本操子

龍の如うれりし松に月懸けて銀波すゞし古里の川

○　攝津　和久瀧子

何となくおもひみだるゝさゝやきよ宵月くらき野のさゝれ水

○　尾久村　高橋ひふみ

遠ちこちの山は墨繪のそれのごとつきの嵯峨野を僧一人ゆく

○　陸中　無名女子

夜半まではふりしく雨のはれやみてけさ臨しや朝顔咲きぬ

○　本郷　菊子

久方の雲井にうかぶ月かげに小さきむれに波たつるかな

○　翠柳

流れ行く末さだめなき谷川のみぎはに咲ける白百合の花

○　岩代　根本松江

小雨ふる三里の野つら人絶えて我世此處ぞと啼く時鳥

○　千葉　遠川さと子

匂もれて人のもときの煩はし袖につゝみて抱く白百合

○　能登　山西きく子

月ほめて机によりぬ筆とりぬ歌作り見ぬ又雲の出て

○　相模　木村花枝

夕立の晴れにし後の山の端に虹のかけ橋いまきえんとす

○　島飼村　てつ子

いらかならぶ市の塵にも思ひあらむおもむきかはりし歌たまへ君

○　信濃　孝女

秋一日學びの庭に來て見れば公孫樹あさる子等のひと群

○　上總　小川幸子

悲しさを友と語らふこの夕べ鹿のこゑきく温泉の宿にして

○　茨城　石塚靜江

花蓮夜はまだきなる朝戸出を涼しき風にくしき香おくる

○　長崎　池田むらさき

昨日今日降る五月雨のそれよりもしげきは己がなみだなりけり

○　上野　かひて女

萬象皆を雲が包みてくるゝ野に一人淋しきうらぶれの身の

○　備中　佐藤壽代

後れ稻の黄ばみ初めたる五反田や人影もなく細雨そぼふる

○　大坂　三谷浜子

はてしなき野の草露に夢さめて輕くふみゆく小羊の群

○　栃木　大野あさ子

踏洗ふ人も歸りし野の川に夕過すゞしく川骨のさく

○　長崎　栞洋

如何なれば斯くも心の隔てつるいと晴れやらず五月雨の空

○　石見　俊子

茶の煙垣にたゞよふ夕ぐれをふる雨白し萩寺の庭

○　越中　佐藤つき子

眉ちかき崖にかなれる白百合の花に滴る巖清水かな

○　京橋　葛の葉

知恩院蟲なく秋は月の夜も雪洞ともる萩小徑かな

○　因幡　中村みのる子

海士の子のどよみも絶えてさあらしの声のほづゑにのぼる漁火

○　周防　岡部佐保

曙や露けき園の淺茅生に蕣の花に似て白き百合さく

○　陸中　若生すみれ

なき妹に供へんものと海棠を手折ればきこゆ白菊の歌

○　美濃　笹島美遊喜

奥津城に亡き子を呼ぶか狂女二人うらかなしげの聲あはれなり

○　和泉　白薔薇

潮干より歸るあとには波見えて磯邊靜かに月ぞかすめる



（地）

○讒誣

本郷區湯島四丁目三番地立花舘内　坂上たか子

我は讒誣せられて再び花賣の娘となりぬ。忠義者よと愛でられし主人よりは、横着者よと、罵られぬ。

老いたる母は、只、再び元の花賣を勸めぬ。我はよろこびて諾ひぬ。

十坪に足らぬ我庭なれど、母を養ひまつらむには、猶、薄き人の情けを乞はで足るべきを。如何なれば人に仕へて、朝夕小さき胸を苦しめけむ。

我は南陬國に生れて、空想多き子なりき。かくて一時は、黄金や、爵位や、花冠や、將た、繡衣や、玉車や、世に馴れざる我には、只空想のほむらに卷かれぬ。されど、小さき職につきてすら讒せられて、老いませる母を苦しましめし我れの、猶、學びて學者となりて、儒者となりて、かくてまた讒せられて、八汐路遠き島國に流されけむ古人の如くになりて、母を悲しましむるに偲びざるなり。

花賣！、これには一の讒誣なく、迫害なく、失意もなく、怨恨もなし。只常久に胸の慰藉なるを。然も母は、この眞夏の夜の暑さも厭ひ給はで、繰る糸車の傍ら、あすより花荷ふ爲めにとて、緋メリンスの玉襷を、一針毎に眞心こめて給はりしものを。

あゝ、我は讒せられて再び、自然の子となりぬ。

（評）讒せられて自然の子となりし人古來少からず。

（人）

○馬病

名古屋泥江町　小山かく子

日は竹藪の中に落ちて西の空は眞紅の焰をぼかした樣に美しい‥‥、そして涼しい風は、そよ〳〵と柿の青葉をゆすつてゐる。

胴中を太い帶で釣られて、前足を水のなみ〳〵注いである大盥のなかへ入れられて、二人の男に洗はれて居る鹿毛は、よく〳〵弱つたと見えて、足搔きをする勇氣もない、「お父樣、もう駄目かも知れねえよ」「さうだなア獸醫が云ふにやア、今夜方迄に元氣が出なきやアどうも六ケ敷つて‥‥、これぢやア助かりつこはあんめえ」雑巾を持つたまゝ老爺は氣息淹々たる病馬を見つめてゐる、‥‥春戸の山では悲しさうに日ぐらしが鳴き始めた‥‥。

『鹿毛がこれて死んじやア可哀相てなんねえ』息子は前へ廻つてぬれた手て鬣を撫てやる……『家へ來てから丁度三年稼いてくれたから、何も殘るこたアねえやうなもの丶、こうやつて飼つて見りやア可愛いもんだ、何に生きてゐさへすれアもう荒仕事なんざ、させやアしねえ……』馬は理解したかの如く其とろんとした眼を老主人の方へ投げた。

『あの眼ッつきは、いかにも殘念だつていひたさうでねえかね……』息子はかう云うて、今度は横向きになつて首のあたりを撫ててやると、老爺はうつぶいて途方にくれたかのやう……、鹿毛も首を垂れた、主人の好意を謝するかの如く……。

やれ垣の外に立つて此有樣を眺めた自分の心には、いひ知らぬ深い感情が起つたのである、農夫らがやさしいしうち、なさけの扱ひ……、鹿毛も定めし滿足するであらう！。

夜の幕は次第に隣り村から蔽ひ始めた。

（評）農夫の言十分ならず。

秀逸

○底無川

鳥取市鍛治町五七　上山千重子

くす玉のごとき紫陽花が咲き亂れて、半ば姿を沒した後庭の枝折戸、つとぬけいて、南へ、一町ばかり走ると、其處に一條の淸流がある、併し底無とは、里人が常にそを目しての恐怖の聲てあつた。

見よ、玻璃のやうな淸い水は、いと〳〵滑かにして、囁かず、斯くても流れて居るかと疑はれる位。岸には固より小草が靑々と露を含くんで、鮮やかな水面に影を落し、立ち並んだ綠樹も、下枝を傾けて、流に臨んてゐる。あ丶美しい水、如何にして其一掬を免さないてあらう。と私は平氣て、毎日此の川邊で興じたのてある。眞夏の日光は直射して、土も金もとろけさう、頭にいたみを覺えるが、不思議に此の川邊に立つと、いひしらぬ冷氣がみなぎるので……思はず浴衣の裾をかゝげて、淸い流に足を浸した時、一人の里人、顏色かへてしやにむに私の袖を引いた、驚いて顧みるといつも親切な向ひの爺、私は無言て足をふいて、爺のなすがまゝに任かした、爺は「ヤレ〳〵危ない事て御座りました」と息をのみ、氣味の惡いはなしを敎へた、それはさる身投げ女の怨靈て、この流れにふれたすべてのものをいつも水底に引き込むので、此いけにへとなるものは一年に二三人はあるとのこと、あゝ危かりし私の運命よ。

（評）流に足を浸した時一種の凄みを感じたる等の叙述ありたし。

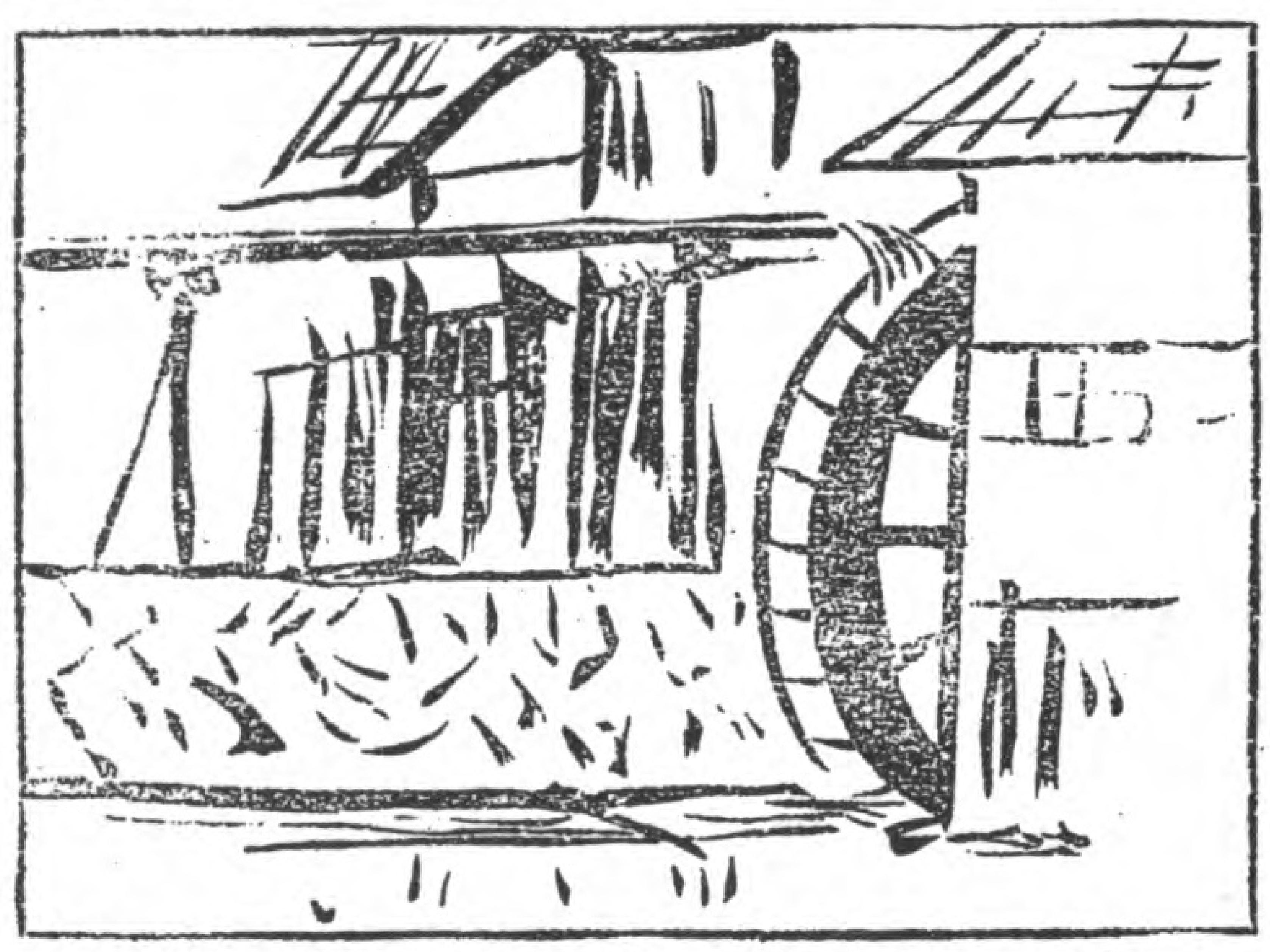
○農家の生活

静岡　貞　水　女

第六月

農家は一年中で此月が最も多忙の時である。荒山を青田にして二番茶を製して了はねばならぬ、さつまの蔓植ゑ、粟きびの種まき、間の仕事も澤山あるので實に忙しい。妾の地方では概して男の仕事が苦勞であつて女は一般に樂であるが、人の妻になつて兒を育て乍ら纖弱い女ではなか〳〵えらい、それも中等以上の農家なら宜しいが下等の土百姓連が子供の五六人も育てながら働いて出る態は傍で見る目も氣の毒である、

今年は雨が少いので農家は安樂であつたが、昨年の如く六月中降り通しと來たら實に情ない程苦勞するのである、あんなに苦勞しても大麥、小麥、腕豆、藤豆などは腐らかして捨てたのが澤山あつた。都の御方は五六月雨が降れば花あやめでも賞して居られるがわれわれ農夫は蓑笠に雨を悲しみ粗衣粗食て穀物野菜をよく作り草を苅り、茶摘みをなし、水が湯にわく日盛も、流るゝ汗を拭ひもあへず、蛭に責められて田草とり、土百姓の娘達は、笠をかぶり鍬を持ち、ドカつく砂をあびながら、豆やさつまの耕作をなし、口中が燥いてたまらねば、土瓶の晩茶で滿足するのです、妾がかう云へば、如何にも愚痴をこぼす樣ですが、實際農家になつて見なさい、思ひなかばに過るのです、ですからいつそ東京へ行かうかと、思ふ娘が無いでもない、が農家に育てられた男女は智恵がないので、思はしい商賣もなく、仕方なく農家へ嫁ぐと、先の息子も百姓は嫌ひ「百姓はいやだ〳〵と若夫婦」されど手に覺えた能はなし、かれこれする內兒が出來る知らず識らず歲重なれば、父母は老衰して親や妻子が手足にまつはり、仕事のとりまはしにも馴れて來て、村の交際も面白くなり、三十歲過ぎれば尻の〆つた夫婦となり、東京へ行かうの、外國で商賣しようのと、思ふ心は無くなつて、草家の中に朽ち果つる身となるのです、噫、來る年も〳〵きたなき着物を着て、半白飯を喰つて、同じ仕事を繰り返して、あゝこんな詰らぬ稼業よりも、いつそ都へ出ようか、私だとてまだ滿十五歲になるやならずで、兩親がお金さへかけて下されば、筆持つて此世が渡れる樣になるであらう、と思ふ時も度々ある



水車（選外）　土佐　鍋島とき子

が、又一方を顧みれば、農家にも美しい男子があつて、活潑に働いて、美しい家庭を造つて居るお方も少くない、かういふお方に我命を預けたなら、紅塵萬丈の都會よりも氣樂で安穩で、いくらよいか知れないなど、手前味噌を思ひ出す、幸ひ少しの餘暇があつて、女子文壇を愛讀すれば、百花爛漫の文壇誌上、私等は無智無才を自覺して悲しくなつた、エヽまヽよ、酷く暑い日に逢はないでも、普通の衣食は得られるし、當地は田の鍬仕事や擣ぎ物、製茶も荷車曳くも、力仕事は皆男子の手によるのだもの、女は兒を生み、兒を育て、出來得る仕事さへしてやれば、自然と中等農家の家庭は出來るのである、米麥を收穫して都の御方に食べさせる、筆持つ人より鍬持つ人の方が安樂で增しだらう、人は分限を守り足る事を知つて我業に滿足しなければならぬのである。

野菜の重なるは馬鈴薯、筍、新牛蒡、夏大根等。
間食は枇杷、山桃、干薩摩。

（評）私は農と小學敎師が最高い職業と存じます。

○歸省

埼玉　高山ふく子

いぶせくつらかりし試驗もすみて、明日は久々に故鄕に立ち歸る嬉れしさ、夜半の夢もなり難くて、唯々時折り過ぐる人力車の音に、耳そば立てしが、明けの鐘五時を知らすると同事に、起き出て書物着物など行李に詰め、旅仕度かひ〳〵しく、宿を立ち出て、七時の二番汽車に汽笛一聲心地よく都を離れぬ。道すがら窓より映る四方の景、都に慣れし眼に、物珍らしくて、汽車は國分寺驛に着きけり。川越線乘換の驛夫の聲に、目覺まされし心地して乘り換れば、又もや此處より六里の汽車の旅、心急ぐ身の汽車の、何時になう遲き思ひのせられて、懷中時計の時の遷るを、絕間なく見つめつゝ、運び行かるゝ程に、漸く入間川停車場には着きぬ。此處にて鐵道馬車に乘換へ、飯能町にと向ひぬ。早き汽車の、遲き思ひのせられし妾は、猶も馬車の遲きに苛ちしが西の方、黑く鋸の齒の如く、立てる秩父の山々、又綠張り廻はせる、近山の景色、窓より見えては、そゞろ故鄕にも、着きたらん如き心地のせられて、知らず〳〵の間に、飯能町にはつきたり。此處に着きしは、午後四時にして、日も早や西の山に、廻りたれば、人力車にて道を急がせぬ。流石は名にし負ふ秩父山に、分け入る事なれば、道も險惡にして、人力車は、石に當りて振動し、その響き、身を傷ふやうにて、寧ろ步みし方、よからんと思はれたり、されど道の兩側切り斷ちし上、青葉若葉に蔽はれし處、あるは見降ろす幾十丈の下、薄き藍を流したらん如き吾野川、清流岩に碎けて、玉かとばかり散り、散りては又、合

さりて流るゝ樣、暫ばし見ぬ間の、故郷の景、またなう物珍らしく、人力車は早くも、二里の道を過ぎて、吾野橋には差し掛りぬ。我が家も、はや間近うして、そが白壁土藏も、家の屋根も、手に取る如く見えつ、そが内に、なつかしき御兩親樣、又可愛の妹、如何にやと、羽もあらば、一瞬の間に飛び行き度き心地、胸の血汐も湧きかへりつゝ、車遲しと曳かれ行く程に、漸く家の門には着きたり。庭に遊び居たりし妹に、袖捕へられて、家に入れば、父母樣も、妾の歸り遲しと、待ち給ひし樣子、久々に父母樣の、溫容に接し、疾くより、沸かされし風呂に、浴して旅衣を、着換へ久々に、嬉れしく、一家團欒の、夕餉に向ひぬ。

（評）家の見ゆるまで近づきたるに飛び行きて思ふは人情の常。

○月無き夜

湖畔　始子

雨の晴れ間には夕暮れの野を一人櫻ヶ岡の邊りさまよひぬ、暫しは夢中に朝綠の譜を歌ふ時廠布工場を裏より出る黑影の此處に近づくを見不思議の目もて眺めぬ森の木立縫うて來る影は次第に近く數十步の彼方小さき道に出でたりあゝ此影世にも哀なる工女の亡體を妙法寺に葬るの途中なりき黑き布もて包まれたる棺傍に寄りそふ悲しみに泣く乙女等、あゝいかて涙有る人の泣かざらん、葬らるゝ人の魂や今何處、薄命の乙女永久の命得よと祈りつゝ涙の目に見送りぬ、折しもトッと聲するに驚き振りかへれは六十路許りの老母の實に身も世もあらず泣き居る嗚咽の聲定めし亡き乙女の母人ならむと進みよりて勞りつ「御前樣どうしたの？」と優しく問へば溢るゝ老の涙を止めもあへず恰も狂つた人の如く「あらおゝお花坊」と後は口の中に低く唱名稱ふるいぢらしさ、淋しき一行は森の彼方に薄う〳〵遂に消えぬ、月なき夜の空氣つたひ來る鐘の音は哀に長く餘韻ひゞかせて彼方の山に、暮れぬと告ぐる鐘もききぬ、いざとて泣き居る老母が手を取りてたどる道すがら涙にて語る物語りにハンカチーフ絞りぬ、見るも哀れなる小さき家の前に老母は「誠にお孃樣有難う存じます見ず知らずの貴女さまが、」おゝお有難う御御座いまする——と云ひつゝ幾度か禮し中に入りぬ、明日は必ず訪はんとて別れき、哀れに取殘されし老の身のいかに心細からん扨も今宵はいかに過すらん抔と思ひつつ歸りぬ。世にも不幸なるは漸うに咲き初めし花の蕾のまゝ散りにし人よ實に彼が短き一生は涙の玉もて飾られたる哀史なりしよ、優しき彼は老いたる祖母を喜ばしめんとていかに多くの苦痛を忍びしが、酷なる墓の下に冷き工場に若き血と涙とを絞りし花女は幾度人知れず袖ぬらしけん、哀れ生きては幸なき工場の裡に、死しては淋しく工場の裏より二三の友に送られて永久に歸らぬ旅路にと出立つ幸なき人よと我が身に比べて

暫し同情の思に冷き社會を泣きぬ、短夜の明けなばとつとめて眼閉ぢんとすれば幻の如浮ぶ月無き夜の野邊の送り、老母の姿、雨にしほるゝ花の姿等拂へども去らねば燈明くしてせめては心許りの手向け草にもと筆とりぬ。

（評）悲惨。

○夕づゝ

薩摩　白菊女史

五彩まばゆく染めなしゝ西のみ空の雲の色、うすれゆきて遠く幽かなる鳥影の淡く夢のごと夕靄に包まるゝに次第〳〵に近くの海に襲ひ來てやがては村や田や畑や悉く夜の神の領とぞ了り果てぬる、かかる時しもみ空より輝き出づる夕づゝのまたゝきつゝ慈愛の眼ざし清く下界に臨み給へり。

妾は幾歳を旅の庵に暮し行く身の海山遠く隔つる故郷の空忍びては深き〳〵物思ひに沈むを常とせり、あはれ語るに友なく學ぶに師なき片山里の夏の夕、梢の蟬のまだ鳴き止まぬ時妾は椽より夕づゝの光仰ぎつゝ胸に湧き出る無限の感慨にしばし冥想にふけりぬ。

あゝ思へば幸なき我身かな。

西も東もまだ知らぬ振分髮の其古も指折り數ふれば早や拾五年海山も只ならぬ高く深き御恩を蒙りし慈愛の母君はふとしたる病にて彼の世へと逝かれしより後に殘るは父君と二人悲歎の淚にくれ居しが程なく新らしき母君は來られたり、妾は亡き母君の再生の思ひして事へまつり繼母の君も亦いつくしみ給はりしが妾の歲たくるに隨ひてはみ心の狂ひてか小言交りの難問題妾の袖には空に知られぬ時雨のかわく隙さへなかりけり、さるを父君のいつくしみもて今此の地に小學教師として無邪氣に罪なき愛し子と手に手を取りて一日一日と過ぐし來りしも三歲の月日をぞ經にける。

今の友の身の上を忍びわが身の幸なきを歎きなば將來に思ひ及ぼせば又しても悲しさの胸にあふるゝ！

あゝ夕づゝの光りそは妾の慰藉の神なり、浮雲に似たる浮世の煩を忘れて淸く汚れなき天職に安心立命を得べく妾をして反省せしむべき天の使者なればなり。

あゝ懐かし夕づゝの光り！　彼處よりは亡き母君も妾を護らせ給ふらん!?!

（評）製りたる所あるを惜む。

○橘月夜

土佐　白薔薇

今宵の月を賞せんなど云ふさるやさしき心ならねど、つひ橘の香に浮かれて出たのは屋後の柑橘園。

吹くとしもなき夜風につれて淸い香がする、其の香に醉つて常久に詩の花咲くてふエデンにでも遊んでゐるかの樣な心持ちになつて、七畝に餘る柑橘園を三度も廻つた、月は斜に美しう熟せる新夏橙（ニューサンマーノオレンヂ）の實を輝しつゝあつたが今や頭上にかゝつて葉洩の光は地を彩なしてゐる、折り〳〵吹きくる小夜嵐に梢の青葉搖らいて地上の彩も亂るゝのである、何と云ふ詩的な景色だらうふとしも顕をあげて月を仰げは杜鵑の、聲も

無く月を横ぎりて西に飛び行く。

園の南を流るゝ小川のせゝらぎは月を浮べて琴の音の樣な音を立てゝゐる。

今や盛りの花の色、月の光に對して一しほけだかく、香さへ人の界のものとしも思はれず、折りからお隣の富貴男樣の例のパイオリンの音、この崇高なる美景をゆるがせつ緩く低く長く……

○白壁の家

大阪　村瀬蔦子

「お孃樣、モ大分に夜も更けた樣ですからお疲みなせえまし、明日は何かとお話しますべえに、」

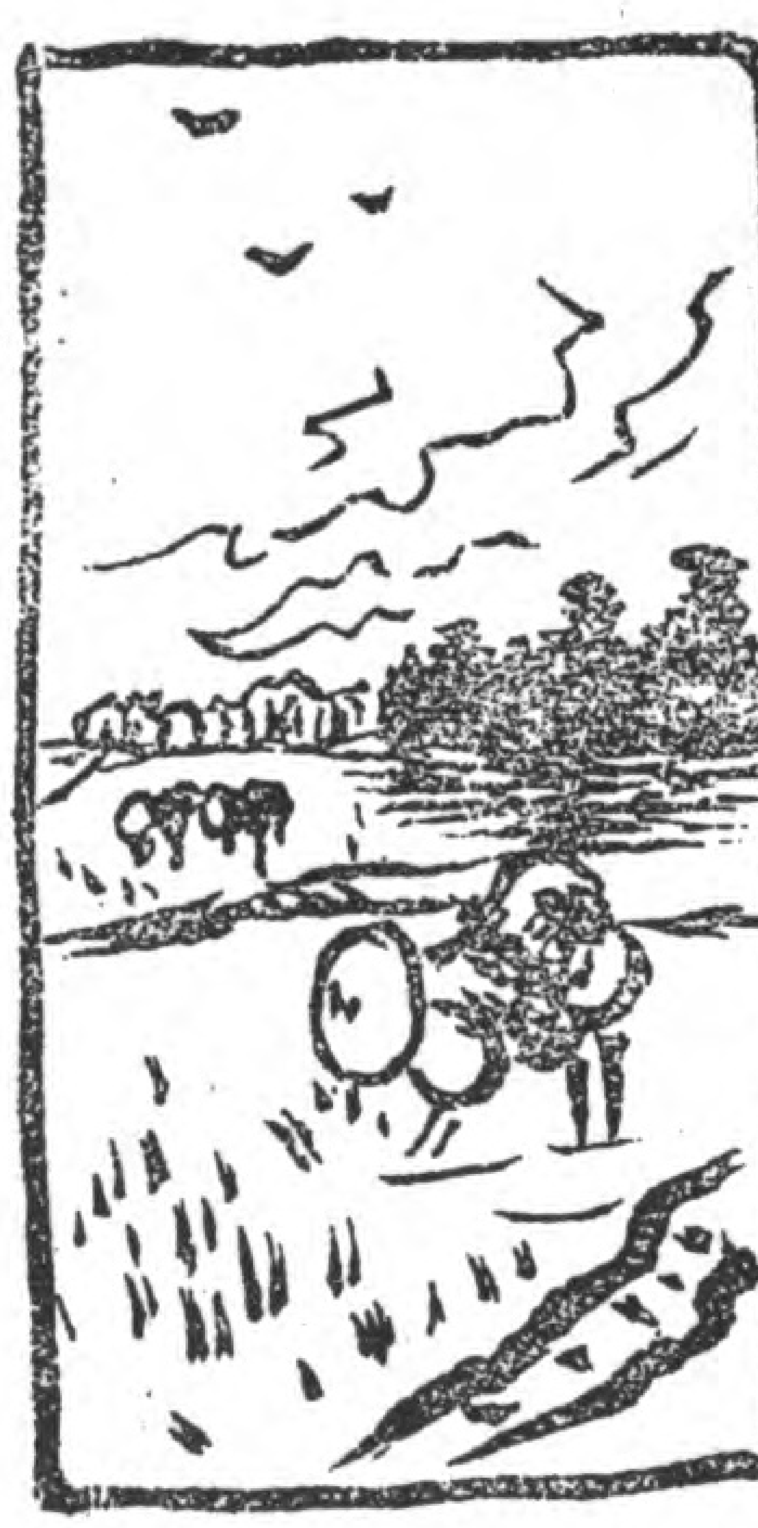
「ハア、然うしませよ、嬉し悲しいて遂、遲くなッたのネ、サア寢ませう、」

更けし百戸が村ば極靜かで物音はなく、さすらへる身には泌々ともの思はせて頭重ぐるしく、寢付れればそと身を起して、淋しげに二つ三つ咲ける夕顏の垣根に寄添うて、兄樣の在す地は彼所ならむと見やる大空には三年以前互に名殘惜みし夜の月と同じ凄さ片割月のかゝりて、いよゝ物思はする事よ、振返れば、見る共なく目に入るは白壁、あゝ白壁の家、父のいませし五年前迄住馴れし家、白壁の我家、今は……あゝ、叔父が住家。

白壁の家、と口ずさみ、叔父といとゞ口惜しげに云はれつゝ、悲しけれども暫しが別離と……兄樣は。

海山千里、故郷、父母の御墓、妾をも殘して出てませしは早、三年の昔となりて、待ちつる嬉しき日は來りぬ、便りの着きぬ、爺、嫗の歡び、里人等が笑みつゝ述ぶる祝詞、さても早く見たや兄樣が滿面の笑!!

ひやりッと肌にふるゝ風にふと氣づきて見上ぐる空に月なく、星なく、雨雲低うして、只見ゆるは夢か現かふわり〳〵と白壁の家、昔、我家の白壁！



口繪（選外）　埼玉　紫花子

○夜半の涙

岩代　根本松江

「姉樣能く戻て下さいました、私什麼に怨みましたか、お免し下さい、皆哲坊が可愛い斗りて御座います。」

元はと云へば皆兄樣の心遣ひからですが、罪の無い哲坊を、姉樣可憐そうだとは思ひませんてしたか、姉樣、オヤ何處へ入被るんです、アレ哲夫も今目を覺ましますのに、姉樣！」「ア、此の刹那、母ちやんと呼ぶ聲に、ハッと氣が付くとこは如何に、妾は哲夫を抱きしまゝ冷たき床の上に……。又しても濡れ安き枕の紙、あゝ過ぎし月兄上との深き緣をたちて、別れ行き給ひし姉上や今何處、打續きたる我家の破產に加へて、父上の逝去、兄上のみ心遣ひ、他人の姉上、御離緣遊されしは無理ならねど、年の行かぬ此哲夫、母樣よと云ひ出てゝは、未だ聞き分けぬ三ツの幼兒、母の心も我心も知らで、持て餘す事は幾度ぞ、怨めしき姉上、例へ、兄上のみ心違ひとは云へ、何日かは、お目の覺めます春も、來るならむを。あゝ怨まじ、只何事も運命とあきらめん、かくて、力の及ぶ限り、母上に仕へまつらむ、一身の愛を此兒に注がん、あゝさなり〳〵、捨てられし者こそ幸福なれ。兄上姉上は居まさずとも此の少さき叔母が、腕もてみん事哲夫を育て上げなむ。おゝ此の寢顏の神々しき事よ、かゝる幼兒を捨てゝ行き給ひし姉上の、み心は鬼か……折しも血に啼く杜鵑の一聲、我家の屋根を橫切りて、夜はほの〴〵と、明け初めぬ。

○片身の笛

廣島　ゆり子

櫻花咲きなは君が病ひ癒えなん、櫻花は咲きぬ、櫻花は散りぬ、君が病ひは癒えず、若葉繁らば君が病ひ癒えなん、若葉繁りぬ、蟬なきぬ、されど君が病ひは癒えて遂に小雨そぼ降る一夜君は黃泉の人と成り給ひぬ。嗟々定めなき世に定め有るは死のみなるか、それよ、君が殘し給ひし笛一竿、我を思ひ出づる時は是れ吹けよとて、オゝ君よ我は亡き君を戀ふる心の堪へ難きに今月光の下にて君が片身なる笛に限りなき愁ひを吹きすさぶなり。

君が此の世に在ませし時月影涼しき一夜流れ清き小川の傍に深き思ひこめて吹き給ひし一曲の笛の韻は嬉しかりき、されど今宵我獨り茲に立ちて吹く笛の音は餘りに悲しきかな。

あゝ君よ亡き君よ、君は泣くが如き我が笛の音に耳傾け給ふや、我が愁ひを知り給ふや。

○里子に出せる弟を見て

埼玉　木村松香

あゝ世の中にはいやなことや悲しい事などが澤山あるけれど、親に別れる程悲しいことはないであらう、考へて見れば見る程悲しい、おつ母さんは去年の夏あついさかりに風を引いたのがもとになつて、とう〳〵三十八を一期として行かれた、靜チヤンと私しと二人をのこして。

おつ母さんのおすきな薔薇のはなが咲いた、花はちつても翌春はまた匂ふのに、月はかけてもまたみつるならひなのに、おつ母さんは行つたきりでかへつてこない、お父さまはお尋れしてもだまつていらしつてなんとも敎へて下さらない、けれどこないだおばあ樣が「みつやお前そんなに泣いたとてもお母さんはかへりはしないよ十萬億土といふてれ遠い〳〵處へゆかれたのだもの」と仰つた、お母さんがいま歸らぬ處へゆかれるのならばもつとお小言いはれない樣にもつと御心配かけぬ樣に氣をつけたものを、親の恩は山よりも高く海よりも深いと修身で敎はつたつたがいまではじめてわかつた、もつと孝行するのだつた、子養はんとすれば親いまさずといふのは此のことだ、あゝ悲しいな、面白いものを見てもきれいなものをみても悲しみが増すばかしだ、お父樣に御心配かけてはならぬからこらへにこらへて居るが其くるしさはなか〳〵てない、けふの樣なときにはなほさら思ひ出される、お母さんさへ御出なされば靜チヤンも里子などに行かないですんだのだに、靜チヤンはなにもしらないかして伯父樣のふところで笑つて居る、あの愛らしい無邪氣な樣なお母さんの御目にかけたいけれどそれもだめだあゝ、

○螢

相摸　愈田たま子

さみだれの露にふす草葉の宿を、墨染の夕べより飛び出てゝ、光高くも夏木立の繁みを、かなたこなたにぬひ行く少き虫よ。思へばなれは飛草のうきもつらきもたゞ己が胸の内にこめて、露と散り、星とみだれて夜もすがらいはぬ思ひに身をこがしつゝ飛びかふも、あはれたゞ一ツかすかなる、希望の光あるのみによれるならむ。

清き流のいさゝ川たもとすゞしき夕暮に螢とぶなりといとふし面白うふりの秋の少女子たちが、靑き小籠に黑枝のうちわもち添へて、或は高く、或は低く、うたふ聲に、飛び出てし螢美しともうつくし、

いざや幼子とりて集て夜もすがら、窓の光に文を見よあゝ何たる清き聲ぞ、呉竹のうきふし知らぬ、少女子たちは玉と碎けて飛ぶ螢が、いはぬ胸の內、知るやしらずや。

端居近くすゞみしける折、やり水に光うつして飛び行く螢こは又いひしれずすがすがし。

亡き友の野邊の送りすまして、ひとりさびしくかへるさの闇路をてらし行く螢こそ、あはれなれ。

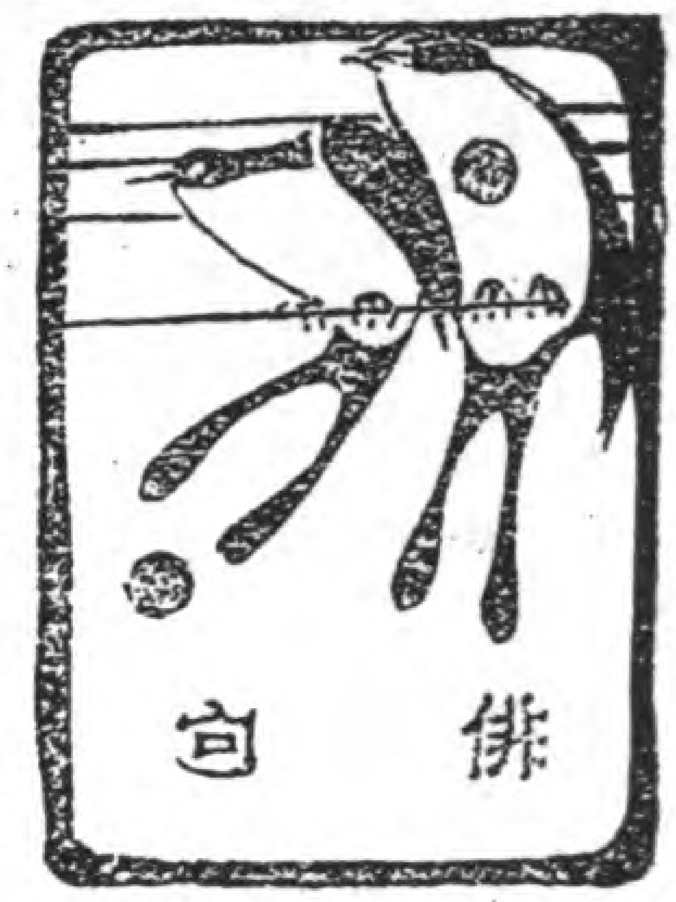
美しと見る里の子、文學ぶ窓のい光添へむといふ少女子、招く袖にもなびかぬとてかこつ美人、實に思はさま〴〵にて人毎に、たがふなるを、いはぬ螢が胸の內こそ、あはれいかに、つらからむなどゝ又してもはかなき思を、よする折しも、心ありげの希望の光二ツ三ツかなたより見え來て、なつかしや。

○不運なる妾

みむら

女子も男子の如く、獨立經營せればならぬものなれば、それこそ學職をみがかればなるまいけれど、他家に嫁して舅姑に仕へ、一家を整理する身に小學校課程を卒へた丈で十分で有る、まして身分相應と云ふ事もあると云うて、高等小學校卒業せし後は、裁縫專習科四とせ餘り通ひしのみ、其れよりは每日〳〵西も東も知らない、坊やの守りつしゝ、厨の業のみ其暇にわづか二三の雜誌を見るのみなればせめては、ひそかに家をぬけ出てゝ苦學にてもせんか、否そは家庭が許さじ、いづれ后より、村人の知りて、惡しき道樂にて、家出したなどゝ、噂の立ちしならんには、家名を汚す故本意なきまゝに、友とてもなく、訪ふべき人もなく、別に訪ひ來る人もなき、深山の奥の詫び住ひして、本誌の投書文をたのしむのみ、たゞ二人の親友は西に、東に、遊學して妾は惜しくも、一人山家にのこされけるよ。

巖谷小波先生選



特別第一賞

横濱市尾上町五ノ八一 吉川霞峰

夕顔や加茂に住まひて冠師

〔評〕古き物語を讀む心地して興味云ひ難し。

特別第二賞

德島 齋藤菊子

葉櫻や本堂の圖の百分一

〔評〕居ながら名所廻りを爲すの想あり。

特別第三賞

西備 華月子

琴ひと夜砧ひと夜や竹の奥

〔評〕想夫憐の曲を聞くに似たり。

天

京都市六軒町今出川下ル 大澤百的女史

毒草の犇と生ひたる清水かな

〔評〕力ある句なり。

地

讃岐國三本松 東原玉翠

星をちて石ともならず飛螢

〔評〕心地よき句なり。

人

滋賀縣彦根町字外町 清水ますえ子

櫃の上に夏は來にけり蠅二つ

〔評〕面白き句なり。

選外

帛をさく繪師がいかりや子規　浪花 風蘭女
一夜酒竈の神を汚しけり　越後 藤原利子
打水や竹の雫の椽に散る　紀州 鈴木利子
すゞ虫や一あし前の草の中　備前 白百合子
飛蟻飛ぶ納骨堂の日暮哉　伊勢 佐藤しずま
愛らしき踊りつかれの寢顏かな　西備 池田蓉子
裸馬北に走りて夕立す　和歌山 釘貫ひろ子
さゝ波や偶々起る金魚鉢　埼玉 大野紫女
よい町の舟から見ゆる幟かな　愛知 多田辰子
夏の雨室に小供の芝居かな　駿河 松永勝美
夏の山村の眞中に茂りけり　美濃 あけぼの女
時鳥裏の大杉雲をつく　岐阜 秋村女
蟬啼くやしぼつて結ぶ笠の紐　相州 小林英子

俳句

蝙蝠や弦月もるゝ杉木立　相模　仲子
朝霧や護摩たく山の杉千本　相州　曽我てつ子
蜻蛉の卵生み行く小川かな　下總　藤崎美奈子
汽車の風岡邊の櫻散りにけり　新潟　しづ枝
湯あがりや月の小庭を逍遙す　仙臺　黒澤たます
炎天や火もふきそうな鬼瓦　福岡　後藤良子
且つ割れば紅したゝる西瓜かな　石見　千代延俊子
汗拭ひて笠をかけ合ふ峠哉　因幡　中村みのる子
白百合や欄に凭る人影痩せし　豐前　藤本千代子
秋の月默盗人に襲しけり　群馬　飯塚美起
紫陽花に遊女もすなる日記哉　伊勢　中西錦扇子
森かげに馬をつないで晝寢かな　岡山　永原多計子
妹を呼んでかくれぬゆりの畑　小石川　小林芳子
雨を待つ蛙わが句をそしりけり　播磨　酔芳詩史
若草にかくれて細き清水かな　伊豆　伊賀かれ子
板屋根に蒲團干したり五月晴　靜岡　中村かなる子
蚊やり火のすんで端居の夕餉かな　栃木　雲葉女史
山寺や犬の欠伸も蠶の雨　下野　兒島とく子
柔かな風のうねるや若葉山　下野　兒島節子
梅雨晴れて干し物多き小村哉　安藝　千鳥
ひる顔や岸をはなれて舟遊び　神奈川　ゆたか
稻妻や稻荷の森の明かに　下總　白百合女史
衣更へて帯しだらなき女房かな　北總　霞川女史
春の海御朱印船の入りにけり　新潟　岩瀬波子
散紅葉吉水院へ御遊かな　千葉　石渡のぶ女
か夕馬草の油さすなり夏木立　高松　江川紅花
眼の届く果は島なり風薫る　兵庫　賤文
峠にて笑顔のみけり岩清水　播磨　夏木絲
わか鮎や石滑かに水はやし　越前　野坂まさを
疲れては西山を見る茶摘かな　秋田　村井花子
繪日傘に粋あし白き女かな　芝　秋山飲子

葉成りて若葉の里に歸りけり　千葉　代子女史
魚河岸や柳がもとの涼み臺　岡山　横山龜子
網干し場夕日に迫る蜻蛉かな　陸前　大槻昏村
七夕の從流しやる小川かな　福島　村岡やお子
秋たつや裸てれたる腹の上　羽後　前田久子
疲心のよき夜を雁の別れ哉　上野　松子
窓あけてねる家多し夏の月　和歌山　屋子女史
風呂場より谷見ゆるなり閑古鳥　美濃　坪内清枝
蝉啼いて栗こぼるゝ山路かな　羽後　宮子
三井寺や鐘樓高く青嵐　陸中　阿部宮子
間道の道標朽ちて羽蟻とぶ　陸中　飯島わくり
峽中を下る小舟や夏の月　陸中　黒澤美津子
はゝき木の宿に涼さかたりけり　大和　里の乙女
溫泉の宿の木枕借つて晝寢哉　豊後　後藤栄美子
井桁替ゆる俄普請や柿の花　西備　翠月子
牛車は牛と野に寢て月見哉　千葉　高橋幸子
月の門蚊遣の料を募れけり　小樽　梶水仙
藤棚の下に茶屋あり酒をうる　上毛　磯貝壽惠子
わが里は水から暮れて水鷄哉　千葉　天美桂花女史
片帆風帆數へて磯の涼かな　福島　玉緒
浴衣着て京橋渡る少女哉　高槻　赤松春雨子
夕顔の宿に病を喞ちけり　千葉　桂石渡久女
溫泉の山の若葉に煙る小雨かな　上總　あさ女
雁高くへの字くの字に渡けり　西側　武藤オソケリ
飛や笠嚴寺夜ふけし雨の窓　岩代　岸野常子
風薫る金紋の馬や葵阪　横濱　泉舟子
夢の秋なつかしき橋渡りけり　芝浦　岡田すゑ子
朝顔や氣になる夢の捨どころ　千葉　田村瀧子
氷屋の二軒並らんで青簾　大分　安田初子
聖しき方に傾く日傘哉　横濱　白妙女史
金剛野山を越えて通ひけり　磐城　鈴木紫子

消息文

天　○歸省の夕都の友へ

岩代須賀川町　根本松江

三年振りにてなつかしき、故郷の風呂に浴し候、湯上りの心地は何時も同じきものに候へど、今宵は殊更、氣も心も流暢と致し候て。此の世に在る身とは、思ひ侍らず、之や必ず愛の泉もて沸したる風呂なめりと存じ候。寮舍の風呂に浴し何某の君お得意の諳誦、テニソンの詩を承まはるより小さき弟達の、裏庭掃きつつ歌ふワシントンの唱歌こそ、嬉しくも將に、珍らしくも聞かれ侍り候。僅か二尺に足らぬ風呂の窓より見ゆるもの、遠きは、空、山川扨ては廣き田畑、近きは我家の背戸畑にて、勢ひ能き野菜の數々に、父母の丹精の程も見えて、獨り頰笑まれ候、一家内悉く同じ血を別けし人のみに御座候、都にては、一聲千金とも申可き杜鵑も、此地はいと安く聞き侍られ候よ、湯上りてより一時間たつやたたずに、五度まで聞き候ひぬ、後れし聲は又次ぎの便りにもと、先は湯上りの心地すがく／＼しきまゝに、墨色の惡しきをもかへり見ず、かくなん、かしこ。

（評）歸省の快を寫すにその夜の入浴を主にしたる大に可なり讀む者をなして皆へ繼き温味を感ぜしむ。

地　○都の妹へ

愛知縣海東郡神守村大木　石原田鶴子

みちさん、お手紙拜見しました。萬事お察しいたします、隨分とつらいでせう、苦しいでせう、けれども辛抱なさい、我慢して勉强なさい、みんなあなたの爲てすからね、お父樣さへお出遊したなら年若いあなたにこんな苦勞もさせまいけれど、仕方がありません此上はお父樣のお名まで上がる樣な立派な、音樂家となつて下さい、私はあなたも知つての通り充分に修める事が出來なかつたから、あなたにはどんなにしても卒業までの學資は送るつもりですから、しつかりと勉强して下さい、然し不用のお金は一文も上げませんからリボンや繪端書なんかはなるべく買はない樣にして下さい、成功した上は、いくらも出來ますからね。私の方もなか／＼苦しいのです、僅ばかりの月給で、あなたへも家の方へも出すのですから、よくそこらも考へて

下さいよ。又此度の演奏會にはあなたも獨奏するのですつてね、私、もう嬉しくつてなりませんよ、お母樣はね、みちは幸福者だ、私はまだ　皇后樣の御姿を拜見した事もないに勿躰ない、御前で演奏するなんてどう云ふ幸福者だらう、と淚ながらのお喜てす。

それからお申越しの袴の義、貴人の御前へ出るには失禮ですから必ず前日までには縫つて送ります又、着物も例の黑木綿ぢや見苦しいから私の薄小豆の紋付をお送りします。猶、伯父樣伯母樣の仰せに御無理のあらう筈はありますまいが、よしあつたにせよ辛抱してね子供達の面倒もよく御覽なさいよ。

昨夜もね、もう寐ようと思つて窓をあけたら、澄みきつた月が皎々してるの、あゝ今頃みちさんは一生懸命寫譜でもしてるだらうか音樂史でも調べてるだらうかと思つてね、最愛なる我妹の前途幸多かれと祈りました。此上とも身躰を大切に勉强なさいよ。

（評）非常に親切で、何から何までよく氣の付く姉さんを持つてみちさんはお仕合せ。

（人）

○都の友に歸鄕を勸む

福島　さくら子

靑葉にそよぐ風の音につけても絕えて音せぬ人の御上わきてなづかしうそなたの空のみ眺めやられ候、扨て君には今年も御歸鄕あらせられずとか、一日も早う休の來たらむ事を待ち一日も休の多からむ事を願ふ私等とは雲泥の差も啻ならず候かの小學校時代に常に一位を占め給ひし君なればこそと感服の外なくてなむ、ああ其後の御上達さこそといと浦山しう候、されど萬事にひいで給ふ君此休み迄を利用せずとも人に後るゝやうの事は露あらじをあまりの御勉强に御身に恙などありてはと存じ候去る日御實家に御伺致し候皆樣御機嫌よくいらせられ候間先づ／＼御心安う思召し給へかしたけ子樣には最おほきうならせられ「東京の姉さんは明日歸りますよ」とて君を待たるゝ事の無邪氣に愛らしき、君は戀しと思さずや、「今年こそは是非歸る樣にと云ひやり候に少し勉强したき事のありとて一向にきき入れず彼れが彼の地に旅立ちしより一度も歸り來し事なければ此休をとしきりと待ち居たるなるを子を思ふ親の心は知らでや」とは御母上の御言葉元來孝養に厚き御許樣よく／＼御推もじあられよ、君が御上京なされてより三年にも相成候へばさぞや御容姿も變らせ給ふらむに一日も早う御歸りありて御兩親樣妹子樣を悅ばせさせ給へやことに來む十日には同窓會も催さる

るとの事なれば珍らしき都の御談を承りたく是非と御すゝめ申上候かしこ。

（評）穩にして力ある勸告なり。

秀逸

○寄寓せる家の厚情を故郷の親に報ずる文

尾久村　高橋ひふみ子

妾は、殊に閑靜の地を好み候まゝ、當地へ來り候ても、都とは程はなれたる、此の田舍家に寄寓いたし居り候。校への登り降りには、少しく困難を感じ申候が、出來得るかぎりは、なるべく、都の塵に遠ざからんの、妾が心にて候よ。此の家の、御一同樣は、博愛主義にて、夫れは〳〵御心切なる事、眞實の親子姉妹も、遠く及ざる程にて候。て妾が校よりの歸りの、少しにても遅れ候節は、御案じ下され候て、丁度、弟の信一位ないと快活な操樣と申が、其都度、妾を迎ひにとの御使者にて候。中にも、御老母樣の、妾を御愛し下さる事一層深く、妾が、卒業の曉きまでは、御兩親樣になり替へて、御世話申す考へにて候などゝ申され候。妾が、少しにても不快の節は、醫者よ藥よと夫れは〳〵御手厚き御介抱、餘りにありがたく、勿躰なき程にて候。かゝる家庭に寄寓せし、妾こそ、いと幸運に候へ。今年十九の美代子樣と申す方は、もう高等女學校を御卒業との御事にて候。以上の次第に候故、妾には、古鄕の空を遥かに眺めて、浩嘆するが如き事は、さら〳〵これなく、日々嬉々として、希望の鄕に、邁進いたしつゝこれあり候。

御一統樣の、御睦しき事、何時も家庭は春風の充ち滿て、和氣靄靄御團欒のさまは、御羨しき程にて候。

御兩親樣にも、此書御披見の上、御悦び下され候て御當家へ御禮の書札、御差出だしの程、呉れ〳〵も御願申候。先は時分柄、御身大切に祈上まゐらせ候。かしこ。

（評）兩親の喜びいかばかりぞ。



結髪（選外）　廣島　兎っち子

○螢見に友を招く

小石川　奈美木翠子

今日此頃の堪へ難き暑さにもおかはりなく渡らせられ候事目出度限りに候。

一昨日田舍より螢一籠贈られ候まゝ早速泉水のほとりは緣なす松の下枝へ釣るしおき候ところ、昨夜月漸う登り初むる比なりそのやさしき光りを放ち、面白き眺めに思はずも夜を更かし申し侍り候。されど螢は秋風立ち初むるをも待たで朝の露も消ゑ果つるなる短き一生の、いかで小さき籠に入れて一人樂しむに忍び申されず、世に命あるものゝ自由を希はぬは無きに分けて露よりも脆き螢などの哀れにも亦優さしく覺えて、贈り越され候主意に背くは本意なら候へ共噴水の飛沫滋く小笹生ひ茂る邊りへ放ち遣り申したく、尠なからぬ數にし候へば光りては消ゑ、消えては又光りつゝも松の梢にさながら小さき星影を宿すもあるべく、群竹の中に弱き灯をかゝぐるもあるべく己が思ふさま／＼に舞ひ上り舞ひ下りて飛び交ふさまの、此所ら邊りにては觀られぬ眺めならんかと存じ侍り候まゝ、明日涼風通ひ初め候比より必ず／＼御出てあらまほしう待ち侘びをり候、かしこ。

（評）一風變りたる螢見おもしろし。

○姉さんのたのみ　　本郷　薫子

庚ちやん、御無沙汰致しました。堪忍して頂戴。御變りもなくて何よりてすね、昨日は御手紙有がたう、庚ちやんはいつも悲しい事ばかり云うて姉さんを泣すのてすもの、どうしてそんなに聞きわけのないお子におなりてせうね、お父樣やお母樣が御出でなら、他人樣の家に奉公などさせませうか、今頃は庚ちやんも乾度庚ちやんの大好な新二樣の樣に、白の筋の付て居る帽子をかむつて學校に御出でせうが、これもぜひない事ですからと常々姉さんが云ふてせう、其時はハイ／＼と云ふても、直にあんな悲しい事ばかり云ふのですもの困りますは。今迄した事もない事ばかりするのですもの辛いのは無理はありませんが、こゝ二三年辛抱して頂戴ね、二三年たてば姉さんはどんな事をしても乾度學校に出してあげますからね、忍耐して下さい、姉さんはそればかりがお願ひよ。決して庚ちやんにばかり悲しい事をさせるのぢやないのですからね、姉さんなどもお内に居る時は夢にも知らない辛い事ばかりですよ。それでも辛抱するつもりよ。辛抱しませうね、庚ちやん、御暇の時は勉强なさい、ですが勉强ばかりして、大切な御主人の御用を忘れてはなりません。

（評）美しき哉姉弟の情。

○弟の許に　　越後　鈴木たま子

思ひ廻せば昨年の紅葉散る頃突然御許の主家を出奔せられし儘一片の便りも無く後て朋友の處から事情を聞

けば番頭の暴虐に堪へずして主家を飛び出したんだとか斯る事情の在りしものなら一口私に知らして呉るればば宜いのに何程内が貧困だとても何とか仕様の在りしものを大膽にも僅か六拾錢や何かの路銀を以つて淸水越迄して淋しい獨り道中するなんて嘸々其砌は艱難の目に出合つたでせう噫實に今想ふと胸が一ぱいに成ります御許も生計の不如意から拾一の年に奉公に出だされ拾四歳にして他郷の憂き目を見る等誠に不幸の身の上で在る夫れに又父上の眼病は益々宜しからず其上又今春に至つて心臟病を惹き起し最早全く仕事も出來ぬ樣の今日此頃の有樣にて今は私も身の因果と諦め泣く泣く人に雇はれたり糸引をしたりして漸く細き烟りを立て居る樣の悲しき境遇となり寢ても起きても忘れられず只便りに思ふは御許一人何卒少つとも早く歸國して御呉れ兩人にて父上を看病して上げたなら嘸父上もお欣びせでう。

（評）佳純。



橋（選外）　入寺　乙幡秀江王

○都の姉樣へ　三河　澤田つま子

目には靑葉、山杜鵑初音を漏らす今日此の頃を、御懷しの姉樣にはいかに過ぐし給へる、さても妾事、年頃の望漸に叶ひて、今年は田植のお仲間入、美知さん浦さん達と、三寸伸びし早苗とる身となり侍り。裾短かなる裝の流石に心恥しうはあれ、紅の襷十字に綾なして、白手拭の姉樣冠、髮のほつれを菅笠の萌黃の紐に結び止めたるもいとゞ可笑しう、危ふき手姿もいつか馴れては、二つ三つ覺えたる鄙歌を、聲高う節つくるまで心太くなりて候。さあれ降りつゞく五月雨の小簑の裏透しては、汗ばめる身のいよいよ物苦ほしう、流石京机に源氏物語興ずる樂しさも忍ばれつれど、楡の木蔭の下傳ひに、眞紅に熟せる苺を蕗の葉に包みて歸る面白さも忘れがたう候よ。爰に可愛らしきは辰ちやんにて、妾田面に出づる折はお留守居を肯ぜず、畦の櫟に搖籃吊らせて、紅葉の如き掌叩きては、獨笑壺に入りて騷ぎ居り候、さても銅に染みし頰の色も耻しうはあれど、夏の御歸省のそが折は例のごと可愛橋まで出迎はべれば、御見

違なう御聲がゝり給はりたく候、かしこ。

（評）所々に氣取りけあるを惜む。

○橋の上より　磐城　山川なみ子

御地は此頃暑さいと堪へがたきとやら、臥龍の夕涼、翠が瀧の朝もさることながら、こゝ河ぎり深き天狗橋の畔り、これやまことに自然が畫きし水彩畫とや申さなん今日此頃の眺め、げにや涼味掬すべく候。文に歌に倦みはてたる妾は、この繪の人とならむとてふとさまよひ出でゝ、そがおばしまに身をよせかけて、美はしき月の光りにゆら／＼金屑をまき散らしたらむが如き河の面の、金波銀波の輿に浴び居るにて候。かなた舟岡の森儼なる森の姿、悠々たる林のつゞき、幽麗の暮色に包まれて繪筆もてぼかしたらむがごとく、まして夕靄うすき街道のあなたより、家路に歸る里の子が聲清らかな唄も聞えて興味いと深まり行くからに、河の面を渡り來る夕嵐、ゆるくわが袖をかすめて行くなど、そゞろ此世の風とは思ほえで、詩人ならねわれなれど思はず妙趣の兩袂に溢るゝを覺え候、あはれ御身とともならばお嗜みの十三絃の調べに妾がはづかしき歌あはさなむにと、いよゝ慕はしさの嵩まり申し候。

（評）一讀酔飛ばむとす。

○故郷の弟に送る　尾張　近藤玉子

先日母樣より御手紙にて承れば此頃は、學校ことの外御勉强にて、此の度の試驗には、優等生とまでなられ候由、就いては、母樣より御褒賞として御許が好みの物を、參らせんとの事にて候ひしが、最早頂戴成されしや品は何ならん當てゝ見候はんか、繪葉書か水彩畫具か、學帽か、袴か、つね／＼欲しがり玉ひし手風琴などにや。姉も羨ましくなり申候、姉が奉公せる商店には、小間物類、數限り無之候も、御許が好みの物は何ならんか、姉も此度は褒美を遣はさんと、色々考へ候も、別にこれぞと思ふ物無之、何時ぞや望ませ玉へる、銀笛と相定め申候、精々御氣に入る樣にと存づれど、如何ある可きか、御許が勉勵の祝として喇叭は又の弟に、友仙の被布は妹に、小包郵便にて參らせ候間御許より御披露の程、賴み入り申候、姉も近きうちに、四五日の暇を貰ひ必ず／＼歸り候はんに父上母上へも宜しう申傳へ玉ひてよ、かしこ。

（評）情十分にあらはる。

○故郷の友へ　高知　樋口春子

やさしくもまた御なさけ籠れる君が御玉章、今朝、宿の小庭の小松の下にて、幾度となく繰りかへし候。

君よ、故郷の空をしのべとや、君よ、妾が君が御言の葉もまたなくに、朝な夕なに、たゞ聞くものは、浪の音、ちよろ／＼と流るゝ小川のさゝやき、濱の小松の不斷のしらべ、さては幻と見る白帆の影や、青葉滴たる鎭守の森蔭、かくて見るもの、聞くもの、一つとして故郷の事ならざるはこれなく候ふよ。

わきて戀しき今日此頃、あはれ鎭守の森蔭に、君が涼を納れさせ給へるあてすがた、幻の如く見え申し候君よ、君が奏で給へるバイオリンの音、さては、之を囃すなる蟬の聲、ちさと隔てし妾が耳にも聞え申し候ふ、君よ、妾は、其音其聲聞くにつけて、心すが／＼しうも氣勇みたち、塵深き都の空も忘れ申し候ふ。かくて羨しき數々は、あれよりこれへと、申さば戀しき故郷の、鎭守の森の木の葉の數や、さては、濱の眞砂のそれのごと、あゝ君よ、羨しき故郷の君、妾も君の如く、暖き光を迎ふる未來のこれ有り候か。君よ、名殘は未だ盡きざれど、こたびはこゝにて筆とめ申し候、かしこ。

（評）鄕を出づれば誰れもこの思あり。

○湖邊より　靜岡　若菜子

ふりしきる雨を衝いて愈湖岸の庵にうつり申候、途上湖を廻りつゝ遠く眺めやるに、われを待つ低き茅葺の屋根、折からしろがねの林と煙る夕立のすそに淡く影繪かとばかり水草のうれに浮きたる儚は又なく床しうてまづ氣に入り申候、汗ばみたる衣をのり強き浴衣に着更へて四疊半の丸窓に凭りし頃は、雨やう／＼細りて對岸の山を淡りとあらはし、靄の中を漕ぎくる一艘の小舟をも見出申候、やがて乳母が家より青藻被せて贈りくれし鯉を味ひつゝ、少止みたる西の空ながめ候に、夕陽ばつと燃えて見るがうちに、ちきれ／＼の雨雲を、とき色、猩々緋、金樺色といろどりし鮮かさ、曇りし鏡を拭ひたる如き湖の面にも、精巧おさ／＼劣らぬ五彩の波わきて、こゝにしも夕姬の舞ひますかとばかり、うつとり見惚れ申候。今雨はまたくはれて、巧に湖面を縮緬と織りて吹きくる風、音もなく竹椽を上りてわがよむ卷をおどろかし、遙か向ふより、甘菜の花をふみつゝ小旅手に、市より歸りくるはした女の衣を、笑止なる程ふき煽り申候、境靜かに氣淸く、鯉またたぐいなく美に候へば、かの一管をふところに、近く訪はせ玉へや。かしこ

（評）快適想ふべし。

○病床より　陸奥　しらゆき

光いと弱きが洋燈ともおぼえず蒼白う、藥の香にみちし室の中をてらし居り候。みとりする白衣の人も今は

安き夢路を辿るにや、小さきいびきかすかにひゞきて寂しさいとゞ身に迫り候。かゝる宵を病の床に泣くは、あゝ吾のみにて候はんか、……ともすれば、かくはかなき想ひにのみ沈みはてぬるおろかさよと、吾とわが心を叱しつゝ筆とり申候。あゝ思ひ出悲しき彼の日より早くも二十日はすぎ候ひぬ。窓越しに仰ぐ綠のかげの日に濃くなりゆくにつけ、彼の花盛りならんとクローバーの上懷しく候。御晝休みの一時間には、かしこにて例の如く物語りし給ふらんと、羨しく候。忽ち聞ゆるピアノの音にしばし恍惚として、ラケット握りしまゝほゝゑみて相對せし事もありしかのテニスコートよ、夜毎の夢はたゞそれにて候。あゝ彼の時は吾もいと健やかにてぞ候ひし。かくなりては今更に、悔ゆるとも甲斐なくは候へどまこと、病の床はかりそめにも親しむまじきものに候、ましてや君が御身は今こそ大切の時におはし候を、少しの日課に例の夜更しなどなされては必ずこの通り、御承知の筈かも候はねど、念の爲め申上候。玆まで漸やく認め來り候へど例の苦しき咳に母屋の方より誰か足音ひゞき候へば、をしきこととながら筆とめ申候。

（評）製りたる痕の見えぬやう注意ありたし。

○田園生活を都の友に　伊勢　伊藤織衣子

東海道五十三驛溫かき夢をのせて溫かき故山の田園趣味に浴して以來は

や三旬を過しました。

未明煎餅蒲團を刎ねておきますると、東天ほんのり紅に風はそよそよと、頰をなで曉天の心地えもいはれませぬ、近隣は皆早起しますけれ共喧しき聲一つだも聞えませぬ、東都の曉方とは丸で雲泥ですよ。妾が書齋は二階の一室です、藍の樣な藤原ヶ岳三國ヶ岳等を遠く望む事が出來、又近く町屋川をへだてゝ青々とした稻田を見る事が出來ます、涼風を迎へまして離れ小島ても歌ひますと、町屋川の淵を打つ浪と共に一種微妙の音樂を奏する樣自分乍ら思ひます。妾が家は南方に青簾をかけてあります、北は格子をへだてまして一面に籔です、都て風鈴がリンとも云はぬ時も玆にはそよ風が吹いて居ます、折々とんぼが南から北へ北から南へ通り抜けますよ。先日弟を連れ天神山に登りました、青松白砂の間に小波ゆらぎ、伊勢海には眞帆片帆など、云ふに云はれぬ景色でした。[illegible]も一日も早く歸つて遊びに來て下さい、どうか。

○苦學の弟に單衣を　茨城　石塚靜江

何時もながら御健かにて御勉學の由何より喜ばしう存じ候。分けて今日此頃の梅雨晴れに、氣も心もいと爽かに甦りたる心地致し候ひぬらん。此方にても私初めふみ子も勇も元氣よく、朝夕何くれとなくよく心附け手傳ひ致しくれ居り候へば、ゆめ心に懸け下さるまじく候。去る五月雨の頃はさぞかし御難澁の御事と察せられ候。朝ごとにチリン〳〵と鈴ならし、雨がつぱ一つにて雨の中を驅けゆく新聞屋を見ては、そゞろ御身の上思ひやられてほろりと相成り候ことも度々にて候。父上母上御存生の頃ならば、好きな〳〵學びの道、さる苦みかけずとも人並にはと返らぬ愚痴の胸に溢れ出て候ひぬ。とてもかくても命あつての物種、私もふみ子も勇も御身を力と賴み居ることに候へば、餘りに無理なことして御體を害れ給はぬやう、よく〳〵御注意なし下され度、神かけて念じ上候。

單衣一枚小包にて差送り申候間御受取り下され度候。今少し早くとは考

へ居りながら、盛ならぬ今の身の上とやかくと惑ひ居り候を、五月雨の夜語りのふとした事より、左のとほり。

金拾參錢五厘。茶摘み手間、（ふみ子）

金四錢七厘。害虫驅除賞與（勇）

ふみ子と勇とが助力を得て、やう／＼仕立て上げしもの、品は惡しきながら二人が御身を思ふ優しき心の程思ひやり下され度く候。かしこ。

○緑ちやんに答ふ（兄に代りて）

磐城　宮田時子

御手紙は只今見ました、緑ちやんが例の紛葉狩の無心だと思つたら、驚いた、將來小野家の家督相續者たる兄樣の判斷を願ふなんて、それては僕は局外中立の裁判官となつて公平な判決を下してやらうよ、泣いちやいけないよ、おこつちやいけないよ。

僕から見ると矢張お爺さんの說が一番良い、實際あんな松、農作物の邪をする許りて何にも役に立たないのだから其よりかお爺さんの言ふ通り、伐つてお金にして東京見物をしたり、大勅祭に參詣の費用にしたら好いてせう。お爺さんももうお先が短い人だし、其れに靖國神社には伯父さんの靈も祀られてある事だから、一日も早くお爺さんの御出になるのを待つて居るよ。それから緑ちやんは學校を卒業したら彼所に大庭園を造る積りて居るのてすか、馬鹿な事だ。緑ちやんはそして中々慾深だよ、嫁入の支度金に附加するなんて、支度金はもう隨分澤山だらう、それとも不足なら後て何程でも出來るよ。それよりかお爺さんの說が一番好い、僕はお爺さんの說に大贊成だ、僕が判決を下したからには一日も早く事を運んだら好いてせう。僕はお爺さんの杖を引いて、上野だの淺草だの、隅から隅まで御案内申すつもりてす。くれ／＼もおこつちいけないよ。

（本誌第九號の兄樣の御裁判を願ふを讀みて）



糸ひき（選外）　下總　藤崎笑奈子

○菖蒲に添へて

三重　帆山靜子

雨々とのみの日記かく手も、しめり勝なる昨日けふ、例の御丸窓より、雨にうなだるゝ庭の紫陽花に思ひをよせて、給絲とり給ふらん、美しの御姿も、まのあたり見るやうに存ぜられ候。

今朝しも、雨の晴間を、妹のそゝのかすまゝに、露ふみながら庭めぐりして、君が、水鏡しては興がり給ふ池の土橋のもとに、はからず見いてし此菖蒲。紫衣や白衣の天の子が、立まふらんごと、露にほゝゑむ其姿の、氣高さ、愛らしさ。此淸らなる花の心は、さぞや高き理想にみたさるゝならんと、そゞろ床しさに、切りとりて參らせ候。紫のことに多きは、妹の「靜子樣は紫が御好きだから」といふまゝに、切り添へたるにて候。願はくば、美しき御絲に、此花を給はがきにして給はり度、花も、我も、妹もの切なる願ひに御座候。序に御歌をも添へて給はらば、うれしさは一しほにて候。かしこ。

○僕嬉しいよ

廣島　ゆり子

姉ちやん僕嬉しいよ、信雄兄ちやんは大將に成れる學校へ行く樣になつたのよ、先刻兄ちやんと僕とてお池の金魚に餌をやつて居つたら僕の一ばん好きな役場の小使ひが一本の手紙を持つて來た、僕は早速母ちやん處へ其れを持つていつたら母ちやんは其を見て、信雄は合格したが若し父樣が生きて居られたら如何に悅ばれるであらうかと泣いちやつたのよ、僕は兄ちやん萬歲、僕も兄ちやんの樣に成つたらあの學校に行つて大將に成るのだよと云つたら母ちやんは僕の頭を撫てゝ坊はよい子だといつた、姉ちやん僕嬉しいよ、姉ちやんも嬉しいてせう。

○夫を失ひし友に

下關　梅田糸子

俊子樣、まあ、さぞ、お歎きてせう。

妾聞いて、びつくりしました。あの强壯て、每々藥の味は知らないなど、戯言云ひ給ひしものを、何たる鬼神の祟りてせうか。

女子の身は親なき後は、夫より外にたよる人ないものを、背の君におくれられた御身の歎、さぞ〳〵と、妾、もう涙で物が言へません。されど歎きのあまり、病の床につき給ふ樣なことがあつては、それこそ大事です、此上は、何卒忘片身の愛樣を、力草とおぼされて、立派に敎育なされ跡つがせらるゝが、何よりの追善です。决して若き身の短慮なき樣、すぐ發つて、涙の川を別らまた慰めもと思つても、遠く隔つる旅の空、翼なき身の悲しさに、其上病身な母をつれた妾ですもの、どうぞ許るして下さい。

別封は心計りの香奠です、どうかみ靈の前に。

○學びやの弟に

上毛　關根霞磨子

武さん、大層熱くなりましたね、熱くなると色々の惡い病など流行りますから、御體を御大切にね、それから母さんも妾も丈夫に暮してゐますから、御安心下さいな。

稲は青々として葉末に宿る露の玉は、水晶か眞珠か但しは白銀の玉かと疑はれ、金山の端に紫紺鮮かなる若葉を分けて、麗はしい朝日が現はれ、夜の間の露で生返つた樣に、生々した田の面を輝かすと、水晶はルビーと變り、眞珠は紅玉と變り、白銀の玉は黄金の玉と變り、五色に彩らる美しさ、實に武さんの所へ上げたい樣です、餘りの美しさに拙なき筆にのせました、せめてもの心やり、此の水彩畫でも御覽下さい、笑つてはいやですよ。此美しい田圃の細道を、妾は毎日學校に通ふのであります、いつも學校に着いて見ると袂がしつぼり濡れて居ります、是は露の爲めでせうか、妾は此麗はしい自然を友として、希望も捨てました理想も捨てました、御友達がいくら高い學びやに入らうと、妾は羨みません、妾はあきらめました、一生小學教師に甘んじて居ります、只武さんさへエラクなれば、妾の望は足りたのです、何うか妾の分迄も名を揚げて下さい、倒れた家を起すのは武さんの責任です、何うか勉強して下さい、武さんは父さんの今際の御言をよもや忘れはなさいますまい、何うか勉強して、エラクなつて下さい、そして又御體も御大切にして、病氣にならない樣にして下さい。

此單衣は、母さんが手づから織られたのを、妾が毎晩少しづゝの閑暇を盗んで、縫つたのですから、二人の心が籠つて居ります、二人の傍に居ると思つて着て下さい、もう夏の休暇が間も無く來るでせうから、其時これを着て歸省して下さい、後は歸省せられた後、御話します、尊々も勉強して又御體も御大切にして下さいさよなら。

○寫生畫を友に送る

大阪　根奈志草

見苦しとて、笑ひ給ふな、昨日鬱氣を、郊外に散ぜし余波にて候、姿形覺束なく、候へば是も覺束なき説明を、書き加へて、かくは、川の向ひは、野に候、紫に黄に、さては綠に赤に、各裝こらして、種々なる香もて、容姿の美なるを誇りつゝある草花の少し上なるは、天の秘密を花に、さゝやきつゝある、目白に御座候、向ふの家なる鷄は腹を充すに、餘念なき、處に御座候、此方なる川は、優しく、せゝらぎて、岩の陰にかくれ、と見れば、忽ち走りて、春風の輕くゆらぐ、菖蒲の根を洗ひ、あるは、緩く、芦の根に休み、あるは、腹立しげに、岩陰より、走り去る、川下に、小さき、物のあるは、春の景色に鰭を、とける、魚に御座候、おゝ、それよ、川辺に立ちて袴の裾の、漏るゝも、知らず、菖蒲に見惚れ給へるは、そも誰？、見苦しとて笑ひ給ふな。

○時計屋に

名古屋　小山かく子

七日で出來る約束が十一日目で出來あがつたので、充分直りましたかと云へば遲くなつたのは、丁寧に修繕したる爲めですから請合ですと申されたお言葉をまにうけて喜んで居ました。

すると其晩午前二時少しすぎの所で、止つてゐましたので、あゝこれは卷いてなかつた爲めだらうと思うて昨朝六時に、卷いて合せておきますと晩の七時迄に八分遲れました。緩急針を見ればエフの方へ行き過る程推付けてありますのに、まあ夫もいゝとして、今朝見れば又二時の所で止つてゐるではありませんか、之でも商賣人が十日以上もかゝつて修繕したのかと思へば腹が立つてたまりません。

只今小僧にもたせて差上ましたから、今一度十分注意して見て下さいませ。こんなやくざ時計でも私にはなければ毎日不自由なのですから、注意して一日も早く出かして戴きますよ。

私の方では、お店を信じておりましたのに、これは多分店員の横着でもありませうが、お店の御信用に關係しますから、序に憎まれ口をきいておきます。

新歌謠

編輯局選

天 一人娘を仕立て出せば五月野に咲く百合の花

近江國高島郡大溝町大字勝野　臼井よし子

地 田植濟んでも嫁くのはいやよわたしや自家よい叔母をする

伊勢國田丸町　守岡みどり子

人 絲の雨降る青葉の中に玉で連ねたハンモック

丹波福知山足立醫院内　松浦しづ子

秀逸

○ 名古屋　原田翠子

姉は十八まだうら若いそれにどうした面窶

○ 小石川　野菊

此方ふりむく御顔の前に蕾放して驚かす

○ 飛彈　萬ひふみ

三保の景色を浴衣に仕たい裾は千鳥に波模樣

○ 上總　小川國子

丸くまとまる蠶でさえも苦勞四眠を越てから

○ 横濱　あほば

日光華嚴の岩邊に立ちて瀧の女神と話したい

○ 若狹　楯星蘋子

明日は降るなよ可愛い孫がお宮まゐりよ初衣着て

○ 秋田　大越みさを子

月の團扇で私しや踊りませう嬉しい今年の盆じやもの

○ 山陰　しのぶ女史

人の嫌がる梅雨じやとても稻が喜ぶばつかりに

○ 石見　千代延俊子

さつと凉風灯火きえて池のはちすに月が出た

○ 京橋　孝子

雪をあざむくあの姫百合を一寸手折てかざしにしたい

○ 磐城　鈴木紫子

勝つて歸つた身躰で植ゑた稻は八束の垂穗する

○ 芝　みづほ子

わしが心は日まわり草よ主が笑へばわしやうたふ

○ 金澤　大塊波子

妹やさしや秋のなかに螢かくしてしらぬ顔

○眞菰刈る朝舞りの爺が折つてくれたよ花うばら　麴町　淺井千鳥子

○吹けや夏風我が文窓よりも母が草取る田のくろに　神田　大澤さゆり子

○深山そだちの娘じやけれど色も香もある百合の花　美濃　内藤みち子

○チン〳〵と電車が走る走る電車を客が待つ　京橋　磯千鳥

○池のみぎはの花かきつばた見ます姬君花のよう　飛彈　武滿柳枝

○田舍訪ふなら六月來やれ田面〳〵に花が咲く　南多摩　二三子

○阿波に立つ虹鳴門へかけて渦の中へと消えてゆく　横濱　吉川霞峯子

あやめ子

○髮にかざした眞白き薔薇の香り慕ふて蝶が舞ふ　安房　安西てい子

○赤きりぼんに海老茶のはかま本を片手にひさしがみ　乃信子

○元祿模樣の花嫁御寮人が顏見りや下を向く　上毛　紅ばら

○赤ひ襷に姉樣冠り唄もすゞしや田植歌　茨木　紅茨子

○嫁の主を給簾ごしにのぞくおぼろの夏の月　福岡　濱中たか子

○月と明星の妹脊の仲に生れ落ちたか露の玉　因幡　中村みのる子

○私しがやかたを訪ふ人はないがそつと覗いてゆくつばめ　靜岡　高木德子

○草刈る乙女がかざしたゆりを名殘おしげに去たふ蝶　野の女

○蝶の舞手に雲雀の囃中に畑うつ君とわれ　伊豫　井出やはる子

○好かぬからして辭退をするに無理に進める親心　磐城　原田清子

○踏むも惜しそな朝露こぼす小野の篠原罪な風　上野　佐藤露子

○古い褞袍を單衣になほし心かる〳〵衣更　磐城　大平滾子

○小雨ふる夜は蛙てさいも職になくのかいぢらしさ　德島　小川なみ子

○業に見へても白帆の主は沖て言はれぬ苦勞する　播磨　植木初江

○わしが住居は明石の浦よ通ふ白帆を見て暮らす　常陸　關町くに子

○蝶々憐れやあはれや蝶々枯れた桔梗のしたに死ぬ

昔の俗謠

木曾のナア、木曾のお山はお月を抱きやる私も抱きたやお十七を

合歡の木、合歡の木、寢やしやんせ、お鐘が鳴つたら起きやんせ

小諸出て見よ淺間の山に今朝も烟が三筋立つ

雨の降り出に名が立ちそめて雨はやめども名はやまぬ

山を通れば茨がとめる茨はなしやれ日が暮れる

今度ござらば持て來てたもれ伊豆のお山のなぎの葉を

坂は照る〳〵鈴鹿は曇るあひの土山雨が降る

短篇小說

[illegible]別第二賞

○離愁

下谷上根岸　太田　あきつ子

「だつて靜、妾靜がお供しなきや厭よ」「もう姫樣其樣な事仰有つて下さいますな、靜はお供致し度御座いますけれどね、今日は御用が御座いますから……高が御供致升から宜敷御座いませう。ね、御機嫌好く遊ばせよ」「高なんか厭よ、靜お供おしよ、ね、靜」。可愛い下豊頬の横顔を見せて帶を結んで居る靜を振返る。「い丶え靜は今日は御供が出來ませぬ……又此次御供致しませう、ね、御機嫌ようお出まし遊ばせ。皆樣が嘸御待兼て面白いお遊びが御座いませう。お宜しうございます事ね」。又此次お供致しませうとは云へ、今日お出ましの跡て密と退る身を、何にも御存じないのが眞にお可憐らしい。お歸りに成つてから靜は〳〵とお尋ね遊ばすが、あ丶目に見える樣なと情無い感想が胸一杯。

「さあお仕度が出來ました」と立矢に結んだ手を離すと、緋純子の帶の色華やかに目を射て、白地に蔭を薄墨て出した墨繪の竹の思切つた柄、其絹縮の單衣に映りの好う。「ほんとにお綺麗にお成り遊ばして……」。云ふ時葭簀の蔭に人影して「お靜さん、お仕度は出來ましてすか？」「はあもうお宜しう御座います、何卒お上へお連れ申上げて！」

父、母の許へ挨拶に行く姫の後姿を見送つて、はあと不思溜息、脫捨の召物も之が疊納かと思へば疊む手先も力が無い。未九時前の日光は弱いが、お庭の若葉の茂みに、もう蟬の聲が聞初めた。靜は頹然失神した樣、片手を疊に支いて沈と考込んで了ふ。十五の暮から上つて十八の去年御鑑定で成つた姫樣のお傅。姫樣大事と油斷なく侍けば、姫樣も靜々と何ても靜で無くては成らぬ樣にお慕ひ遊ばす有難さ。そんな仲好の姫樣に、彼可愛い姫樣に急にお別れせねば成らぬ譯は、あ丶其譯は……あの優しい季麿樣が……季麿樣が――つい先夜も下さつたお文、夫れは直燒いても了つたが、何の妾風情に……妾故に御身の箔をお落させ申しては……又妾迚懐愛しい進樣、其定まつた夫の有る身、どうし

てそんな……若しも有らぬ名を立てられた時はと身を安くする爲願つた此度のお暇。けれども姫様にお別れか——あんな罪の無い清い方を御欺し申て、何も御存じないからお別れは容易い物の……あゝ様進の來年卒業迄は御勤め申す積だつたけれど……

悲しい感想に茫然と成つた時高の聲で「お靜さん、お出ましに成りますよ」。倏とすると直立つて廊下を拔けて玄關へ。小間使や婢女や皆もう並んで居た。高は自分はお勝手口から出るので御連れ申て來ると姫樣は靜の手へ。「ねえ靜、どうしてもお供出來ないの」。姫は垂髮の小さな頭を曲げて甘へるやう。人形其儘の美しさを無量の想に打守る靜の目には、いつしか涙が浮ぶ。「姫様」「あい」「あのう——靜はね」「あゝ」「靜はお供が出來ませんけれどね、姫様は柔順に遊ばすんですよ。ね、宜しう御座いますか姫様」「あゝ」「ではお出まし遊ばせさ、姫様」。密と涙を拭いて姫様を抱いたなり玄關を下りる。花崗石を敷詰めた玄關前には一頭立の馬車が待つて居る。廻つて來た高が先乘ると、靜は姫様をお乘せ申て、



「ではお高さん、お氣を附申て……姫様御機嫌好う」。何卒御壯健で御成長遊ばしませ、靜は之でお別れ申上ますと心の中で云つて、頭を下げるとはら〳〵と涙を落した。居並んだ皆も御機嫌好うと一樣に頭を下る。馬丁は手綱を手にした。姫樣と高を乘せた馬車は石の上を音高く走出す。之でお別れかと靜は潤む目に馬車の影を見送つて、前へ一歩不思よろ〳〵とした。馬車の影は見へず成つて音のみ次第に遠ざかり行く。

「離愁」一篇、戀の別れでもなければ、親子の別れでもない、姫樣と侍女とが、思ひも寄らぬ動機の爲に別れる迄で表面には深い悲愁も刻まれてないやうであるが、實は之れ運命の別れ道、姫樣の無邪氣に對しては靜が誠實もうつり映えして、貴族社會にも人情の波瀾ある事を能く示して居る、文章は優に一家を成し、疑ふ迄もなく本誌諸孃中ての秀才（選者評）

天

○廻氣

静岡縣藤枝町　紅薔薇

上

夏期試驗が終了て、昨日寄宿舍から歸宅た高野崎子は脂粉氣のない束髮に、地味なお召の單衣、嫌味のない服裝で、叔母の淺井亮子方を訪づれた。

亮子の末の娘夏野と云ふのは、崎子より二つ年下、同じ女學校に通學て居たのだが、重篤い肋膜炎を病つてから廢學て、今は心靜かに自宅で琴や茶の湯を習得て居る。

崎子の今日の訪問は無論妹に等しい夏野を見舞ふ爲であるが、又一つ重要な源因がある、夫は崎子の義兄實は許嫁である高野良哉が、通學の便宜上此淺井家に止宿して居るので、例年ならばもう疾に休暇で歸宅るのだが今夏は論文の起草に忙しくて、當分歸邸れぬと云ふので、崎子の母は崎子に勸めて、今日訪はせたのである。

「まあ眞に崎子さんはお立派に成育ね――」。

凉しい風の這入る座敷に崎子を通して、挨拶も濟み、座蒲團茶も法の如く進めた處で、叔母は滿足らしい眼を揚げて、何所となく學業と共に備はる品格、少し額は廣いが、口許の黒子が際立て目につく程色の白い、崎子の高尚な顏を視戌つた。

「其樣な事はないわ、夏野さんこそ乾度‥‥。此頃は御機嫌宜くつて？」。

「有難う、病氣の方は全快でね、此二三日虫齒で痛められたがもう快いの、あ、良哉樣もお變りなくてね、今朝も朝飯が濟むと繪の道具を擔ひで、裏の方へ出ましたが、お晝飯には必定御歸りでしよう、誠に淡白した好い方ね――」。

良哉と言はれて崎子は眞紅になつた。

「夏野や夏野、崎子さんが被入たよ」。

納戸の方を向ひて亮子が呼ぶと。

「お孃樣は唯今お髮結で居らつしやいます」

下婢の黑い顏が襖戸の陰から出て、恭しく崎子に一禮

した。

「あ、私往ませうよ叔母樣、何所、お居間…？」。

勝手知たれば遠慮もなく、廊下傳ひにゆく二間目は四疊半の良哉の書齋、崎子は鳥渡足を止めた。

卓も椅子も整然として塵一つ留めず、積み重ねた書籍の側に、精好な縮緬の肱突が置かれて、床の間には薄端に梔子があつさりと活けてある。

「まあちやんとして在るわね——」崎子は片頰に笑みながら折れる廻椽、庭を距てた突當りの居間に、夏野は今髮を結ひ終てお化粧するらしく、桃色の扱帶した淺黃染の裕衣の襟も少し寛げて、濡手拭で顏を押へて居る、「まあ」と呼びかけようとして、不圖右手の植込の中に白い物の閃つくを何心なく回顧ると、今頃は近郊の畦道に三脚臺を据ゑて、寫生に餘念なかるべき良哉が、何時戾つたか、つい目前の青葉の繁みに眞寫器を構へて、自分の來たのも知らず一心に、夏野の化粧姿を鏡玉に入れようと苦心して居るのであつた。

崎子は頓に胸先を縛らるゝやうな感がして立竦んだ。

下

「義姉樣は眞正に如何かして居被るよ、だつて今日は何だか變だもの」。

ローズの香り溢るゝ白牡丹の葩のやうな左頰がむつちり脹れ上つて、紅の濃い唇が少し片寄た夏野は、美くしい眉を顰めて、崎子を見上るのであつた。

口數少なく前栽の同所のみ見詰て居た崎子は。

「イーエそんな事ないわ、夏野さんの氣の故よ」

強ひて口許に笑を浮べて、夏野を回顧たが、その麗しく化粧した顏を視ると、むら／＼と不快の感が湧いてついと眼を外らして了つた。

良哉が夏野を撮影たのは、あの化粧姿が好かつたのであるか、夫とも人知れず愛情を注いで居て彼樣な所爲を爲たのであるが、……何うも了解らぬ……。全體論文だつて自宅で書いても宜さそうな物だのに……、また良哉が婦人の化粧を歡ぶならば、自分は好まねどんなにも化粧て嗜好には脊くまいものを。

思へば先刻對面た時の應接の冷淡さ、あれが未來の妻に對する擧動であらうか、氣がつかなかつたが机上の肱突、床の間の活花、あれが良哉の愛を奪ふ夏野の仕向ではあるまいか。

「義姉樣、私一寸失禮して着換しますよ」

淸しい聲に我に返つて振むくと、夏野は楚々と鏡臺の前に立た、嚴格な青年の心を亂す嬋妍な服裝は、と、注

意深く視戍ると、母親の好が一體に派手つくり、袖の長い中形に、緋に牡丹花を白拔きにした晝夜帶、ゆるく結んだ腰の鬱金縮緬も、肌繻絆の薄紅色も憎い程配合が宜い、あー此樣のが良哉は好かしら、私も二つ若かつたらと崎子は年上を恨んで俯向た。

「さあ御馳走が出來ましたよ崎子さん、是でも貴女が入らしつたから夏野が何でもつて尋ねさせてね、ホヽホヽヽ、さ召上つて頂戴、良哉樣もいらつしやい、貴下も御好物な鯉よ」

良哉と叔母、崎子と夏野と並んで箸を把たが、曇の懸つた崎子の胸には是も半は良哉への夏野が欵待と思はれて、いと〻嫉く、血氣盛な良哉が額に玉の汗を浮べて幾碗を換るのを、冷然に竊見ながら、蠟を嚙む如な晝餐を終つたのである。

切めて一夜泊つてと母娘が心からの勸めを振拔つて、崎子は俥を自宅へ急がせたが、部屋へ這入ると、ぐつたり考へ込んで了つた。

翌朝早くから崎子は鏡の前に座り込んで、お化粧に餘念ない、晩とても其通り、朝夕念入の磨きたてに一入容色を揚げて、着物もめつきり派手好に成つた。

月半ば、崎子は盛裝して淺井家を訪づれたが、相變らず良哉は冷然としたものであつた、夏野は頃の暑氣にがつかり弱つて勢なく、廣い帶は締めて、油氣のない髮の毛が細い頸にばら〱亂れて、顏にも襟にも白粉氣は更に無かつた。

崎子の化粧は日增に濃くなつたが、月が更つても良哉は歸邸しなかつた。



さみだれ(選外)　尾張　紫月女史

初めは平凡のやうてあるが、段々讀んで行く中に非凡の手腕ある事が認められる、良哉が夏野の寫眞を撮らうとして居るのを見て崎子が廻り氣を起すのも自然であり、崎子は自ら夏野より年上なるが故に、心にもない派手づくりをして一意良哉に盡くさうとする心根のあはれさ、ふびんさ、是にこそ底から湧く人世の涙が籠つてゐるてせう(選者評)

地

○花子の家

鹿兒島市下結尾町四十三　遠山柳子

今丁度夫人と對座で夕げをすませた主人は、ようじを使ひながら、椽がはにでた。木々の綠はしたゝる樣、雪をあざむくむくなしの鮮に庭潦に寫つてゐる雨後の庭を、ながめてゐる。座敷の方をふりかへつて時計を見、前にゐる夫人に、「もう時間になつたから衣服を出せ」、「はい」と、次の間に行きがた／＼とたんすをあけながら「あら足袋がないわ、お三一寸かつてきて、花さん兄さんの羽織紐をさがして下さい」、「姉さんどこに有のてす」、「わからないからさがして下さいと云ふんですよ、お三旦那樣の下駄をだしておいて」、「奧樣どちらて御座います」、「雨がふつてゐるからあしだてすよ」、「奧樣緒がきれて居りますが」、「あらさう、それでは一寸すげて」「奧樣痲をどうか」、「花さん一寸痲を出して下さい」、「姉さんもう痲はないんですよ」、「さう、それては何か下駄の緒をすげるきれを下さい」主人は玄關に出て、「おいまだか」「はい只今、あらあなたこうもりてすか雨傘てすかね」、「……」「はやくおつしやらないとおそくなりますは」、主人すこしむつとして、「どちらがおそくするのかしれん、それて御飯前からよく言つておいたてはないか、何の用意をしておいたんだ」、奧樣少し赤くなり、「あらそんなにおつしやつたつて」、「あなた提灯がいりませんか」、「よかろ」、「あらくらいてすよ持つていつて下さい」、「花さん提灯を」、「はい」と花子はすぐ立つて、がた／＼とひきだしをさがしてゐる、「花さんろうそくはないの」「一寸ばかりのしかありませんよ」、「お三それてはかつてきて」、「もういゝ」と主人は下駄をはいておりた、「いつてゐらつしやいまし」といふ聲、主人は無言のまゝ出ていつた。奧樣はしばらく後をみまもつておつたが花子を橫目でみて座敷にはいつた。御膳はまだそのまんまてある。夫人は主人のふだん着をしまをうともしない。雲の行く空や玉水のおつる庭をながめて居るが歌を思ふてゐるのてあらうか。「花さん先きの小說はどこに」、――花子は兄のいつた後をまだみ送つてゐる、今の姉の聲でやうやう我にかへつた。夫人は足をのばし、ながくなつて一心になにかよんてゐる、大方小說てあらふ。その後にたつてゐる花子はなにかかんがへてゐるらしい、それは大方「花子さんは御兩親がいらつしやらなくともえらい兄樣や、敎育をうけなすつた嫁樣に敎育されなさるのだもの、幸福てすは」と、いつても學校てお

友達にいはれる言葉の、今はすつかりあべこべになつたものだとそれをおもつて、ゐるのであらう。彼の顔は淋しくなるばかりである。

人　是は全く近頃面白く拜見した、奥樣の心がけの足りない家庭は此通りであらう、能く穿つてある、主人の無頓着、奥樣の不心得、妹の思はくなど、そこいらにいくらもある新家庭の實際生活、裏から見ればそんなのが多い（選者評）

○消え行く星

盛岡　白百合女史

「まあ元雄さん……御病氣の事はネ、きいて居たんですけれど、あんまり御申譯がなくつてつひ今まで」。やつれはてた、病床の今田元雄、とし子の手をしかとにぎり、苦しさうな息突いて見守り。

「とし子さん……よう訪て……くれたネ……僕もぜひ……とし子さんに……會はない中は……死にたく……なかつた……」涙にくれて居たとし子は、やう／＼顔をあげ。

「もしやあなた私の手紙を御氣にかけたのじやないの、私ネあの時御友達からいやな事をいはれてネ、私、胸がさける樣でしたの、私も學生だし許婚君も學生御たがひのためにならない事よ。今は何もいひますがネ、あの本岡町の平山照代さん御存じでせう、あの方ネ、先頃學校で級の人たちがたくさん居る時に「法科大學の今田元雄といふ學生は春村とし子さんの戀の夫ですつて、とし子さんも美人だからいゝネー、先頃の夜も二人月見に行つたですつて」なんてネ、私あんまりくやしかつたからネ「平山さんひどいワ戀の夫だなんて、そんな知らない事いふもんじやないのよ、もしや先生にきこえたならばどーするの」と云つたらネ「あらそんなに知らんふりして、そんならもしあなたと、今田さんとが結婚したなら私そう思ふワ、ネー皆さん」なんていふからくやしくつて……。いつも陰氣で沈んでいらつしやる許婚君に申あげては……と思ひましたけどネ、あんまりくやしかつたからネ、しらず／＼書いたの「どーぞ今までの約束は止して頂戴なんて書いたんだもの、私惡るかつたワ、許して頂戴よネ、どーぞ許して下さい

參秋（選外）　陸中　阿部富子



な、何も許婚君をいやに、思たんじやないのよネ、戀だなんていはれて、今から社會に信用を得なくてならない、御互の身の上を、信用を失なつてはこまると思つたの、私どーしよう……」

となき入るのである。

「とし子さん……」と、かすかによぶ聲。

「あの平山ネ……僕に數回手紙……よこしたの……しかし僕にはとし子さんといふ許婚があるんだもの……僕ネ……返信しないから……そうなんだネ……」

苦しそうにいひ終つた。とし子はさつと赤めた面におどろきのいろにて、

「まあ、いやな方ネ、貴君は私他人と思はないから早くよくなつて又合奏しませう」

圓まどから見える田のほとりの一本松に夕の星一つ光りをはなつて居るが何だかどんよりと薄墨の中に…。

「とし子さん僕安心したよ……大安心したよ……どーか僕の死んだ後て花をば……毎日たむけて下さいよ……」。にぎりし手のゆるむと同時ににつこり笑ふてすやすやと、星の光全く消て秋雨さへふり出した。

「元雄さん……これ……元雄さん……元雄さん……」

と、よべどさけべど其のかひもなく、あはれや、十八歳なる可愛のとし子をあとにのこし、二十一歳を、この世のかぎり……。

無邪氣な戀物語、殊に學生式の思想を代表して、最も終に元雄を死なしめたのは罪が深いけれど、とし子の正直て、かあいらしげな處は最も活躍してゐる（選者評）

秀逸

○母の心

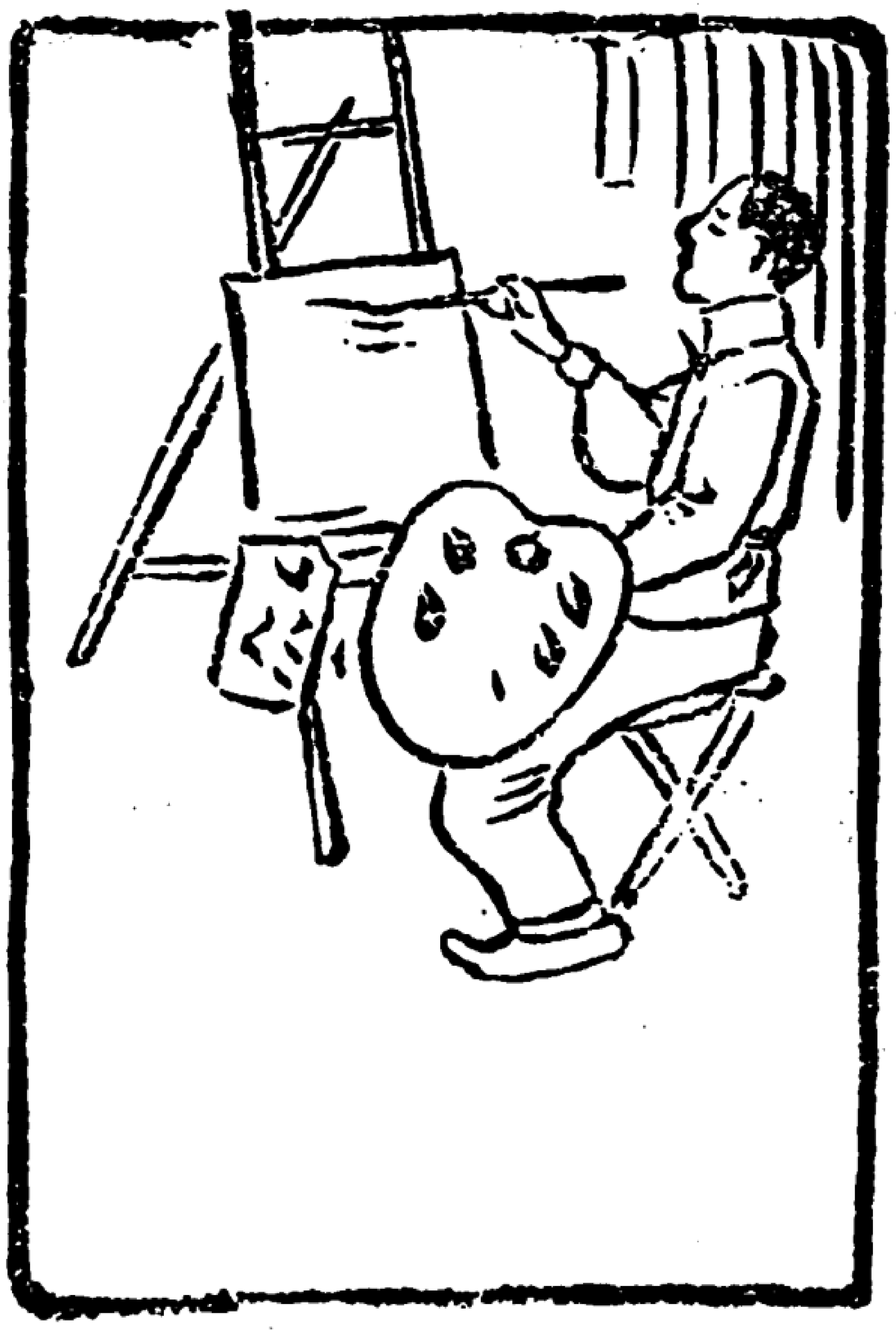
名古屋　さとし女史

時計は一時をつげたが、使は今に歸らぬ、病人は、相も變らぬ樣だ、室内は寂として、聲もない、庭の隅て杉の葉が風にゆられてバサ／＼と音を立てゝをる。

「おゝ清子ちやんや、大變成長してね」又病人はうは言を云ひ出したので、兄の十郎は心配さうに「千代子どうした苦しいか」千代子は寢てをるのか、答もせぬので、脊をさすつて居た母は、可愛想に清子に會つてる積りと見へる、讓樣も罪な人だ、こんなに慕つてる間を無理に分けるなんて、こんな事にてもなると惡いて、清子は此方へ引き取ろうと云つたのに、あんな人故今夜も清子をかすかどうだか、清も生みの母にも碌々會へず成りはしまいか、千代も一目會つてから死にたいと云うてをるし、何卒今夜早く來てくれゝばいゝ

が、母は色々氣をもむ計りて有たが遂にたへ兼ねてか、十郎に萬事頼んで自身は清子を迎ふべく使を追つて出ていつた、病人は少し安らいだ樣だつたが、暫くしてかすかに目を開いて苦し氣に「兄樣清子はまだ參りませんか」と、尋ねた、「お丶氣がついたか、まだ來ない今母樣が迎に行かれた、少しまつて居なさい直に來るよ」と十郎は答へた、千代子は又も「兄樣清子のくるまでに死には致しますまいか」「馬鹿云ふなそんな事有るもんか」と叱る樣云ふた物の、流石たへ難いのか、そと後むいて袖で目の邊りをふいた、千代子は靜に目をとぢたが、折り折り冷たい紫色の口よりは清子清子と呼ぶ聲が、かすかに、洩れた、其度兄は眉をひそめた、外面は靜かに折り〱風の戸を訪れる音が淋し氣にするばかり、母も使も歸つてこぬ、遠くに車の音がする度に、耳を片むけたが、それもやがて、側へそれて、遠く、へだ丶つた。

淋しい、悲しい引き入れられるやうな作、「兄樣、清子の來る迄に死には致しますまいか」一語斷腸、短いが今回の應募中、確かに傑出せる一篇(選者評)



スケッチ（選外）　高松　江川しすい

○初蟬

濱町　小林櫻花

(上)

待ちに待つた暑中休暇となつた「お兄樣もう御用意なさるのお早い事ね、明日別莊へお越しになるのでせう」「絹ちやん僕ア今日の午后四時に新橋を出發するんだ……友人がね先き行つたからね」絹子と兄の義雄の問答である「お兄樣、ですけれども妾は梅と明日出發するのよ、お兄樣も一緒に行けば宜いんだに」

(中)

「お孃樣さあ梅が御案内いたしませう」と別莊の門を入つた波は錦を織るが樣に富士の倒影はほんのりと芦湖に寫つてゐる「お孃樣よく御出遊ばしやつた婆ャが大層お待ち申して居りましたハイ〱お兄樣も昨日御出なされて今朝早くよりボットとかボートとかにて芦の湖巡りだと大勇氣で御出まししやしやつたんで…………別莊守の婆が嬉しさうに語る「婆や東京からお土産が……おや……あゝ梅やその風呂敷包を婆ャにあげ

てくださいな」

（下）

日聽て西山に舂きて暮色蒼然、湖面を包む頃別莊の欄干によりて語る二人の愛らしき影は義雄と絹子である

「お兄樣今日は朝からの湖巡りさぞ御勞れでせう」

「絹ちやんそうでもないさ、僕等ア大好物だからさいや何一日ヲールを手にしたつて勞れる樣な僕では：」

「オホヽヽお兄樣の御自慢毎度有難うもう澤山よ」「絹ちやん、僕アね友人を後に置いて先に歸つて來たのよ絹ちやんが待つてるだらうと思つて：：うまく云つて：：馬鹿な、本當だよ、併し林君の一行は未だ歸らないが、何しているのだらうとさつきから此所で見てるのよ」林君の一語絹子の顏に紅を刷した「お兄樣あのボートは林さんがたてなくづて」湖面を指す時リングは輝いた「あゝそうだ、林君に違ひない隨分心配を掛さす奴等だな：：林君：：林君聞えないな、よし」、指を口にあて、ピピ〳〵――「ヲーイ」船中かすかに答ふる聲、遂に此日は暮れた。

何事もなく平穩無事な避暑の一日、夏向の小說とも云ふのであらう、さら〳〵としていやみがない（選者評）

○理想之光

名古屋　美さを子

今まで眠つてゐた草木は春の女神の使命に皆眼をさまし庭は花の世界である。

鳥は淸らかな美聲を發し、蝶はひら〳〵と嬉しげに舞ひくるふ、老も若きも野に山に醉ふ四月の中旬、今椅子によりたる若紳士は、未だ去年四月米國より歸り來れる櫻井貿易商會長秀雄と云ひ年若けれど商業に熱心なる故某商業學校卒業後五ヶ年間渡米し世人に尊敬せられつゝある。

貿易商なれば輸入部輸出部に別れ日々繁忙を極め寸暇もなく數拾人を使役して每朝八時より午後五時までを營業時間と取きめられてある、日曜には主人初め店員一同休暇す。

主人は每朝五時にベットをはなれ七時には店部に出張するのである、寸暇を惜む商業王なれば日曜なりとて外遊せぬ。

今しも我書齋に入り、椅子によりつゝ身には薄色上衣を着し雪の如き高きカラー、何處ともなく米國かへりの風勢を去りやらず、髮は色てく顏色も黑けれど眼には優しい情が滿ちて居る。

七寶の花瓶には紅白薔薇の薰ゆかしく書物を眺めつゝある處へドア開き入り來れるは夫人光子、中肉中背色

白う黒髪つやつやと水色リボンにバイオレツトの花たば花月まきにさしあり、身には小豆色の御召に薄紫の帯品よくむすび手にはルビー入りの細巻二個はめつ、雪のやうなる絹ハンケチ手にして恭しく一禮しぬ。

秀雄は手にせる書をおしやりて「光ちやんかけなさい」

「ハイ」と椅子によるカアテンを引しぼると庭には米國土産の珍花幾種となく色どられつ光子は兩手をひざにおく。「光ちやん此ロースの薫は一種特別である、丁度光ちやんもこんなになつたね」

「オホヽヽヽ」とうつむいて笑顔。

「僕が渡米する前は弱々しく風前の燈火のやうであつたが、此頃の元氣はうつてかわつたね」

「ハイ全くです御出立遊ばす前は半病身でしたが御かへりの後は藥の味一つも存じません、日頃御仰の健全の神の御手に抱かれたのですわ」

「昨日父上からの書信に繁榮健全を祝すとあつた」

「此頃おこしの折も養生を第一運動をはげみて、玉の如き健兒をつくつてくれとオホヽヽヽ」

色白き頬薄あからめつ。

「僕も理想の光が輝いて愉快である」

「御苦心の結果目今にては御希望通りの光明が照りかがやきていますね」とハンカチひねりつ。

秀雄はいつしか庭より春風につれチエリーのゆかしいかをりに椅子をはなれて窓にすゝむ光子もあとより

「僕愈々出發せんとする前に櫻の木蔭で理想を語つた折、光ちやんの青白い顏かへるまで覺束ないと思ふたが丸きり夢のやうである」

「私あの折は悲くつて唯涙より外なく御別してから朝夕神に祈禱を捧げて早くおかへり遊ばすやう願ましたが神がおきゝなすつたのですね」

二人はさも嬉しげに又たへられぬ情にいつしか光子の眼には愛の露が宿れり。

* * * * *

あくる年には玉の如き男兒は生れぬ二人のよろこびいかばかりなりけん。

所謂毛色の變つた小說で、理想の光明、滿足、圓滿を描いて、ハイカラ、實業家、アメリカ歸り、新夫人の實際を寫さうとしたのは、甚だよろしい、事柄が詩的でなくとも之れ人生の一面であるから、小說の材としてはゞかる處はない。別の事であるが、此次からは今少し原稿をきれいに書いて下さい、讀むのにも骨が折れる(選者評)

○外國稼

神戸　德永みね子

「行かれたですかな」、「ハイ丁度三時廿分の小蒸汽船で」、「さうですか、何うでした其塲狀況は聞くに堪へ

んてせうな」、「仰せの通りてす、語も涙、實に一場の悲劇てした」と今も其塲の狀況が朧に見ゆる樣眼に一ぱいの涙を宿して、「出帆前の笛が聞えた時でした、それぢや貴郞御機嫌ようお身躰を隨分お大切に、とお龜さんが云ひますとね、九才に成る上の女の兒が、お父樣それてはお別れ致しまする何うぞ御無事て成るべく早うお歸り被下いませ、と貴君、三學年の優等生肩に印章を付けて居るだけに、キッパリと云つたには、はつとしましてね吾々始め傍に見て居る他人が顏へ半帕を當てたてすよ、オヽお前も勉强しや平常の通り級長を落ちるな、長くなゐ僅か三年程ぢや夢の間に過ぎて仕舞ふは、さア坊もお母樣とこへ行きなッてね渡そうとしたが、さアこれが一倍の涙でした」と鼻をすゝつて、「今年四才になる迄お龜さんは病身それに一人の男の子て男親の手て可愛がつた子でせう、芳造君が職塲て菓子製造をして居ても傍を放れない、一寸家を明けて使に出てさへおとつちやん／＼て泣くんてすもの、これが遠い處に行くと聞いたから放れません、坊もいつちよ／＼と云ふ奴を無理遣りに母親へ渡したのてせうわアーと泣きだす、親は叱かる、なだめる、すかす、手を換へ品を變へて慰さめる、其中て姉に云はれて下の三才になる女の子が、とつちやんおみやを、といぢらしいぢやありませんか、誰も彼も涙に咽せてぐッと云ふ者もないんてす暫時してから、芳造君それぢやこれが別れだ、幸に自重してください將來の成功を祈る、と金田がきッかけに廿七人の送り人が別れを告げましたがね、小蒸汽船は出る波止塲を放れて向ふの大きな船の後ろへ隱れる迄半帕の白いのが見えて居ましたが、それが見えなくなると、今迄氣丈であつたお龜さんがわッと泣いたのてす、無理もありませんわね、別れに望むて未練は見せまい涙はこぼすまいと、堪えて居たんてすもの、誰しも同情の涙に顏をそむけて慰め樣とする勇氣が無かつたてす、」

と其當時送りに行た一人が話てあつた。

萬里の波濤を越えて不知の桑港へ雇はれて稼ぎに行く芳造が出立の際、神戸米利堅波止塲で演じられた一塲の悲劇てある。

傍に見て居た他人てさへ涙に咽むだのてある、中には異樣の眼を光らした洋人もあつたが、其時の哀れてあつた事は既に云ふ迄もない、唯汽船は其意味のなんたるを知らず一樣に收容して遠く米國へ運ぶのだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

新笑話　編輯局選

天

〇落第しても。　越後小千谷町　瀧澤みつ予

小供「お父さん惡い事があれば又よい事があるといふが本當ですか、」
父「さうさ」
小供「私試驗に落第してもいゝね」
父「ウ……」

人

〇電氣のお濕り。　東京　とき子

妻君「電氣燈の點のが遲い樣だから捻止を見ておくれ」
下女「アノ奥さん今日は雨が降つて居ますから、針金が濕つてゝ遲いのですわ」

秀逸

〇煮た氷　本所　江原とり子

子供「御母樣氷屋が來たから氷買つて下さい」母「いゝえ氷なんか飮むと御腹が冷へて痛くなるから不可ません」子供「そんなら煮たら可いでせう」

〇ガラス　東京　芝野吉江子

田舍者硝子屋に來り硝子板を指してこれて二番の丸ホヤが何個とれルダー。

〇しわの寫眞料　三重　松本しげ子

孫太郎「お爺さまの寫眞料でも私等と同じだらうか」お爺さま「そりや同じだともなぜかへ」孫太郎「なぜつてお爺さまの顔は「しわ」だらけだから面倒だろーと思ふて聞たのさ」

〇地震は!!!　上總　花子

教師「犬や馬や牛や鳥などの樣に自分で自由に動く生物を動物といつて、草や木の樣に自分で自由に動けない生物を植物といひます。生徒「デハ先生地震は!!!」

〇僕は十才　埼玉　和久井きん子

兄の太郎が弟に向ひて「お前が五才で僕が十才だから御前は僕の半分だ。弟「それぢやー兄さんが二十になると僕は十才だネ」

〇こゝよ　大阪　村瀬蔦子

母「秀ちやん迷子になッたられ、上福島北二丁目つて尋れた人に云ふんですよ、秀ちやん宅はどこですか」二「かあちやん、こゝよ」

〇半人前の醫者　尾張　野田華子

醫學修行の者に向ひ「此頃は大分と御修行が出來ましたてしよう如何ですか」醫學修行者「はア左樣修行の御陰でもう一息で一人前の醫者になります、ですか今らでも小供ぐらいは治療します

〇ないはづ　福島　村井むら

紳士「貴女なぜ泣いて居ます」少女「私今お錢五錢なくしたの」紳士「それではお錢上げましよう何處でなくしましたか」少女「御菓子を買つてたべてしまつたの」。

〇あやめだんご　越後　紫清女史

今年四ツになる弟をおぶつてお庭のあやめを見て居ると弟「姉さん彼花がいつも賣りにくるだんごになるの」

〇便所　靜岡　伊藤秋雨

下女「アア、便所の掃除を忘れた」旦那「よく忘れ安い所だれ——」

〇花ちやんの物覺え　大阪　溪子

花ちやん「姉さま一錢の前はいくらでしたれ、姉さま「あの九厘ですか」花ちやん「お姉さま朝顔が九りん咲いてよ、」

〇矛盾　和泉　天堀小百合

女學生甲「妾彼人には呆れてよ、モーーー生涯言葉を交はさない事に決心しましたの、女學生乙「マア、ソンナ、」女學生甲「ですから今度逢つたら、然う言つてやらうと思つてるんですよ。」

〇明日の新聞　河内　松尾むらさき

ヂヤーン、ヂヤーン、父「火事は何處だ、近くなら家を片付けにあならんが」呑氣息子「そんなに急かんでも明日の新聞で分りますよ」

〇お靈愍　東京　芝野水江

姉「お父さんは靈愍をして夢でも見てお出てせ

う　弟「そんなことがあるものか目をつぶつて入らしやるもの」

○生死　津市　婦ふ女

甲「ない老人どん御前の孫は大變ハイカラになつたよ」老「そーかい昨日おれの内へ手紙が來たのに益々無事だと書いて有つから未だ死なしめゑ!」

○たちぬひ　丹波　紫かつら

先生「あなた不行儀なチヤンとすわつてお縫ひなさい」生徒「デモ先生女はたちぬひが肝心だと申しますヂ……」

○新聞記者　滋賀　山田うた子

甲「君新聞記者も鰹節も同じ事だねへ」乙「何君馬鹿な事を云ひ給ふな いやしくも天下の耳や目と云はれる記者がなんぞ鰹節なんかと一所にされるものか」甲「デモ君かゝねば食へぬではないか。」

○兄さん大じ　志留波磯　増田ふじ江子

生徒「先生今僕の兄さんと他家の兄さんと喧嘩して居るから來て下さい」敎師「何時から始まつて居る今始まつたばかりか」生徒「もー十分間餘り前からです」敎師「なぜ夫れなら早やく始まつた時しらせない」生徒「だつて先生今までは僕の兄さんが勝つて居たんですもの」

○諄い人　埼玉　大野こと子

「釣れますか「駄目です「幾つか釣れましたろう駄目です「眞實ですか「エヽ「一匹もですか「エヽ「一匹位釣れましたろう」

○赤十字　伊勢　西川鈴子

襷掛けの下女の背中を見て 小供「ヤア露國の旗に成てなる」下女「およし遊ばせ赤い襷ですから赤十字が横になつたんですよ」

○事實　大阪　白梅

ある他國の方が東京へ行つた一夜、椽に立つて月をながめて居ると下女がしとやかに「おかりを以て參りましよーか」といふたら客人は「ヘア憚りですが」といつた、やがて下女は「どーかこちらへ」とて便所へ案内した。

○にげことば　白百合女史

わんぱくなる太郎「泳ぎに行きたい」母親「泳ぎは毒になるから廢しなそして今朝お腹が痛いと云ふて居たね」太郎「そりヤそうですが僕はお腹を上にして背中で泳ぐことが出來ますモノ。

○最後の戰爭　横濱　清水千秋子

子供「お父さん西南の役はどこと戰ひましたの、父「あれは日本同士のいくさだよ」子供「此れからはあんな戰爭はめつたにないでしようね、父「あゝないとも〳〵だから最後（西郷）の戰爭と云ふてはないか。

○昔の武士　金澤　中泉綠子

姉さん昔の武士は馬鹿と見えるね、どうしてそんな事があるもんですか、だつて本統だろー本に出てゐたから、その譯は、自分の事を人に云ふ時某しはと云ふ吃と我名を忘れたのだろー、夫から見ると僕はゑらい。

○息子の頓智　下谷　伊庭磯子

息子「お父さん此火鉢は何の樹で造へたのです父「無言のまゝいきなり髮の毛をむしり其れを火鉢の中へくべたり、息子一寸小首を傾け其ては欅ですか何つ頃買ひました、父「今度は尻をまくりポン〳〵〳〵と三つ打ちたり 息子其ては三つき後ですね。

○乞食の意見　丹波　美馬みす子

橋の下で乞食の親が子に意見して居た　親「御前の樣に親の命令を聞かんと家を追出ぞ」子「内の家は何處にあるの。」

○士官と遊ぶ　上總　小川國子

母『お前は大きくなつてからアンナ玩品商なんぞと遊ぶもんじやありませんよ、もう軍樣じやないか』『私玩品商と遊びはしないの!!玩品商の持つ居る士官と遊んて居たの』

○家の廣さ　赤阪　森ふさ子

幼女「私の此度の家は廣いのよ」友「私の家より?」幼女「エヽ餘程廣いは」友「まあそうぢやあ明日遊びに行つてよ」「でもれ私達の居る處は六疊限りなのよあとはみんな他の人が住つてるの?」

○繪葉書　大坂　橋本賀涼尾

友「貴孃前程來た奇麗な繪葉書栗原樣から來たの?何と云つて來て?」「あらそうでしたつけ妾餘り繪が立派で文句を讀むのを忘れたわ」

○號外　伊勢　三井陵子

夫「今度旅順口が陷落したら盃かぶりをつけて大いに飮むよ」妻「アラあなた此間から旅順々々と云つて幾度もお飮みなさるぢやありませんか」夫「アラ皆號外ダ」

○ペスト箱　長門　式子女史

田舍のポストより少いつて、何處へ投れてゝ、横町の角つて、アラマーあれはペストの鼠入れだのに、婆やも大抵の者よ。



はがき文

特別第二賞

○一日の苦樂

愛知縣知多郡半田町九百七十二番戸内　小栗きと子

心持のよいのは朝起きて庭へ出た時、いやなのはお掃除とお化裝、つらいのはおさんどんのお手傳、嬉しいのは机に向つて女子文壇を開いた時、樂しいのは家族打揃ふて夕食をなす時、そしてねむいのは琴のお稽古。

十三絃の夢うつゝ。

特別第三賞

○筒袖

長野　わかば

母様とおばあさんは袖がよいと、兄上はつゝ袖、父上はだまつて居られます。

保守主義、進歩主義、自然主義。

天

○私の平生

大阪府三島郡鳥飼村字中　刀禰春子

私は電話交換手です、朝は露とともに起きいて、故郷なる父母同胞の健康を願ひ、七時半出局、勤務を終へて、午後四時歸宅、すぐ書を手に、中之島公園へでかけ、涼しき木蔭で讀書二時間餘、歸りて、夜は、習字と算術の練習、是が樂しき私の平生であります。

島之内の話、堀江の話、取次ぐ話は日に幾千、斯くて交換手は無意味の數字を連呼しつゝ一日の務を終る。

地

○すもゝ

札幌郡篠路村　大須賀おりゑ

十七八年前、此地に移住して祖母さんがすもゝの核を一粒蒔きました、今では家屋をおほひ、毎年、たくさんなります、本年四月祖母さんは、はかなくも露ときえ去られましたがすもゝは例年の通り。

生命の力は永遠なり

人

○今年の喜

備中　ふて子

妾の村には六月一日に家内の人數丈小人形を切り其に

家人の生年をかいて神棚へ祠つて皆の息災を祈りますので宅の書手は毎年私。父が子の年母が辰て私が寅妹が酉嬉しい事は今年は午の年の男が一枚ふへたので。

風俗志の參考、又曰く寅十七才の女も息災延命なれ。

秀逸

○人の行末　千葉　高橋幸子

炭燒きの與作今は村長に、昔の名主今は馬子に、雪窓に學を共にせし光子さんは今米國に、柳に梅に遊を同ふせし妙子さんは今高等師範に、妾は今母と九尺二間の茅屋に、人の世の差別は類あることよ。

昔の名主、歌うて曰く親は他國に子は島原に櫻花かやちり〳〵に

○二百八十三　神戸　德水みれ子

癖は誰にもある今來た梅田と云ふ人は「貴君」を話の中へ澤山まぜるのが癖であつた、あまり能く目立つて可笑いから幾何云ふだらうと陰で數へた、父と談話約卅五分「あなた」の數が二百八十三てした。

之れ言語學上の問題なり。

○七月十五日　上毛　眞砂壽子

七月十五日、今日は農家の安息日、待ちに待ちたる農休て朝飯にうでまんじうを喰べてしまうとお父さんが今年は蠶も上結果田植麥刈も人より早く濟ましたお褒美だとおつしやつて新らしい單物に下駄手拭にお金を一圓下されました。

金一圓、日記に光彩を添ふ。

○海水浴　愛知　紫月女史

生徒は勇しく、波間におどり入り、うづまく波に見えつかくれつ、沖の方へと泳ぎ行くを、先生〳〵と、よばゝる妾は、只波打ぎわてぼちや〳〵。

蟹にはさまれ給ひそ。

○今更　群馬　林靜子

雪ちやんお前さんもー、肩上げを下しなさいよと姉君の注意、ハイとかすかに答はしたもの丶今更に耻しく其の日は止みぬ、翌朝衣服を更へんと、ソツと鏡に向へば、何處へ失せたかノッペリさん、オヤマーいやだ。

女になつた。

○夕雲　磐城　高田時子

日の神は早や西山の端にみ幸した。後れて來りし供の若武者てしようか、紫紺の陣羽織、緋おどしの鎧花々しく、今し馬を馳らせば、夕雲波とさわいて、七彩散りぬ、白う光れる鍬形の月。

雲の繪卷物。

○習慣　相摸　はる子

妾が、毎朝清や、菊やと一所に早く起されるので、度々文句を云ふものですから、其の度毎に母様は、早起

の習慣をつけて置くとどんな處へ御嫁にいつても樂でよいからとおつしやるのよ。

誰か此好き習慣ある嫁を娶る。

○人さま〴〵　阿波　内田しげり子

お友達で好な物が一人ひとり違ふよ美代子さんは裁縫おまつさんは芝居清子さんは養蠶貞子さんは小説はつちやんは商業君子さんは散歩勝子さんは學問安子さんは繪葉書菊子さんはお話私農業が大好です。

集つて話すと面白いでせう。

○前の家　金澤　大地波子

二三年前迄住んで居た家の前を通ると表札には陸軍歩兵大尉某氏、門の右手の大きな柿の木は切られてなく、妾の植ゑた桐は塀の上へ尺計り延びて居る、あの妾の書齋であつた部屋には今どんな方が居られるか知らん。

前の家が後の家、東京は貸家の都會なり。

○卒業式　美濃　木村竹雨

三月二十四日晴天朝早々御化粧衣服をあらため海老茶の袴をはき御隣りの春さんと御一處に登校す、やがて式始まり「仰げば尊し」妾思はず身がしまつた。

天下晴れの女學生。

○姉の後　福岡　すみれ

妾の蠶を養ふてやうやく昨日絲とりがすみました上等の絲が一斤百二十匁有りました、お母樣のおつしやるには此の絲は皆姉樣にお上げなさいよ、姉樣の嫁れて後は皆靜ちやんのだからネ

女の子三人は一代。



釣師（選外）　香川　松本政子

○妾の髮　讃　布くれ子

私毎朝廂に結びますが兄樣は廿世紀式だつておつしやるし、父樣は經濟だつてお嬉びなさるし、母樣はよく似合つてお賞めなさる、そしてお祖母樣も私の樣に禿ないそうですつて贊成して下さる。

廂髮は輿論なり。

○小音樂會　信濃　櫻井操子

夏の夕べの涼しい風をあび月の前で兄様は笛私ハ弁オリン妹は手風琴三人の合奏、そして聞人は御兩親、廻らぬ口で歌ひ出すのは四歳の武坊。

一幅家庭平和の圖。

○金蓮花　越後　鈴木たま子

裏の畑の片端父より許されし半坪程の地面に草花の數種を栽培して自分の農園と心得、毎朝夕此處に出てゝは、水を與へて居たが、今朝も常より少し早起きして見れば、昨夕迄無かつた金蓮花の花が二つ三つ咲いて居た。

父は稻の葉の伸るを樂み娘は草花の咲くを欣ぶ。

○御眞影　越後　古海きい子

私の居間に、恐れ多き事なれど、兩陛下の御繪が掛て有ります、毎朝生後六月の妹が起きますと、御前に連れ行き、私が最敬禮をなし、純ちやんもなさいといひますといかに不機嫌の時も、嬉しげに笑ひます。

美化されかる國躰。

○足音　安藝　伊津美

軍馬の足音は勇ましく、活潑なるは軍人の足音、愛らしきは花ちやんの足音、やさしきは女の足音、うれしきは女子文壇を持て來た郵便配達の足音、それから縫物しつゝ女子文壇を見て居た時次の間の足音は胸にとどろく。

恐ろしいのは盜人の足音、嬉しいのは戀人の足音。

○我が宿　豊前　林ちか子

我が宿は裏は鐵道にて長崎行も熊本行宇佐行もみな通行し見渡せば長濱の魚とり船も見ゆ、大里彦島藍島白州島見ゆ、朝より夕まで隙なき汽船の航通するを居ながらに見る。

千里一瞬。

○青葉若葉　丹波　なみ子

あらたふと青葉若葉の日の光。其の青葉若葉につゝまれし朱塗の御門近く栗毛の駒に鞭うちて、進みし若武者、今し門の屋根にとまりし白鳩に駒とめぬ。

南無三、鳩のあらはれしは東照大權現の神慮にもかなひしと覺えたり。

○苗賣の唄　京橋　季子

私は初夏の頃來る、宜い聲で上手に苗屋さんが唄て行くのを、聞のが大好、併し朝彼こゑを聞と眠くなつて來る、けれども好き。

同感。

○松毛蟲　上根岸　太田あきつ子

大嫌で直目に附くから妾は發見役、妹は掉て落し役、お祖父様が落ちたのを箸で取る役、これが毎年。今朝

庭へ出て見たら松の下に澤山蕘が‥‥‥おゝ厭だ見るから竦とする彼毛蟲、是から毎日又發見るんだわ。

蝶ともならで。

○不思議なる一　石川嵐友女

私の家にはなんだか一と云ふ數にゆかりがある、それは私の祖父が九十一、曾祖母が八十一、祖母が五十一兄が二十一妹が一つで皆天國へ逝きました、さて私は何歳で、逝くのか知らん。

一は始にして終なり。

○初夏　安房早川玉子

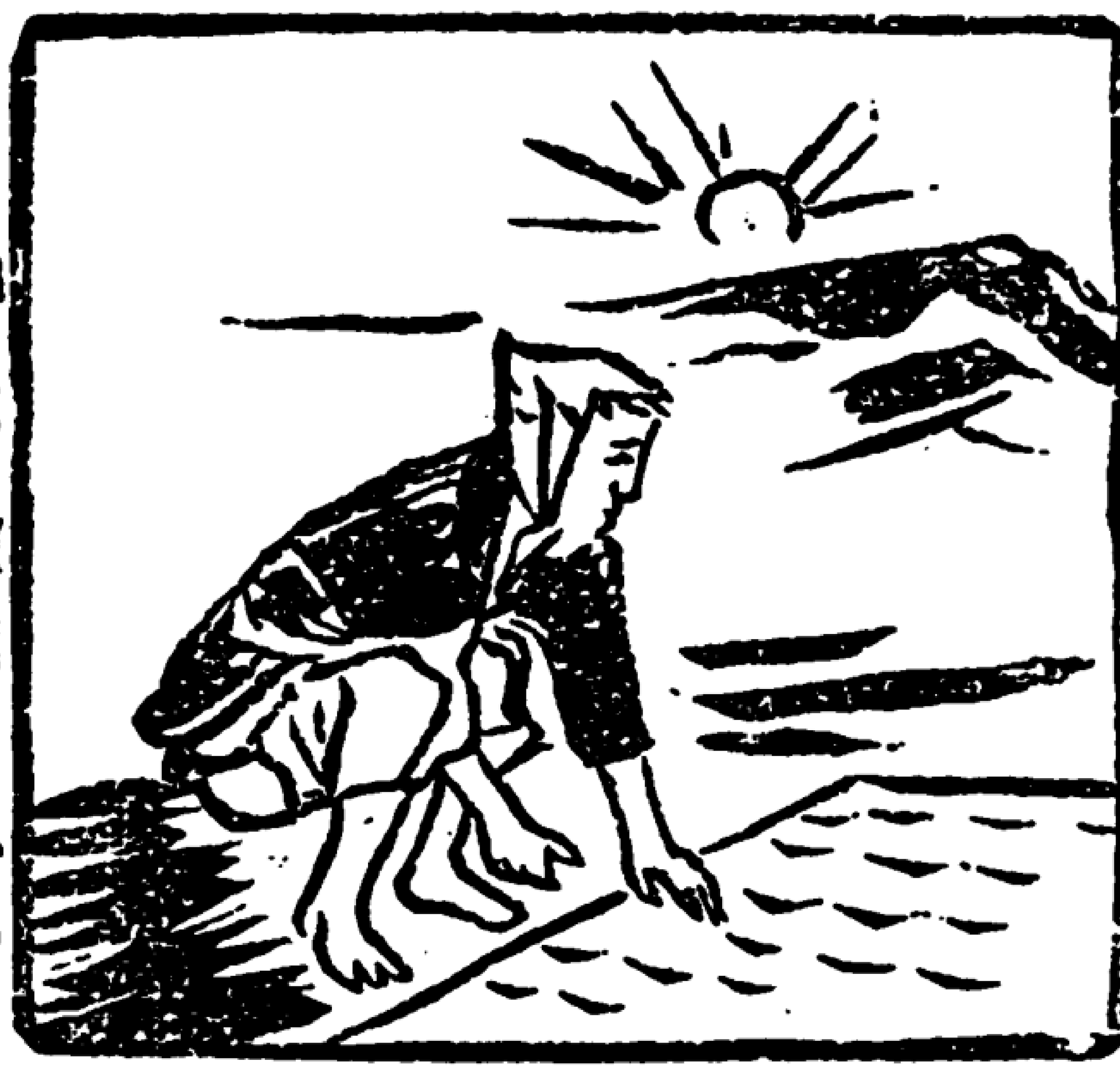
取合せの紙襖は、土藏に藏つてあつて葭障子と交代になり、八疊の毛氈は花莚と代りて、廣くもあらぬ庭の植込の新緑が窓を壓して、只何となく座敷迄靑味を帶びて來た。

若葉の天地。

○太いもの　秋田いっ子

月夜の盜賊。小供嚇しの繩、相撲の横綱。栗鼠の尾。車夫の脛。老人及船子の聲。西洋人より見たる日本人の膽と婦人の腰、剽窃詩文の注意て發表せられても恥ぬ人。

細いものも婦人の臀。



農夫（選外）　山口磯村せいじ

○二頭馬車　神戸川畑亭子

今し二頭馬車は馳せ來りぬ、一寸の透間もなき黑き箱馬車なれば、如何なる人の乘り居るか見えず、なれど一人の巡査車上に巖然と立ち居れり。

華族と囚人は巡査に護衛せらる

○變らてあれ　鳥取田幡みどり子

書齋の前の巴旦杏に毎年虫がつきますので、其の豫防にと一週間前兄樣と二人て一々丁寧に紙袋をかけてやりました。が兄樣は六週間現役で昨日入營なさいました。て妾は兄樣のお歸りまてこの實が變らないてあるやうにと朝晩仰いて居ります。

妹の顏にも袋をきせて變らてあれ。

○兄さんの本箱　下野入江しづ子

今度兄さんが卒業したので、すぐ歸省する筈なのだが、少し用があるから明日歸るって荷物だけ屆いたので本箱を明けて見たら、あらまーいやだ、戀と戀、魔風戀風、金色夜叉、濱子、夏子、教科書はどこかしら。

歸省中は小説、在京中は教科書、妹よ、汝何なか知らんや。

○螢　埼玉　山口くに子

「川の水は辛よ井戸の水は甘よ」といと親切に敎へて招く妹の心もしらで空高く小川をさして飛びゆくとは、さても無情なる螢かな。

行燈の光も消してやれ。

○腦中無一物　福岡　林まつゑ

出しても沒書、出しても沒書、此度こそはと落付拂つて机に向つた、扨て〳〵筆を取つて見れば、又例によつて例の如く縱に振り橫に振れ共空蟬の拔け頭には何も出來ず。

一切空、無より有を生ず。

○小さき乳房　神戸　藤の白露

何だか、からだにさわつた樣で目をあけて見ると弟がお母さんと間違へて私のお乳を握つて居る驚いて「姉さんだよ」といひますと弟が「道理て小さいと思つたよ」

○ゆふぐれ　鳥取　なでしこ

みーてらーのーかーれーのーれー、つきよりおーつーろー、絹引裂樣な妹の唱歌、何處よりか、風のまに〳〵もれ來る、木魚の音、はては、遠寺の鐘の音ごーん、黃昏ぬ、雨やみて風淸く、靜かなり。

○十人十色　相模　井上たけ子

私の家ではお父さんはお酒が好きお母さんはお芋が好き兄さんは煙草が好き姉さんは和歌が好き妾は繪葉書が好き妹は編物が好き末の弟はお汁粉と牡丹餅が好き。

○人の心　下野　きむ子

あゝ人の心ほどたのみ難いものはない私しとあなたはほんとーに親友よ一生心變らずいつまでも睦ましくしませうなぞと言つた人が、いざと言ふ時になるとしらぬふりあゝ口がかるいのが心がれいたんなのか。

○既に五年　大坂　飛龍女

戀愛淡るゝ父母の膝下を離れ懷しき故鄕の山川を後に燃る許りの希望を抱いて此地へと來たのは既に五年の昔と成た、爾來妾は言ふも恥かしき電話交換手！

○日の出　豐前　花溪女史

數條の金箭長う曙光を破りて、旭今將に出でんとす。鐘の音、笛の韻、鳥の聲、開戸の音、拍手の響、馬の嘶、人の聲、車の軋、汽車の轟、皆一瞬間に活動す。斯くして眞紅の朝彦は臨みませり。

○いさゝ川　岩代　岸野常子

背戸のさゝ川、靑草を食める小牛の側、野薔薇の花白う水面に垂れて、赤襷の優し少女夏大根を洗ひ居けるが、ふと己が姿の流に映るを見てにこりと笑みぬ。

○朝顏　岩代　佐藤文子

妾はとなりのお祭さんから朝顏の種をもろうて來て、庭の片はらにまきまして每朝飾夕水をやつたり色々と丹精をこらしたので今は一尺餘になりました、早く此の花の咲くのが見たいわ。

○夕顏　備中　西登嬰

代數の宿題の解けし嬉しさに、月影ふんで中庭に出づれば夕顏は月を宿しほのかに香を送りて月と賭くが如し、俯して一輪を摘めば宿りし白露はホロ〳〵と落ちて碎けぬ。

○お蔭樣　松山　白露

瞬の婆樣は今年八十三、お說敎を聞に行くのが第一の樂である如何な晚でも缺かした事がない此の間大雨の晚に途中て石に躓いて倒れて傘を折り脛に大怪我をしたけれどもお蔭樣で是位て濟みましたと云ふて居た。

○夜會の花　東京　無才少女

櫻の顏絲の裝夜會服の裾長う銀燭まばゆきピアノに向ひて玉音て歌ひ出したのは佛國流行の菊の國の少女と云う鬘金絲の幕の彼方賑ひて居た時

士淑女も此佳人の玉音に盛大な此夜會も更けゆく。

○鹽うり
安藝きよめ

宿の前を七十許の媼が毎日鹽や鹽と皺枯聲ばり上げて通ふ聞けば全くの一人者、私何となく氣毒なので小使錢の巾を少し與へました時の媼の笑顔今に忘れられませんが三年へた今日まだ無事で居るでせうか。

○工夫
戸塚市川澤子

家屋を建築するにも裁縫をなすにも、工夫文を綴るにも、文字を書くにも、圖畵を、畫くにも工夫、かくの如く工夫して、書きても〳〵なほ、たらざるは、未だ、工夫のたらざる故か。

○緣日
陸前高橋花子

今日はお釋迦樣の緣日なので境内は人で黒山を築かれた。大きな老杉の下に小屋をかけた小間物屋が、村の若衆を周圍に集めてゐる。折柄かけくる自轉車バタリと衝突小屋も馬も日兵も露兵もがた〳〵とたふれた。

○我家の朝
埼玉千代子

枕の上が明るくなつたのに氣がついてたまげて起きて見ると母樣は最早御飯の御仕度に忙がしい父樣はほうき片手に御庭の御掃除作男の與作も前の畑に肥料をやつてゐる私も可愛いポチに御飯でもやりませう。

○火夫
伊勢歌子女史

赤道直下の夏の眞晝波も沸くらん印度洋雲無く風無く學船死せるが如き時試みに焦熱地獄と聞きつる船底の汽罐部を覗へば感嘆敬服！宛然熱湯を沸す赤鬼の如き數個が熖々する焚口に向て鼻唄交りに石炭を投ずるを

○歸省
玉子秋津すみれ

三年ぶりて歸り驚いたのは、御父樣や御母樣の頭が白くなつたのと洗濯屋の御婆さんが死んだのと、お向ふのお花さんがお嫁に行たのと、お隣の空地へ立派な銀行が出來たので有た、替ら無いのは、三毛と玉とカナりや。



荷馬車　（選外）　芳賀篠崎九子

○我が身
上毛千鳥子

三才にして父に別れ十二才にして弟は死し十四才にして友にわかれ十六才にしてエンゲーヂの夫は戰死し又金鵄勳章の夫に事ふ。

○朝起の趣味
播磨植木初江

病の床に枕上らぬ母を看護して居る此頃は、お寺の明けの鐘を待ちかねて起るので、何日も雨戸を開けて趣味あるのは、殘る月影を蓮の葉に結べる露に宿してるのと、一二の螢が朝風に飛んで來るのと。

○現在
紀伊夏菊

人々は暑き炎天に脊をさらして田圃の草取り、私は軒端に涼しい風鈴の音を聞きながら裁縫、そして好きな書物をちよい〳〵覗いては、新たらしき桃を思ふさま味へるのです。

○アカシヤの花
伊豫曉子

一人の愛くるしい幼女は今水杓を持つてアカシヤの花盛りなる堤上に現はれ、無心に水面に漂ふ眞白きアカシヤの花をすくひ始めた。

○漁船
高知黑手女

突然聞ゆる汽笛一聲、ふと見れば神戸發の漁船棧橋につき煙は細くかすかに朶門の彼方に消えつ。明日は上京する姿、彼の漁船に乘せられて戀しき故郷を去ると思へは、歡ばしさと戀しさの感、胸裡に湧きぬ。

○樂み悲み
小樽牧汀月

學校てあつた事や他て見聞した事を夕御飯すんだとき母上に御話しする時、御友達とテニスをする時これが私のたのしい時、雨の夜未だ忘られぬ千鶴子の死ぎはを思ふ時、叱られたとき父なき事を思ひし時。

○タイバル河畔
伊勢伊藤織衣子

タイバル河畔に往昔を追憶せば誰かオーガスタスの榮華コリセアムの劇

満等夢の如きに涙を灑がざるものぞ、ベスアピアス山を眺めよ噴煙淡々遠く晦暝の時。誰か悚然たらざるものぞ、歐洲の花園は實はそれ歐洲の蜜園か。

○罪　　安房　石井かつ子

此所保田川の岸邊で、生れて間近き小猫を、俵箒に載せて流して見て居る人がある、小猫は漸く俵盞の端へと歩み出たら、あぶない落ちると水だよと、あゝ彼の人は何故流せしやら。

○形見の薔薇　　岡山　渚子

妹よ、汝は何所にか漂へる、妹の愛でし薔薇は、汝の露を宿して咲けるお如し、淡紅なる花瓣は汝の頰に似たり眞紅なる蕾は汝の唇に似たり

○すきな物　　丹波　白菊女史

愛讀してなる書物を見るのと。四才になる愛らしき弟の餧顏と。御嫁にいつてる姉様や御友達から御手紙や繪葉書も頂くのと色々の編物をするのと。色々の花を押花にするのが私一番好きてす

○一番樂しい事　　松江　寺本芳野

まづ花を活ける事、お茶をたてる事、テニスの競爭、繪葉書をかく事、ハンモックの上で雑誌など讀む事、それから文を作つて投書する事が私し一番樂しいわ、そして其投書文が發表になつた時の嬉しい事は、まあ。

○妾の兄さん　　茨城　美寧

妾の兄さんは音樂が大好よ妾を愛して呉れて音樂等を教へて下さつたの中學校を卒業なさいましてすぐ一年志願をなされ戰地に行きまして一昨年の秋遼陽で戰死なされました。

○顏　　磐城　原田清子

圓くて可愛のは猫の顏、ふつくりとして愛くるしいのは妹の花ちやんの顏、見惡いのはお猿の顏とお隣の慾張婆さんの顏、お可笑のはお鍋どんの怒つた顏、恐いのはお巡りさんの顏。

○巡航船　　大阪　島田ひろ子

昨日歸りに大川の巡航船に乗つた、そよ〳〵と川風心地よく、持合した女子文壇を繙いて何時か書中の人となつて居た、餓に近邊の人の立騒ぐに心付けば舟は早幾つかの乗場を過て我家の前へ着いて居るのであつた。

○いやな人　　岩代　松山薔薇

お酒に醉つた人、嫌味をいふ人、いやに高慢ぶる人、邪推の深い人、虚言をいふ人、けいはくなる人、それから一番いやなのは人の前もかまはずに煙草を吸ふ人、だつて煙が鼻に這入ると苦しいてすもの。

○奥ゆかしきもの　　神奈川　ゆたか

黒木の床の間に古錦の一幅、古りたる花瓶に白百合の新しきが、活けられたる。色背う苔蒸したる燈籠に、形쒗しき小池の傍ら、青簾洩れ來る、隣家の琴の音。

○長家の一夜　　京都　淺野方梅子

晝の騒がしさにひき變へて夜は寂として只奥の家にて扇の骨をけづる音のみ折しも浪花節歌ひつゝ灘板がた〳〵踏み鳴して歸へつたは二三軒東の飴賣の娘らしい涙をながし歩く夜泣の鈴、いとあはれ深し。

○お嫁入　　淺草　樂津子

私が河岸へ出て夕ばえの隅田川を眺めて居ると、今年四つになる私の妹いつ來たのか突然、「姉ちやん何處へお嫁に行くの」私は「清子ちやんは何處へ」「私觀音様へ」。

○大好　　廣島　箕岡琢子

妾好な中でも、白色の花と、紫のりぼんと、海老茶の袴と、銀色の雲と、黒い足袋と、青い木の葉と、金の小川と、黄な聲でなくとりが一番好き。

○父の旅行　　大阪　石井悦子

今度朝日新聞社に催しの滿韓巡遊船で實業視察に行くとて父は仕度最中私は去年戰死せられた兄様の事を思ひ、父の旅行もと一入兄の面影が偲ばれます、荷物の底には最後の書に海苔が添へて入れてありました。

○日本男兒　　長崎　乙女

まあのぼりがたくさんたつた事一二三四五……十八本も立てゝあるわ去年までは十三本たてゝあつたが此の上の町ばかりて　日本男兒が五人ふへて居るよ日本中何人位ふへて居ろうか。

○或る夜

小石川　小林芳子

月の冴へた晩西隣ては英語の讀音楽隣てはお琴のお稽古お向ては常盤津だか何だか浚つて居るそして私は今日の日記を書て居るのである。

○三ツ

紀伊　谷田峰子

私が生れてから最もうれしかつた事は、兄さんが文科大學を優等で卒業せられた電報がとゞいた時と、次の兄さんが今度中尉の軍服いかめしく着て凱旋せられた時と、それから私の文が誌上へ出て來た時との、三つで有ます。

○田植姿

兵庫　柳田白百合子

今汽車の窓から此方を見てにつこりえしやくなさつたあの美しい奥樣ははてたれだろう見た樣な方？おゝそう／＼三年前東京のものもちへ嫁れたお君樣？おゝ恥かしい昔に變る此田植姿をどう御らんなさつたやらう。

○隣りの下女の話

京都　はる枝

此間奥樣から鯖のおすしをいひつかつた時、常になくお孃樣か私がしてよと仰しやるコレへ／＼と思つて居ると、「竹や、鯖をお料理して御飯に酢を合せて肴板と庖刃と桶に水を入れて持ておいでそれから包む皮も。

○草履

大和　澁谷彌生子

あゝうれしい東京の姉さんから小包が届いた、妾のほしい／＼と思ひし草履、花緒は當世のチリプ色、うれしくて大事に／＼下駄箱へしまいました、一寸出して見るに妹の静さん、あら姉さん又草履をけふは五度だれ

○空想

會津　佐藤香子

會津は四方山て、恰度、擂鉢の樣てすから、其中を、泉水とし、泉水の中に大きな築山を造り、其所に、家を建てゝ、私の樣な不幸の子供を、教育したいと思ひます。



かれうり（選外）　丹波　青木なみ子

○結婚當時

秋田　松田せい子

嬉しいやら悲しいやら怖ろしいやらて四五日をくらすてと、お友達からは頻りにお祝ひのお手紙。お午過ぎに御返事したゝめやうと思つて筆を執つたが、急にかなしくなつて筆を擲く。

○めちや／＼

岩代　花子

今夜は何しても原稿を作らうと机に向て一生懸命、するとぶーんと蚊の襲撃、之はたまらんとランプを蚊帳へ入れたら祖母樣に叱られた、仕方ないから頭へ作てをこうと考へ始めたら武坊が昨宵の續きの催促て頭はめちや／＼。

○清々する事

芝　秋山朋子

朝早く起きて冷水摩擦をやり、室の内外の掃除をして髪を結び手を洗ひ障子を明け拂つてさてとばかり、朝日影までゆき机の前に、しやんと座つた時の心地。

○夏の朝

下總　小林はつ子

毎朝六時頃になると隣の爺やが鍬を肩にかついて畑に出かける馬子唄を唄つて。妾の家では朝げの支度にいそがしい、おい／＼學校に行く子供も通る。

○親と月

香川　松永あやめ子

親と月夜は何時もよい、とは昔からいふ事であるが、あはれ我が身、親もなく兄弟もないので、唯だ月のみをたのしみとして居るのであるから、暗夜などには何となく淋びしい感じがする。

○歸れ君

常陸　一少女

ゆびおりかぞへてまつてゐた暑中休暇もいよ／＼、明日からあら嬉しい明日はなつかしい姉樣もおかへりなさる、又都の兄樣もかへつていらしやるお土産はお約束の繪葉書にリボン、何しろ待遠しい明日よ。

○失望

上毛　關口初子

出征被成た兄樣の凱旋を待つて學校に入學て被下ると父樣がお仰るから妾は麥刈に蠶に絲繰にそれは〳〵腕の盡きる限り働き亦嬉んで勉强した甲斐もなくとう〳〵今年もうら淋しい風の吹く秋となりました。

○寄宿舍の夕べ　岡山　三村すみ子

午後六時になると「リン」を合圖にみな〳〵團結して樂しく晩飯をすまし私は詩集を片手に讀い〳〵掃除した庭を散歩していると一室から琴の音が聞えるまた運動好きなのたれ彼しきりと「テニス」の勝負を爭そうて居る。

○窓際の五分間　徳島　楠根信女

降りてはやみ、やみては降る、梅雨に、窓際に立ちて向ふを見れば、雨は柳の糸の夫れの樣しほ〳〵小笠傾け蓑負ふ乙女の田植にや忙はしげなり、折しも雨はげしく降る、庭の桐の葉に雨蛙一疋嬉しげに雨を呼ぶ

○海の聲　鳥取　藤井あやめ

妾は或日夕榮の美なるを賞せんと家事を遊し村の西なる海岸に至るに大波渦卷きて物凄く向ひの巖石えと碎けて音轟々たる彼方に白帆の船は勇ましく進ふ時早夕榮は夫に消えてたゞ狂亂たる波音み高し。

○さびしき物は　伊勢　川原綾子

深夜遙に聞ゆる犬の吠聲に五月雨に落つる梅の實の音に、きぬたのひゞきに冬の月に枯梢の音に磯の松風に一人旅に。

○夕暮　名古屋　柴田藤子

田植すなる男女の蓑笠重げなれど雨は尚ほ止まず、疲れにけん手足見るからにいと怠はし、久國寺の入相告ぐる鐘の音一杵二杵、あはれに餘韻長う、かしこ、家路に急ぐ馬と童、淡く夕靄に包まれぬ。

○美いちやん　常陸　貞子

凉しい六疊のお座敷で、今年三つの美いちやんは、誰に貰ふたのか、やうやう咲き初めたばかりの撫子の花を、左の手にしつかと持つて、すやすやと眠つて居るその顏のまあ愛らしい事、恰ど小さい天女の樣。

○離郷　堺　浪江子

汽車は動き出した、妾は今故郷を離れるのです、見送つて下さつた人達の顏も次第に見へずなつて、親しい友の君子樣の家や妾の家の松の木も次第に小さくなつてきた、再び故郷へ歸るのは何時でしよう。

○色々　埼玉縣　大野こと子

緣兒の赤き衣服は愛らしく田舍女の赤き揃ひは賤々し白百合の花は犯し難く看護婦の白衣は慈愛の色。青葉の下にはハンモックもがなと思はれ河の青淵は丈長き黑髮のふわり〳〵と浮び出しそうにていと凄し。

○病葉　福岡　すみれ女史

妾は病葉の散るのを見まして去年の春おなくなりなさつたお姉樣の事を思ひ出しまして、病葉をひろひ上げにぎりしめて一種異樣の感に打れました。

○青き色　大分　松木露子

私のすきなのが、天と、海と、木の葉と、草の葉との青き色で、きらいなのが、どけと、いもむしと、かびと、顏のあをいのとです。

○白づくし　茨城　美紫山子

お庭のばらの花は白、私の生けた菊の花も白、兄さんの洋服も白、私のリボンも白、御母さんは、私の心も白だつて、赤く染れば赤くなり。黑く染れば黑くなるつて。私は何時も、白い心で居たいわ……

○花百合　山城　太田吸花

朝起て背戸に散歩に出ますと、妹が露に濕て花畑で百合の花を折ていますから、鈴チヤン其な亂暴して何するの―と咎めますと、今白いのを折かけた手を止て、姿、綾子チヤンが病氣ですから御見舞するの。

○ことしの夏　南多摩　信子

昨年の暮に我宅へ嫁つた義姉さんは風通御召を一反私は單帶を兩親から頂戴しました夫れて四五日たつと兄さんと三人で大磯の海水浴へまへる積りです。

○妾の娘　橫濱　長谷川波雨子

此間の夜娘が切りに女學校へ入れてくれとせがみましたから妾は若し學校を優等でをえたらば苦しいけれど入れてあげやうと申しますと娘は大層喜こびました。夜半に妾はふと目を覺ましますと娘の讀書の聲。

讀友倶樂部

○眠る時　(課題)

○　神戸　大島ちさ子

私は、ねるのを、なによりのたのしみとしてゐます、まづ神佛を拜しつぎに父母にやすみを乞ひます火は電氣ですから女中のねるまでともしておきますそうして寐まきをきかへて床に入ります私と弟とは北向にねまして右ばらをしたにしてゐます夏などはくるしくてねられませんから弟におとぎ話をきかせてやりますそうしまするとしらぬまに寢入つてしまひます。

○　本郷　とよ子

私は唯今修業中ですが、故鄕の空のなつかしく、いつも眠る前には母樣の事を思ひだしまして、どうぞ一日も早く出世して、母樣の御安心遊ばすやうにと、心に御祈り致します。そして御恥かしい御話ですが、小聲で唱歌を歌ひながら、床をしきます、臥しましてからは其の日の事を考へながら、いつか夢路をたどります。

○　高野山　磯村靜子

ねる一時間程前父上は、皆を集めて一日に在つた面白い悲しい何でも話して談話會を開くが常です、武ちやんは友達と戰爭の話し、姉樣は學校の遊技のお話し、母樣は家庭のお話し、父上は珈琲を一杯づゝ下さる、皆お別れして散會、妹は姉樣と一處にねる、姉樣は明日の學科のお下見、妾は好な〳〵女子文壇を見て、いつのまにか眠てしまふ。

○　靜岡　福井貞水

夏は蚊張の上へ螢を紙袋に入れてあげ、中に團扇を持ち込んで寐ます、貧家ですから冬は床の下へ藁を敷いて寢ますが寢返りをするとゴソゴソ音がします。月末になると本誌の事計り考へて夢まで見ます。

○　熊谷　和久井きん子

先づ夕飯を濟せて後今日學校で學んだ事をすつかりさらつて而して明日の科目を調べて居るとぢきに十時位になり升から例によつて父母へあいさつをして床に就き升と其の日の學校の事お友達の事だのを考へて居り升と知らず〳〵に妾は夢にはいつてしまつて枕時計のチリ〳〵チリンと鳴るので目を開いて見ればもう明日になつて居り升。

○　瑞穗村　中里きん子

母上と帳合をすませてから、弟と色々話をしながら、新聞など讀み、漸く人々が寢靜ると奧へ行つて、燈火の下に勉强して眠ります、そして、私寢ながら作文など考へるのが大好き、それ故學校で點取りの時なんか、修身や歷史の一冊ぐらゐいつも諳記してしまひます、私の寢衣は手輕な改良服故、ほんとに都合がよろしうござ、ます。

○　上野　谿水

私眠る前凡一時間算術の復習、それから床に入ると三分心のランプを細くして枕頭に置き、女子と壹ヶ先頃買つて來た冒險小說を讀んで居て愈々眠くなるとランプを消して眠ります、唐草の布團一枚で西向に寢ます、それから先は知りません。

○　新潟　閑竹

妾は晝間忙しくて書物を繙讀する暇もないから夜は十一時頃まで教科書と首引を致して居りますが夫れから戶締をしたり火を消して寢に付きます朝は四時半頃起き出て弟妹が通學するに遲れぬよう炊事の仕度を致すのです。

○　豐前　林ちか子

夜は十時に、私と姉の床とを、東向きにしき、蚊帳をつりて、勝手元に行き、火の用心をよく見て、レンガの門をしめ、げんかんの戶をたて、雨戶をしめて、木綿の袷のねま衣を着て、ランプを消して臥しますと、朝迄は極樂淨土で、ふと目をあけば、朝日が雨戶の隙より映して居るので驚いて飛び起きます。

○　松江　新庄しな子

私は眠る前に座敷を掃き床を述べ晝の着物をたたみ後寢卷と着かへて今迄着て居つた着物を人形竿に掛けて釘にかけます寢卷は木綿の綿入で模樣は市松の縞であります　それから火をけして床に入りますが毎日學校へ着けて出るはかまをたゝんでふとんの下に敷いて寢るのであります私は床へ入つて少しすると直ぐにすう〳〵寢てしまいますのが常です。

○　下谷　伊庭いそ子

夜眠る前に其日有し事共を日記致し祈をすまし母君兄君姉君等へ其れ〳〵御あいさつをすまし其から自分の室へ歸り南の方を頭にして燈火を細くなし先づ安心と柔かいベッドの上へ長々と

眞白なフランネルのねまきと替かへて明朝迄は面白き夢路をたどるので有ます。

○　金山の里　かへで女

眠る時、何んと面白い問ひですこと、私の寢室は書齋と同所なのです、それで机の前に床を延べて手燭やマッチなどを枕べに備へ、机の傍に懸けてある歐羅小町の御姿を拜して眠るのです、豆ランプの灯は消した事ありません、勿論衞生上不可ですから右枕にして心臟を守るのです、床の上で和歌一首詠むのを常とします。

○　大阪　てい子

五時に夕食をすましまして お風呂へ入り身仕度して宅のうらに五十坪許りの あき地が有ります そこであかるい中はテニスしたり又父母と樂しく話したり八時頃まで遊んで居りますそれから內へ入り床をのべまして机にもたれ聖書をしらべ祈りして床につきます寢ましたら朝まで一度も目があきませんで心よくねてしまいます。

○　橫濱　しのぶ子

毎晩九時迄自修して、心樂しく部屋へ歸りますと皆樣は最早先へ來ていらしつて私の床まで敷て置いて下さるのです、お禮を云ふて、美しい橫濱の町を見はらす窓を名殘惜しくも閉めてしまつてから、心ゆくだけ祈禱を捧げ、さて安らかに床に入つて、翌朝までは雨が降らふが風が吹ふが何も知らずに。

○　島津さゆり子

芳麿：：：まだ六つの弟です、毎晩きつと「マヽさんグードナイト」と申して眠ります。弟は英京で生れて昨年歸朝したのですから、そしてベッドに入りまして五分位は乳母とふざけますがすぐすや〳〵と、淋しい寢臺に只ひとりおとなしく眠りますが、小供はほんとに罪がない。

○　角田川町　文子

八時頃可愛い妹、母に捨てられし可愛い妹をネンネさせまして、蚊帳の中で二時間も勉強します、そして眠る時は母の佛前へ點燈し一禮お休みなさい升て、する頃には雪ちやんは泣きますから添寢して牛乳を與へます。

○　周防　桔梗子

午後八時交代して南向の一室に入りベットに就ますと我が看護する患者の事父母姉妹果ては親しき友人の事など思ひ浮べ カーテンの隙もる月を眺め間々碎氷の音を聞きいつしか魂は故里の空を逍遥ひつゝある時幽に呼れてふと夢醒れば最早交代時間の午前一時急に起床して白衣を纏ひ電燈暗き廊下を通り病室に赴きます。

○　相模　わすれな草

此頃は磯邊の別莊に來て居ますので本邸に居る時よりも淋しい寢室よ。日記をつけてから床に入りますが今年は妙に浪の音が耳にさわつて眠りにくい。毎晩必ず思ひ出しますのは逗子の別莊にいらつしやる母樣の事と彌生半ばに逝つた可愛らしい妹の絹江の事ばかり、たまには今ロンドンに留學中の大兄樣のことも。

○　上海　樋口島子

妾就眠する時は大概拾一時ですが其の寢る前に一寸二三歩門口を散歩致しますの それから父母より先きに寢る時がありますから其時失禮致しますと挨拶致しますの床に入りまして直に文壇や小說を讀みつくした處など再び思ひ浮べまして大概氣がつかれた時眠むつてしまゐます。

○　備中　ゆり子

私は姉さんと金光樣にまゐり歸りまして學校で習うた事をおさらへするのそして九時になると床に北むきに寢ますが途中でまくらがはづれるのでいつも〳〵母さんと姉さんとに笑はれます。

○　田舍娘

六時に夕食七時より十時迄机に向ふ其の間で居ねむりをする事もあります其の時には起され庭に出てゝ目をさまし勉强します床には誰より遲く、ねまきを着て弟にしつこをさせて入りますそれから弟が御乳をいぢりますの 御笑ひなさるな母樣がないのですもの 私可哀そうでなりません弟は四ツ私は拾五。

○　兵庫　秋月子

毎晩八時より九時まで庭內散歩夜の空氣はいけないつて、おつしやるけど妾はかまいません、そして靈の吾が職務の勞を慰め其日のなせし事を顧み、亦未來の想像をします、寢室は間口二間の奧行三間の西洋建、勿論寢臺です、眠る方向は東、就眠前には必ず全身冷水摩擦をなし微溫湯含漱して、舍監の君に御あいさつ申上げ、己が起臥を共にせる全室五人の友に「おやすみなさいまし」と云つて床に入つてからは何事も覺えません。

○　大阪　三原やく子

私は床へ入る前皆に挨拶して私の居間へ行つて一寸でも本を讀み一字でも書かないと心持が惡う御座います夏冬なしにゆかたのねまきを着かへます是れは洗濯が致しよいからです南向よりは東向きがすきです火は消さず明日も面白く暮らして行く事やら友達の事やら考へてゆかいに

床につきます。

○　矢　名

私の家は前が東、後が西に向ふて居りますから いつも就眠する時は西にあたまをむけて眠るのです、其眠る前は 正直なところが何うしても本を見てそうして追々と眠るのです、時としては火を消す事を忘れる事があつて、早朝からしかられます、いつもお母さんと一所。

○　福岡　高山きち子

私寢る時はれおとなりに新聞を返し表の戸をしめ手を洗ひ神佛に御禮をしまして あのれまきは袷の筒袖を着ますのそして父母に 挨拶しますとお母さんが肩をたゝいてくれて申ますから 此頃は毎夜規則と致して居ります。

○　大阪　福原千代子

私の眠る時は先父母にあいさつをなし、後私の室へ歸り衿を正して机の前に 正坐し、一日した事を反省して日誌に記し、後我敬慕せる 某女史の肖像にぬかづき、寢衣となりて後一！二!!と體操し、火を吹き消してねます。

○　小　山

夜になると今頃はえんの方に出て 皆涼みながらいろ／＼な話を致しますそして父母や 妹などは九時頃床につきますが 私は机をもち出してさて讀や編物などをして十時頃床につきます 蚊張の中に入つて見るとも－妹などが 私の處まで占領していますだからよくなほしてやつて私も共にやすみます。

○　前田　久子

まづお母さんに御休みなさいませと 御挨拶し、そして縞のふとんに横になつて下女の松どんに、さらさの着ぶとんを掛てもろうて 妹のそばに眠ろのです。それから眠る前に誌友の御孃樣方の事や記者樣の事やら自身に對する未來の事などあちらこちらの事など 思ふて居る內すや／＼と眠るのは十時頃 後は白川夜舟の高いびきて翌朝の六時迄。

○　鶴岡　かつ子

妾は眠る前には必ず水て清めまして後 讃美歌の第百七十六番を誦ひます 其れが濟みますと次の間の六疊に居らるゝ御兩親樣の許に 御挨拶に行きます其時は何時も父母樣は笑顏て 妾の顏を御覽なさいます 其から自分の居間に歸つて女中のとり子に夜着布團を延べさせ 自分は電氣燈を消してランプに代へて後、 白のふらんねるの寢卷に着代へ東向きになつて休みます。

○　筑後　貞　子

時計が九時を報ずると私は直に 御兩親に床を取つて差上ます そして四疊半の我室に入つて妹と二人今日學校て 先生から教はつた事など話し十時がくると我室にも床を取つて 戸締りなどきつとして神佛の御光りを消し机の上の少さいランプを細火になして 妹が風邪てもわづらわない樣に氣を附て仲よくやすむのが例です。

○　羽後　松田せい子

妾が昨今の就床の時程いやなのはないの日中はさのみ感じませんが ベットに這入た時ばかりは何となく上京中の經歷が眼前に徊ふて 逆境の淵にます／＼誘はれるやうて？此の時妾は イザヤの四十四章二十二節の讃美歌を誦すれば 何時の間にか華胥のパークに導かるゝのてあります。

○　德島　齋藤菊子

晩のお祈が終ると、すぐ床に 入りますのよ、夫れからチック、タックの時計の音を聞いて、過ぎ去つた事、現在の事、此れから先の 身の上、父母の老た事、遊學中の兄の身體、人から聞た事、自分の見た事、裁縫學校の先生の 親切な事、學友の內で、だれが一番好き、など夫れから 夫れへ妄想して、眠りに就くのは、イツモ二時よ。

○　磐城　佐久間ちよ子

當夏は高い所に床を造りてあり、 詩文の 材料を尋れ音樂を試み、妹の問ひ事に笑ひ或は苦しみ、斯く騷いてから入浴し皆の鼾音きゝて唄ひつゝ腹大鼓打つ間に眠ります。

○　麴町　紅　子

私の眠る時は、 大概十二時頃なのです、 床に入つてからはしばらく 胸に手を當てゝ朝からの事を考へて見るのです、 私は宗敎がありませんから只心ておいのりをしてやがて寢につきます。

○　下總　秀嶺女

眠る時には父母に一禮して布團をのべ 次に夫のを次に妾のをしきます、 戸を閉ぢ火を消しますが妾の務てす、 妾の家は東向て 老婆の申しますには家の長なりに眠るときは福その身に 及ぶと家內は皆東向に眠ります。

○　東京　橘　子

私はありし一日の事を落なく日記へつけて其から床につくのですが しばし寢られぬ性ていろいろなかなしき事つらき事 又うれしき事など思ひ出し又ひよつとすると歌など考へては 一寸起きて手帳へ記して置きます其れから さきは高いびきよ。

○　越後　白百合子

凡そ六時頃已が務を終り一二の書を開き見居る内に、室の隅から暗の幕が歩み來て、字の見えぬ頃、やう〳〵雨戸を閉します、それから雜誌を見たり、新聞を讀んだりして、十時頃床につきます、先づ考へますのは、今日ありし事、次に明日の業を定め、それから遠き友の上を思ひ、我身を考へて、いつか何も忘れて眠つてしまひます。

○　久留米　あさ子

私眠る前には、ブラシにて齒の内面外面を、横竪に磨き、食物の殘片等を除去し、口中を淸潔になし、表裏の戸締をなし、佛壇に祈りを上げ、お燈明を消し、火鉢の火を消し、ネルのねまきと着かへ、手燭に火をつけ、ランプの火を消して、床につくのはいつも十一時頃です。

○　尾之道　しらず

妾毎夜十一時に牛乳一合を飮みどんな寒い冬でも浴衣のねまきを着まして母に挨拶致し火をちいさくして寢床につきますが兎角物事を考へて殆ど一時すぎませんと眠られませんから新聞を再び引寄せたり愛讀の女子文壇をも開き見るが妾の毎夜の例です。

○　德島　紫濃子

四季によつて少しはちがふが、十時が打つと必ずねまきと着替へて着て居た着物をたゝんでござに包んで床の下へ敷いておいて又机に向つて日記を書いて、マッチを枕元へ置いて洋燈を消して床につきます。そして今日一日中の朝からあつた事から今ねる時の事まで思つて居るといつとはなしに眠つてしまひます。

○　神戸　白波女

私はいつも六時半に夕飯をすませて九時半まで今日敎はつた事を復習し明日習ふ處もあらかじめしらべて見ますそれがすみますと袴を疊んで机の下に敷き着物も帶も襦袢も共に揃へて枕元に置きます、すると時計が十時をうちますもふ寢む時間がきましたから皆樣に挨拶を致して寢床に就きますこれが毎夜の私の務ですから一晩も怠たつた事はありません。

○　伊豫　渡邊安子

先づ日誌を書き次に寢る時の挨拶をなし床の中に入り其日行ひし有樣をかへり見又明日爲す事を豫期し或友垣の事など思ふ内に夢に入る。

○　滋賀　宇野民子

妾の弟の無邪氣な三才になる秀坊が、何時も妾が學校から歸ると、早や書齋に來て復習の邪魔をするのであります、其れにしても夜になると二人が抱き合て眠ると、可愛らしい鼻の穴からふーふと息して居る、妾は其顏を見るのが何よりのたのしみです。

○　埼玉　高山ふく子

妾は、奥の十疊の座敷に父樣、母樣と一所に寢ます、父樣や母樣は、早寢ですから、妾は毎晩必ず戸締を氣を付け、それから火鉢の火を消して、火の用心がすめば縱縞の單衣物の寢卷を着て、枕元の洋燈を細くし眠りに就きます。

○　岐阜　渡邊露子

妾は安眠する爲め常に就床前廿分位散歩或は室内遊戯をなし其れから兩親に挨拶して床に就くのです、室は勿論妾一人ですから燈は付けず方向は西向、又ねまきは冬なれば縞ネル、此頃は白地の浴衣を着ます、そして妾は床へ入るとすぐに寢るものですから別に考へ事などした事は此れ迄ありません。

○　芝　吉江子

八時打つと兩親に挨拶をして床に入り女子文壇を見ながら眠つてしまうの。

○　本所　すみれ子

慈愛深き在天の神に、お祈をした後、妾の大好きな蘆泉樣の、暖かいふところで唱歌を歌つて頂いて、夫を聞きながら、何の苦もなく、スヤスヤと眠つく見たくつてよ。

○　矢名

父母に挨拶をしてねまきはごく薄ひあかのないのに着變えて火を消しマッチを枕もとへ置き床に就きますもし其の日に解し得ない事なぞが有れば屹度夫れをかんがへます而して南を向てやすみます。

○　東京　とき子

學校かお休になつたので夜は九時過ぐるまでに復習をすませ床に入り女子文壇の讀かけた處を一二行讀む中に眠つてしまうことよ。

○　兵庫　藤田たれ子

須磨の別莊にて毎夜九時に眠るのです夜の衣を被ぎ臥床に横はり樂しき空想にふけり靜なる須磨の浦波を聞きながら眠るのです。

○　長州　村田節子

夜は晝見と定め壁間の時計點々と午後十一時を報ずれば立ちて佛壇のみ前にぬかづき次に亡き母上の小照を拜するを常とすやがてネルのねまきを着替へ火を吹き消しあゝぬば玉の闇の中に萬感を抱いて南向に寢ねぬれば祖父母の君の鼾聲のみ寂寥たる中に高く響きて。

○島根　姫百合

私は大抵十時打つと床を南向に敷き厠に行きそして御寢衣を着て父母上に『御休み遊ばせ』と御挨拶をするのよそれから神棚の火を消し洋燈の火を少し細くして妹と一しように御床に入り御話等をしてると眼が重くなつて何時か前後も知らない樣によく眠ますよ。

○神田　清水露子

イレギユラー的に十二時迄は當見して居ます、すると五分位は心細くもシユー〳〵と睡を促して來ます、其れから机の上や下を整えて廿分許も鐵鈴をカチ〳〵、床に入り消燈、中々眠れません、ツイ彼を思ひ此を案じ又或時は在し昔を恋びて涙の露を枕に宿します彼此するとチン〳〵おしかけなどすまし夕飯を食すと丁度七時頃それから其日の新聞を見て終ると大好のあみものして十時が報ずると直ぐ床をのべ白の筒袖の寢衣と着更へ臥しますそして三十分位は色々の雜誌を枕元に置いて見るのがクセて其内寢氣がさして來ますのでランプを細くし明日の學校へ行く勝手の爲しお菜の考へをしてます最も自炊てすから。

○名古屋市　林田糸子

○徳島　笹川益子

此頃であれば、蚊帳に中へランプを入れて、ベツトの上て、諸新聞を讀む事凡そ二時間、最終にバイブルの、一章を讀みます、夫れから神樣にお祈りをして睡ります。

○松江　達子

まづ床をのべて後着物をぬぎ木綿の寝巻のねまきときかへひろの着物を正しくたゝみて次に火をけして床につくのです、それよりざんじ其日一日の有つた事を思ひ出し南むきに眠るのが常です。

○大阪　白さぎ

私は眠りにつく時は毎日其日にあつた事や今迄あつた事なんかそれ〴〵と考へ出してあゝ兩親があつたら此のたのしい事やかなしい事などあとは胸をかきむしられる樣な氣持ちになつておよそ二三時間程したらいつのまにか眠り入るのです。

○上毛　千鳥子

午後十時が就床時間、先づ机の上を片付けてランプをつけかへ兩親の枕元へおたばこなど置き、火鉢の火を埋めて筒袖のねまきにきかへます、さてこれからが私の第一の樂しみ、亡兄樣の事をいろ〳〵考へるのよ、それこそほんとーの空想に耽つて居りますうちには晝のつかれていつしか白河夜船。

○京橋　維子

私は夜の九時になると仕事を片付け皆と面白く話し其れから日記を認め着物を換へ母樣へ御挨拶をしてのち大好な女子文壇を讀むて十時になると此度床に就きますが淋しくてならないので兄弟姉妹の中一人てもあつたならばと思ひます。

○川越町　S、K、M

私は兄弟は無く一人きりて淋しいから九時に成ると床に入てしまいますが此頃は弱くなりましたから種々前途の事又あの世の人と成り給ひし兄などの事を思出し人知れず枕をぬらします。

○神戸　小羊子

時計が十時を報じますと先づ讀みさしの本なとち、時計を巻き文机に額づき一日の感謝を神にさゝげてさて靜かに安らかに、白いまくらの上に仰向いたまゝ夢に入ります、餘り讀書を過ごしたり、ひどく物感じたり又胸にもだへの有る時はなか〳〵ねむられませんて二時三時を聞くこともまゝ有ります。

○備後市岡　露螢

お恥かしいけれど實際妾は夜に入りさへすれば何やら想ひ浮べて小さい胸が張り裂けるよふて何時寢床を敷いたか何時寢むつたかそれさへ覺へないのが常なのです。

○横濱　千秋子

私は寢床に入つて一時間程勉强するか又は最愛の女子文壇を讀みそれから父母に御挨拶をして床に入つて休みます其後一度も目を覺さないので皆々が寢坊だと云つていつ笑ひます。

○山陽　三宅

私の眠る時は大抵十時頃てして二階へ一人だけてさびしーのよ試験の時からひきつゞいて机を蚊帳の中に入れるの、人が笑ふけれど試験の時には蚊帳の中て本を見たの、あかりはくらくしてれるのです。

○河内　松尾むらさき

妾夏ても冬ても何時も枕元へ洋燈を置いて雜誌か何か讀み〳〵眠るのです、そうてなければ妹にお話をしてやりながら眠るのよ。いつだつたか洋燈をともしたまゝ眠つてしまつて火事をやせかけた事があるのよ。眠ると夢一つ見やしまりんは。

○岩代　石川みどり子

私の寢るのは十時頃て先づ父母の床と私の床を

のべ蚊幮をつり父母は先に休みますから其れより私は日用品を取りかたづけて火を消し戸じまりをなし燈火を稍や暗くし 寢卷を着かへ粗な締め床につき色々考へて居るうちに 知らず〳〵眠ります。

○　兵庫　石原糸子

私の床に付く前は、勉強を濟まして後一時間程家内の者等と庭の床几に腰打ち掛けて、短かき夏の夜の月に凉み、夫から十時が鳴りますとすぐ床をしいて頂き、私は浴衣のつゝ袖のねまきを着て、御兩親樣に挨拶する時と せん時とあります南向けて、床につき一日ありのまゝを 反省して知らず〳〵に夢路に辿ります。

○　越後　やよひ子

妾は十時を打ちますと 床に入りますが直にどうしても睡れませんから枕元へ歴洋燈と 雜誌類等持つて來て眠くなる迄晉見します、ソシテ お母樣にそんな惡い癖は直さなくては いけないつて始終お小言頂戴しますの。

○　磐城　あやめ

朝寢は大好、夜中は疊十枚つづきの 座敷一杯になつてころがつても夢中ですの、皆樣 笑はないて下さい、それだから夜は本讀む隙も 詩文作る時もなく早く〳〵寢て了います。

新課題

衣服に就いて（九月五日〆切）

好きな色合、縞柄、模樣など、現在着て居る衣服の寫眞、理想の衣服、衣服を縫ふ時衣服附屬品、帶、袷、袴、其他いろいろの事、委細は前號

○お小遣（十月五日〆切）

▲甚だ立入つた事を伺ふやうてすが、是が若し直接皆さんにお目にかゝりて聞けば失禮に相違ありませんが雜誌の上て承はるのてすからお許し下さるてせう▲お小づかひとは申す迄もなく皆さんのお小遣ひて、多少入用の無い方はありますまい▲伺ひたひ要點は諸孃のお小遣の金高、支出と收入、一定してお貰ひになる方も入用の時に限り父母からお貰ひになる方もありませう、何を買ふ爲に多くの金をお使ひになるか、費用の細目、使ひ方の心得、父母の敎訓、保管の方法、小遣帳の有無、其外凡て小遣い金に就いていろ〳〵の事▲お金の事だからとて決して卑しいわけはありません謹んて研究すべき問題て是を皆さんから承はりますのも亦皆さんの御參考にもならうかと思ひます▲如何に記者の懷中が何時も冬枯だからと申して諸孃の巾着や銀貨入をねらうやうな事はありませんから何うか御遠慮なく有のまゝ仰つて下さい▲課題はおかげて追々盛んになりますが殆んど沒書いたしませんから皆つて御投書下さい▲半紙に明瞭に七行以內に認め「お小遣」と題を書き國名か縣名だけてよろしい勿論雅號も書くのてす。

○諸孃と記者

○記者樣私も愛讀者てす 不束な寫眞を御目に掛け樣と思ひますがプラチナが宜しう御座いますかアリストが宜しう御座いますか 又全身七分身半身いづれが御都合が宜しう御座いますか 御都覺てすが何卒誌上て御答へ下さい（大阪白萩）（記者曰、お寫眞をお送り下さる由 ありがたう存じます、ナニ別に寫眞に就いては 注文を申上る事もございません、何ても是が御自分に 好いとお思ひのを送つてさへ頂けば澤山てす）○私はある書店から女子文壇を 毎月とつてゐるのてすが會員の 資格がありませうか（水戶上市馬喰町片町二十番地大久保香字子）（記者曰、本社は會員組織てありませんから別に會員の 何のと云ふ事はありません、其代り何處の山奧、田舍のはてても本誌を讀んて下さる方は 皆お友だちてす）○記者樣へ御願が御座います 此後永年愛讀者の一人として御交際下さいまし 私は至ツて淺學なそうして子供の母として 誠に多忙な身てすが孤島に暮して 樂しみの少き者てすから不出來てはありますが何か書て送りますから 文壇へ戴せて頂かれますれば私は何よりのたのしみに 毎朝子の起ぬ間にせッせと 勉强致します（香川縣廣島村柳糸子）（記者曰、 お子さんがおありなさるのに、本誌の愛讀者たり 且投稿家たらうと云ふ御意氣込、誠に感服しました、 女子文壇は極めて範圍が廣いのてすから あなたのやうな方は外にもありませう、何うか御勉强して何か樂みにお作り下さい）○記者樣に一寸毎號賣捌所から買ふて居る者ても投書は許されますか 是非御知らせ被下（北越白蝶）（記者曰無論出來ます）○初めて記者先生御伺ひ致します私は此春四月 裁縫學校卒業致し其後家事に注意しています 其ひま〳〵に近村の或る書店から女子文壇 を購讀していますが投書してもよろしいてしようか 御許し下さるな

ら投書規則書お次號誌上ても宜しいからくはしく御教示を偏に願ひます(但馬養父郡大藪村早崎芳子)(記者曰、何時ても御投書下さい投書規則は毎號本誌の裏のところに詳しく出て居りますから能く御らん下さい)○記者樣に一寸お尋ね致しとう御座います投稿するのは極始めてなので文章を草する事さへ知らぬ田舍者が今度はづかしさも顧みないて眠る時といふ文を實際のおもかげを書きましたが文章と云ふ物は此樣な書き方て好いものかどうぞ敎へて下さい私はまだ雅號がありませんて記者樣からおつけ下さい記者樣からつけて頂くと何だか嬉しい樣に思ひます(和歌山縣高野山福如院內磯村靜子)(記者曰、文章は結構てした、雅號を記者からおつけ申すのも變てす、靜子さんなら靜子さんてもいゝてしう、雅號はほんの符號てすから若し强いておつけにならうと云ふのなら、花の名でもおつけになつたら何うてす、高野山ならいろ〳〵珍しい花も咲いて居るでせう)○記者樣私は一昨年小學校を卒業致しました許りて愚かな者て御座います去年九月より家業の暇々には女子文壇を愛讀して居りますが私もドッかして諸姉上樣方のまねても出來るやうにと思ひまして是からはづかしいのをこらへて投書致しますが少しは上手になれましようか投書用紙は一枚紙を半分にするのですか(ゆい子)(記者曰、お心掛次第で上手になれませう、ゆる〳〵御勉强なさい、投書用紙は一枚ても半枚ても詩文の長短に應じて御勝手、)○記者樣に伺ひます題の名も行の中へ加へて數へるのてすか私は題の名を加へませんてした又寫眞を返して頂く時に郵稅を送らればなりませんか右二ッ何卒お答をれがひます(金澤市新笠町中泉綠)(記者曰、題は數へるに及びません、寫眞返却には別に郵稅をお送りにならずともよろしい)○私は世に哀むべき孤子てございますが今ては情深き伯父の許に歸つて居ますの、どうか末永く御見捨なき事を私も是からは投書致します追〻暑さもかわりました故山家てはありますが避暑方〻御出て下さい元弘時代の古蹟作樂神社佐良山、うなてが森など少しは名所もござひます故御案內致します(岡山縣津山坪井町高谷源二郞方高谷賀爾子)(記者曰、孤子と承はりますと猶更お氣の毒に存じます、世に孤獨の者の慰藉者として文藝が最もよろしい、御地の案內ありがたう二百里外の風光の御案內を受けるのも亦記者の光榮てす)○親愛なる文壇社記者樣早速美麗なる褒狀に賞金迄御送り下さいまして有がたく頂戴致しました略儀乍誌上て御禮申上げますさよなら(羽前小國小林みわ子)(記者曰、慥かに承はりました)○原稿は訂正の上切手さへ送れば返送してもらへますが、寫眞は景色や子供のでも出して下さいますか(小倉敏子)(記者曰、原稿は何んな理由あらうともお返し致しません寫眞は誌友おもかげ以外のものは成るべく珍しいのでないと採用しません)

○暑中見舞の御禮

愛讀者投稿者の諸孃から記者に暑中見舞のお言葉をたまはりまして忝く存じます記者一同幸ひに頑健本誌の發展を編輯に頭をなやまして居ります、併し本年は東京の土用は甚だ凉しく誠に暑いと思ひました日は極く僅かてした、もう秋風が立ち初めましたから凌ぎよくなりませう皆さんも御壯健ておくらし遊ばせ、わざ〳〵御はがき御手紙を下さつた方だけの名を左に

○函館、堺とも子岡あや子さん(繪ハガキの函館海岸鰊漁の景は地方的特色もあり殊に印刷が鮮明で面白く拜見しました○京橋、波良孝子さん(舶來の草花繪ハガキありがたう)○松江、寶豆紀道子さん(松江城大手前の景色、能く分りました)○岐阜、渡邊つゆ子さん(長良川の鵜飼は凉しさうてすね)○在秋、小國敏子さん(繪ハガキは何處てせう、說明がほしかつたてす)○京都、岩淵國子さん○前橋、林ひろ子さん○下總、加藤里さん○丹波、奧村まさ枝さん(以上四人繪ハガキにて)○近江、中島たかさん○香川縣、吉田きくえさん○德島、齋藤菊子さん、笹川益子さん○下關、杉山愛子さん○下關、白菊さん○本所、西村登美子さん○佐賀、小山きん其外の皆さん

○寫直編物造花交換

○諸孃樣何卒御寫眞を贈つて頂戴い御惠み下さるお方には妾の寫眞に美しい畫ハガキを添へてお返し致します(相川小田原齋手代町松本方木村花枝)○栞の交換と寫眞の交換をねがいます御送り下さつた方には私の寫眞にリボンを添えてお返しいたします(愛知縣幡豆郡三和村迁原淺井千賀子)○諸孃樣編物、刺繡、造化、リボン等の交換去て頂戴子、妾去必ず返禮いたします(長野縣下高井郡日野村更科豊田たかの子)○諸姉樣の內て御自分か又は可愛らしき小兒の寫眞か又は栞等と送り下された方には私方にある女學世界已が罪のうた外に小說二三册て御返しいたします但し着順十名限り(三重縣飯南郡宮前堀田派子)○愛讀者諸君繪はがきの交換を願ひます必ずき

れいなるもので直に返事致します又寫眞の交換をも願ひます、送つて下された御方には私の寫眞を返事として差上げます。(岐阜縣武儀郡關町加藤裁縫舍内西村秋子)○皆様お寫眞の交換をして下さいまし先着貳十名に文藝倶樂部を添えて差上ます其外の御方には中京新報を添えて差上ますお寫眞の裏に住所と御名前を記して下さい(尾張中嶋郡奥町野田爽子)○天下の誌友諸姉様何卒妾に葉送つて頂戴なお禮には和歌名所繪葉書一組宛差上ますからきつとれ(紀伊日高郡藤田村吉田阪本六右衛門様方登江)○皆様御變りはございませぬか諸嬢様何とぞ寫眞を御交換を願ひます皆様よりの寫眞、葉、押花等先着より五名を限り私の寫眞へ山口縣風景繪葉書一組(十二枚)を添へて差上ます、何卒速かに御願致します(山口縣玖珂郡廣瀬村村上駒吉方森田翠子)○誌友の皆々様妾と臂つきの交換を致しましようきれは成可く上等物にれそして色合の宜く出き又仕立の宜く出來たお方には失禮乍ら紅葉全集第六卷一部呈し二等のお方は藤村詩集を一部送呈し尙先著十名の御方は別に參拾九年度の新小說心の花の内一部を進呈致します(愛知縣中島郡起町芥子川儀一郎方なつ子)○尙寫眞の交換をなさいませんか、私のは七枚丈先着の方に差上げます繪葉書や圖書交換も喜んで致します(神田三崎町三ノ一星野方大澤さゆり)○諸嬢方よ妾にも御寫眞や地方寫眞や編物などを送つて下さい妾も色々な面白いもので御返し致します先日から左記の所に歸宅しました(佐世保市彌生座横四軒長屋副島方すみれ)○皆様の内にて珍らしき押花乗り送つて下さる御方には美しき繪葉書

て二十名丈け御返事致ます後の方にも必らず御返事は致ますよ(陸中國遠野町一日市若生仲子)○(上總國本納局内林裁縫倶樂部内小川幸子)寫眞交換を乞ふ、返信は妾の寫眞へ上等繪葉書を附す○皆さんお寫眞の交換をねがひます、おはづかしいけれど妾の寫眞昨年(十七)のと今年のと二枚づゝあげます、尙編物なども送つて下されば、必ずお返し申します、妾もたくさん編物類を造いて置きます(茨城縣新治郡高濱町大橋小泉はま子)○御願ですあみ物や繪葉書を御送り下さい妾きつと相當な御禮致し升壹圓以上のあみ物を送て下さつた御方には秋田名產のふきずりを送つて上升(羽後秋田縣仙北郡花舘村花舘二十六番地高橋クメ方村井花子)○五枚以上御送り下さいました方には當地名產の製茶二斤づつ御送り致します御望の方へは美しひつまみ付の寫眞掛御送り致します(靜岡縣小笠郡河城村和田岩堀若方たづ子)○誌友の諸嬢様よ、妾は、風景、名所、美人の寫眞が澤山ありますよ、繪葉書又は寫眞と交換を願ひます、茨城縣稻敷郡岡田村岡見橋本啓次方にて岡田小啓)○過日繪葉書を下さつた方には夫々雜誌で御禮致升たが未だ七部ばかり殘つて居升今度は上等繪葉書三枚以上同封にして送つて頂戴見苦しいけれど妾の寫眞で御返禮致升から(羽前西置賜郡小國町小林みわ子)○諸姉様私も愛讀者の一人ですが寫眞の交換を願たい着の順により面白き品を添ます(大阪東區北桃谷町藤直友一郎方岩井靜子拜)○妾は片田舍に住むふつつかものですが諸嬢さま何卒御寫眞ゑはがきの交換をねがひます(信州木曾上松町中村みづ子)○妾は近頃植物の研究

をして居ますのよ若し皆様の地方にある珍らしい標本がありますならば何卒交換を願ひます否今が採集の好期でありませうから約束だけでも願いますそれから繪端書を送りて下さる方は珍らしき文學ものを差上げます(富山縣中新川郡上段村城川秋子)○皆さん寫眞御送り下さいれば私しが皆様に面會致し度いですよ取まとまつた處でくじ引きをし五名様に私のを差し上ます(羽前南村山郡柏倉門傳村安達久子)○私も妹と愛讀者ですから御交際を願ひます皆様の内で(ツアンになる様は薔又は小切にても御持ちの方は御送り下さいすぐアミモノにて御返禮申上げます(高崎市白銀町岸いそ方白百合)○皆さんの内にハイカラな巾着を御送り下さいませんかさすれば私は「黄菊白菊」、「大紋小紋」、「山水と人物」の内どちらでも御かへし致します、是非に網製のを御ねがひ致します(紀伊海草郡貴志村宇中牧野平三郎方みどり)○愛讀者御姉上様よ御玉章澤山下されありがたう御座いました御手がみ下されても私の方でまだ編物を送らないであるのもありますがそれは少しおまち下さい(府下東葛飾郡行德町澤崎なを子)○誌友の皆様よ葉玉章御寫眞の交換を御願ひ致します先着五名迄は信夫摺のリボン差上ます(岩代信夫郡福島町曾根田四番地高野よれ子)○四つから十一二迄の嬢さん坊さんの寫眞願ひましたら御情厚う送り下された御方もありましたが茲にまた深く御禮申します猶どしどし御送り下さい(芝區巴町二入後藤様内椎野讓子)○諸姉様の御寫眞、葉をお惠み下さいませんか御禮には美しい繪はがきや雜誌で致します、第一着のお方には懸賞文集

も差上ます（大和郡山新中小橋きく子）

○繪葉書交換

○誌友の姉様姿は露西亞製の美しい繪葉書と觀兵式の紀念スタンプの捺したのを僅かに五枚ばかり持て居りますのそれて善い繪葉書て御申込下さい迹い方より差上げます 其外に舶來の繪葉書又は近江八景の珍らしい物て御返し致します亦御自姿の寫眞を御惠み下さいまし姿も必つと差上けます（滋賀縣大津市白國町多田病院内河村壽子）○繪はがき及寫眞新聞などの御交換御願ひ致します（大阪北區西梅ヶ枝町番外二百五十二番下田多鶴子）○皆様エハガキを澤山有がとう、厚くお禮申上升、だが左の方々へは差上て居ませんから其お積て、一、繪端書の余り上等て無い方、二、男子等、次に上野の柳澤たけ子様、小標の岸山たけ子様、消印の爲め住所不明（丹波南桑田郡ちとせ村主原弘子）○交際を願ふ又御文通や繪葉書を交換して下さいな（山梨縣東山梨郡中牧村廣瀨ちか子）○諸姉上様の内にて大觀艦式紀念エハガキ二枚一組繪の方に同紀念スタンプ押捺の姓名記號なきもの御持參なされば袋入にて書留にて御送り下されば戰役紀念エハガキ第五回甲乙丙五枚揃に紀念切手貼用同スタンプ押捺未使用の分と同第一回より第三回まで二十四枚未使用の分並に日韓博覽會紀念スタンプ押捺エハガキ等三十枚書留にて直ちに送ります（韓國釜山大廳町第一銀行社宅生形幾代）○誌友の姉上様繪葉書の交換をして下さいれ最先着様三名様へは當地風景の寫眞中版一枚づゝ次の方々十人様へ京都スタンプ付の繪葉書一枚づつ差上ます（京都木屋町三條上ル清水錦方東花子）○繪葉書玉章の交換を願ひます（鳥取縣西伯郡五十不村大字稲井市村遠藤かめ子）○美しい繪葉書送つて下さい御禮はきつといたしますから（伊勢度會郡山田吹上町阿竹美子）○姿は陸軍大觀兵式の紀念繪葉書甲種乙種（紀念切手にスタンプ付）と同盟國支那艦隊歡迎紀念繪葉書（スタンプ付にて春陽堂發行）と關東洲始政第一週年紀念繪葉書（スタンプ付）等の繪葉書持つて居りますから貴族院より負傷兵に賜はりました紀念繪葉書一組御持ちの方は右何れとても御交換して下さい（神田駿河臺佐々木醫院内沼邊千代）○皆様私の父が大連から持つて歸た繪端書が和洋取交ぜ澤山ありますから切に交換を願ひます（京都諏訪町萬ちう寺上ル橋本はな）○姿は和歌俳句が大すきてす、美麗な繪葉書に俳句和歌を書いて送つて下さい、秀逸十名美麗なるたふた織ハンカケーフに寫眞を添へて御禮します（群馬縣桐生町字下新田一一下山すみ子）○皆様と自繪繪葉書の御交換を願ます（横濱市黄金町四丁目十六番地木村方加藤美枝）○內鮮瑙か優等繪はがきを惠投して下さい即刻答禮します其內最優等の繪はがき送つて、下すつたお方十五名に限り、第五回內國博覽會紀念寫眞を一葉づつ御禮として、さし上げます（兵庫縣氷上郡成松下町二二六秋山靜子）○皆様繪はがき誠に有がとう今日（十一日）迄の分洩れなく御返事致しました盡尙御返禮に預りまして何共恐入ます今後も御交換を（茨城縣潮來町磯山かた野菊）○最も風景のを好みます先着二十名限り姿の寫眞を添へて御返事致します（靜岡縣小笠郡堀之內榮町黑田方中山ふじ子）○誌友の諸姉様繪葉書寫眞の交換を願ます御好みにより天の橋立の景を送ります（丹後天の橋立西岸寺內數枝）○何卒優美高尙なる編物又は繪はがきを送つて下さい、先着五名の方には姿の寫眞、後の五名には舶來繪端書、其後の五名には相當の繪端書を御禮し申します（長野縣下水內郡飯山町興登かれ子）○繪葉書交換を願ひます返禮は即日（横濱內田町郵便局上內條まさ尾）○皆様私も女子文壇愛讀者になりましたから繪葉書交換して被下ませ（品川新宿五拾五鈴木方新妻紫子）○誌友皆さんよ私もふつゝか者てすが何卒御中間入り繪葉書の交換を願ひます（松江市殿町十八番地白石丈子）○誌友諸嬢様地方の寫眞。繪葉書に和歌か新體詩を書て送つて下さい、詩集花守、初潮、七つ星、つき影、其他母親の心得百字文百人評、五月鯉及中判發老瀧八葉、繪葉書にてお返し致します寫眞は中判を尤も望みます（名古屋市蒲燒町登ノ三河合燦子）○私昨年華族會館て開かれた帝國義勇艦隊建設贊助幻燈音樂會にまゐりましたの其の時いたゞいた紀念繪葉書三組ありますから諸嬢の方にて（思出の記か詩集想衣を送つて下ゝつた方の中先着三名順序書に絹製しなりを添へて御送り致します（山梨縣中巨摩郡御影村中島しず子）○上等物繪葉書交換を願ひます、御返しは即日相當のを屹度送ります（尾張國中島郡起町畑由方渡邊羽衣丸女）○何卒繪葉書なり玉章の御交換をして頂戴な大阪に居りますから（大阪市西區薩摩堀北之丁天野平兵衛方森本峯子）○上等物繪葉書交換願いますわ、鐵道五千哩紀念は赤十字と、赤十字は五千哩とも交換してもいゝわ、先着十名様へ懸十種一葉づゝ添へます

わ（尾張國中島郡起町畑由方渡邊馨子）○何卒繪ハガキ玉章交換なして下さい 尙綴物交換を願います寫眞下さる人には私の寫眞 返します（山口縣佐波郡中之關村 久村梅子）○誌友諸姉樣繪はがき玉章の交換をねがひます（福島縣 若松市横音町横田朝子）○諸孃方不束なものですが繪ハガキ交換の お仲間入りをしたいものです（日本橋區瀨戶物町六番地新井盛子）○皆樣寫眞及び繪ハガキを送り下さい 私のも御目にかけます御自筆のなれば殊にうれしく存じ ます（大阪市西區江戶堀北通三丁目一九三 福原千代）○繪ハガキ新聞の交換を願ひます 但新聞二種以上御送り下つた諸孃には御氣發作姿の寫眞か俳句て お禮致します 但先着十五名限り（野後臼杵町安藤貞子）○美術繪はがき交換を望む（美濃國惠那郡遠山村久保原市川覺子）○繪葉書交換 俳句和歌書入れの事望む、俳句秀逸否により返答致す也（横濱市長者町八丁目八二風間方長者はち子）○繪はがき交換を望む必ず自作の 詩歌記載の事（下野那須村大島尋常高小學校內 江面眉葉子）○皆樣にご挨拶に出ましたは今回突然始めてゞす 以來はよろしく御交際偏にお願上ます お寫眞エハガキ編物等のご交換お願ひ（尾道市土堂町 五丁目藤野秋子）○諸姉樣どんなてもよろしくあります故御手紙や美しいゑはがきを下さいれ お返へしはゆめわすれませぬゆゑ（福岡縣朝倉郡 志波村足立奥野）○お姉さま方寒か 繪葉書かを送つて頂戴れ、美しい繪葉書てきつとお禮してよ（河內國南河內郡石川村字大ケ塚今四方 松尾むらさき）○皆樣どうぞ末長き御交りを願ひます 又寫眞、寒、御手紙や、 肉筆か舶來の 繪はがきの交換を願ます。必ず御返し致ます、先着二十名に觀兵式紀念スタンプ附の繪はがき差上げます（横濱市北仲通六ノ八二鈴木英佐保）○皆樣中位の繪葉書に俳句を一つ書いて送つて下さい 今月中に來たのを評を願ふて天地人の方へ己が艸一冊宛上げますよ（長野縣小縣郡神科村六二八 山崎みきを）○愛讀諸姉樣、 妾と繪葉書交換して下さいそして和歌か俳句か書てれ、 相當の 繪葉書にて御返葉致します、玉章も送て下さい、 但し雅號ではこまります、（陸奥八戶十六日町三五 名久井さえ子）○御姉樣 方どうぞ文通 は勿論 繪葉書や地方の新聞の御交換を願ひます 悅て必つと御返事を致します（和歌山市廣瀨中之町貳丁目 河島雛內早川りよう子）○諸姉樣誠に 不束者ですが末長く御交際を願ひます 又繪ハガキ交換及び御文通をねがひます（下谷區上野町 一丁目十五番地有田方伊庭いそ子）○繪はがきの交換をなさる諸君は何時にても一報下されば 二人三人には五千哩スタンプ附を一葉 分配いたします（岐阜縣武儀郡關町加藤裁縫舍內西村秋子）○金澤市新竪町二丁目六番地山田政子、 繪葉書の交換を望む、○繪葉書の交換を望みます。先着三名を限り縱一尺五寸、 横一尺のコロタイプ板 東郷大將の額に海軍紀念日スタンプ付のものを 呈します其他廿名までは凱旋觀兵式スタンプ付 紀念繪葉書未使用のを差し上げます。（福井縣武生町旭山本方白崎薫子） ○諸姉さん私は片田舍のつまらなひものですが何卒御交際して下さい また繪葉書の交換もして頂戴な（上總國長生郡 新治村上太田關庄太郎方關たけ子）○肉筆をのぞきて 極上等ハイカラ式の繪葉書を袋入にして 何も認めずに御送り下されし方には 其枚數價値に應じて雜誌、外國古切手、 外國未使用繪葉書、 外國ポンチ繪、肉筆繪葉書、極上等繪葉書 などの中にて御のぞみの物を御順に差上ます（上野國 群馬郡淸里村木暮喜藤方木暮香園女史）○諸孃に御交際をねがひます 繪葉書の交換も（松江市松江分寶豆紀道子）○皆さん 妾も女子文壇の愛讀者の一人てありますが何卒繪はがき 寫眞御手紙の御交換を願ひます、（本所區松井町一丁目十番地小島直子）○誌友の皆樣繪葉書や 雜誌寫眞の交換の願ひます（千葉縣長生郡新治村桂字小谷林よれ子）○宇都宮の横山きつ子樣あなた たいそう音樂がおすきていらつしやいますつて 私は至て下手なのですよそれて又至て好きなの、 ですからね 隨分色々の唱歌を錄記しましたよ あなたどうぞおもしろいのがおありてしたら 御知らせ下さいな私も精々うつして御送りしますわ（群馬縣 新田郡世良田村津久井總子）○下總印旛郡 臼井町角米錦坂さく子（繪はがきの外地方新聞 雜誌の御交換を仰ぐ）○御姉樣方等本誌（女子文壇）に秀才文壇あるから御のぞみの方は そうとうの價て御ゆづりいたします 又寫眞やしなり下されば一冊差上ます（紀伊東牟婁郡三里村 たき福本支店にて福本かをる子）○皆樣私も繪はがき 交換の御仲間に入れて下さい 御送り下されし皆樣にはきつと御返事申します 又寫眞も御送り下さい御送り下されし御方樣には不肖の寫眞 を御送申上ます（靜岡縣小笠郡平田村上平川 西郷儀作樣方にて杉本しづ子）○私自筆のはがきの 交換をお願ひ申た處誌友の皆樣より續々と 榮事なのをお送り下すつて有がたうご座います、 猶 此後とも

宜敷お交りを望みます（兵庫水木通春田愛子）○妾し親愛なる皆さんに御願ひがありますわ妾大變に給葉書交換に趣味を持つて居る者てすかられ姉様の内で若し同好の人がありますならば何卒御送り被下りませそすれば妾も直ぐ返信しますから（三潴郡鳥飼村大字梅満大隔東中原畝子）○誌友の皆様美しい 給葉書有難う今月も御送り下さい先着のお方六名に女學世界や 種々雜誌を送ります男子の方は一切 おことはり（岡山市東中島町小倉龜織方世寄野）○妾はれ片田舎の學校に居るものてございますがどうぞ 給葉書の交換を願ます（茨城縣新治郡三尋常小學校内 石塚さた子）○私も妹と思召末永く御交り 下さいますやうお願ひ申上ます 又給葉書の交換も （府下荏原郡大崎村居木橋白煉瓦社宅近藤識子）○妾は北信の片隅に住て居る極々田舎者て 誌友の皆さんには初面會てござりますが 何卒御見捨なく御教導あらんことを そして給葉書交換をも願ます（長野縣上水内郡柏原村竹田湖水）○誌友の皆様給はがきの交換を願ひます おかへしはすぐいたしますよ（鹿兒島下龍尾町造山柳子）○誌友の諸顯様、 何卒御手紙や給はがきや 御寫眞の交換を願ます、（千葉縣長生郡新治村桂四百拾七番地小川ふみ子）

○圖書換讀

○私の手許に 懸賞文集家庭顧問、中等國語讀本、參考源平盛衰記、えせ紫、美人の歎、 花紅葉、女學世界、文章世界、少女界、日本の少女、少年、本誌一卷十十一十二號等、七十餘部あります、 給葉書編物、縫物、ムラサキ、婦人世界、女子文壇 等と御交換願ひます（越中魚津近在上村木村 中村正章方きよ子）○皆様のお内で女子養生訓、增註徒然草、伯爵夫人、ハイカラ競等不用の方は 私の高女用外國小史四洋編、同東洋編、京都府管内地誌、應用和文學全、支部帝國史全、小說不思議の姬、金剛盤、闇の世の中、懸賞文集、編物（種々）細菜三十餘等と御交換下さいませんか 編物は種類を詳記してお申越を願升（丹波南桑田郡ちとせ村 主原弘子）○諸姉さま左の書不用てすから 給はがきて申込下さい先着の御方から順に送ります、女子文壇第一卷第八號より第十二號まて 心の花第十卷第四五六七十等、皆さまの御内で銀鈴御持ちの方は私しの不如歸のうたか又は女夫浪のうた金色夜叉とかへて下さい （神戸市兵庫門口町 杉山俊子）○皆様私の千山万水（續）心の泉、すみれ集、玉琴集 雨絲風片、新詩辭典、 小說二筋道後編、懸賞文集、漢和新辭典、作文辭書等有りますが 皆様の内で夏子、己が罪、乳兄弟、紅葉全集の内女子作文作歌辭典言海白百合（雜誌）等不用の方何卒お惠み下さい（大和郡山新中小橋きく子）○田山花袋さんのふる郷と野の花又編物も少しは 持て居りますどふぞ皆様 御交際なれかひます （下總八幡町菅野石渡啓治郞方なてしこ）○私の處に 三十八九年度の女學世界、新小說、其他 御座いますが皆様の中て女子文壇第一卷第一號より 第十一號迄の中何れれかと交換して下さる方は 御ざいませんか（尾張國知多郡龜崎町井口登代子）○私は白蓮白菊、千山萬水、和歌ノ書、春、夏、秋、 冬の部二十世記美文の栞等ありますから、不如歸寬風戀風、未た見ぬ親、無錢旅行、等御持の御方はいづれなりとも御交換 下さいませんか （能登國鹿島郡熊本村金森かのゑ）○皆様の内に思出の記、天地有情、忘れかたみ、渡邊辰五郎氏の 裁縫の本等御持ちの人は私の 女學世界 （三十八年十月より今日迄） 其他と交換又は 相當の價て分けて下さい又栞エハガキ等の交換も ねがいますよ （熊本縣菊池郡加茂川村甲佐町田中いち子）○私は 一人身て淋しい月日を送つて居ります者て 世に私の慰藉者として唯雜誌と詩集と給葉書とのみてす、願はくは諸姉様御送り下さひませ 御禮は相當の和を必ず御返します（名古屋市替地町 百卅八番戸戸田方西村涙子）○諸友の姉様方私の兄は 非常に小說好てありまして 新刊小說必ず求めそして其の讀んだのは大概私に下さいまよ 夏子乳姉妹己が罪二筋道女夫波寬風戀風 金色夜叉伯爵夫人玉蟲朝晴青春ゲーテの詩塔影 ハイネの詩新曲熊野はなれ小島須磨の曲露營の夢など其の他 澤山ありますが私は小說をすきませんから 上等の給葉書を以て御指定下さればなんても 御送り致します（山梨縣中巨摩郡御影村中島りん子）○諸姉様の内に本誌二卷二號、三、四、六、九號 御持ちの方は御送り下さい それ以上の 書籍雜誌にて御返しいたします、 尙御望みの方には色々の珍らしい押花も差上げます成可く早く下名迄（長野縣東筑摩郡入山邊村桐原敏子）

○剽窃詩文の注意

思想界の汚賊、虛榮心の罪人、例の字を冠らせればならぬ剽窃家を左の通り發表します、 是等は今に一括して大痛棒を與へるに容赦しません。

○第拾號の分

▲富山、敏子。　短篇小說秀逸富山敏子の『鳩の墓』は『少女界』四卷十三號の『鳩のお墓』の

剽竊にてなほ此篇は『愛國婦人』に出てし事もあり。

▲橫濱、吉川英子。　はがき文百〇七頁、橫濱吉川英子の『朝顏』は『百字文』一卷二號美文朝顏の玩弄物、函館石川溪舟君の作を剽竊せり。

▲常陸、五月雨女史。　俳句特別二賞 常陸五月雨女史の『門口の……』の句は『橫須賀校友新聞』八號天位、『俳諧雜話風交集』等に出てしものなり。

▲周防、麗子。　新笑話天位 周防麗子の『矛盾』は六月の『大坂朝日新聞』に出たる當世裏表の一項を二三字變へて剽竊せしもの。

▲佐世保、平野すみれ。　新笑話佐世保 平野すみれの『長短』は『少女界』四卷七號の馬鹿と相違なし其他新笑話中千葉石波久女、和泉辻林みどり子の投ぜしものは剽竊の疑ひあり。

○第九號の分

▲駿河、古山秋子。　論文特別第二賞駿河駿東郡片濱村西間門古山秋子の『自然美』は三十九年一月發行『中學文壇』百八十三號黃賞を得たる自然美を全然剽竊せしなり。

▲豐前、百留むら子。　敍事文天賞 豐前中津町片端百留むら子の『里の夕』は大町中內兩文學士合著『少女と山水』中の茶店の娘を其儘剽竊せしなり。

▲陸中、菊地はせ子。　短篇小說入賞 陸中江刺郡野手崎菊地はせ子の『梨の花』は本年四月『萬朝報』懸賞小說一等當選 下谷土屋朝露君の『爽隅川「中」「下」』の全文の剽竊なり。

▲富山、春波女史。　はがき文秀逸富山 春波女史の『監獄の墻壁』は本年一月二十六日『萬朝報』時文小品富田大象君作同題の短文を剽竊せしなり。

▲信濃、君子。　はがき 文信濃君子の『誌上の梅子さん』は『女學世界』六卷五號短文河內田中八須君の誌上の智慧子さんを燒直したるもの。

▲奈良、島田しげ子。　はがき文秀逸 奈良嶋田しげ子の『筍に添へて』は『女學世界』五卷八號端書文麴町はな子の作を剽竊せしなり。

▲さゆり女。　新歌謠地賞 さゆり女の『わしの田舍にや……』は昨年八月『萬朝報』俚謠正調一等に當選せし作の剽竊なり。

▲駿河、古山秋月。　新歌謠駿河 古山秋子の『花の吹雪に……』は『中學文壇』本年二月百八十六號二十六字詩天賞淬村孤葉君の作を剽竊せしもの。

▲豐前、服部秋子。　和歌秀逸豐前 服部秋子の『秋の露硯に……』の一首は『中學世界』增刊三十三年九月『秀才詞林』和歌天賞 三重縣秋山深雄君の作を剽竊せしなり。

▲佐渡、谷川桂月。　和歌四九頁佐渡 谷川桂月の『嶺の月をたゝく……』の一首は『少年世界』二卷十三號和歌天賞松野幹君の作を剽竊せしもの。

○第八號の分

▲讚岐、玉舍女史。　はがき文秀逸讚岐 玉舍女史の『ひばりと董』は 江見水蔭氏著『避暑の友』の中、菫と雲雀の剽竊なり。

▲上總、小河柳子。　和歌地位上總 小河柳子の投ぜしものは『中學世界』八卷七號 短歌選千葉縣鈴木虎月君の作を一二句入れ替へ剽竊せしものなり。

○取消と疑ひ

▲取消。第八條所載秋田縣 松田せい子『ふしぎ』は剽竊なる事前號に發表せし通りなるが右の一文は全く松田せい子の自作にあらざる由本人及び友人より申し來れり然れば何物かの惡戲か。

▲疑ひ。十號の圖稿地賞 阿部とみ子『驛路の黃昏』は舊い雜誌の寫眞版に似たるものありとの注意あり、又橫濱星菫女史は九號に出たる和歌は後に暗合なりとて取消し來りしが『小天地』和歌の剽竊にて五號にも同人が『小天地』和歌の剽竊ある旨注意し來れり。

今回の發表は以上の通りです、扨て右の注意を懇切に認めて寄せられたる警眼なる讀者諸孃の姓名も左に發表して感謝の意を表して置きます

〇印旛湖畔、白百合女史〇越後、愛讀者〇大坂、高橋辰子〇大坂、小玉梅子〇伊勢、竹迺舍〇麴町、美登利〇南多摩、大塚美代子〇大坂、葉夢山人〇越後、岩本芳子〇愛知、野淞梅子〇筑前、ふき子〇豐前、女波〇さゆり〇山口MF〇三浦郡、愚考女〇金澤、中泉綠〇羽前、小國女史〇翠浪〇北陸の百合子〇千葉縣、鈴木園子〇周防、照子女史〇殘月女〇麻布、拾小舟〇秋田、黑丸BN〇羽後、松田せい子〇其他失名者三名。

I finish the school.

A. Indeed! You look about eighteen. Be tall and strong. We can not do anything if we are small and delicate. By the way, you had a small brother, I remember.

B. Yes, he is a big boy now and he goes to the Middle School.

A. This is surprising. Will he be offended if I call him Tetsu Chan?

B. Not in the least. We call him so yet.

A. Is he as naughty as ever?

B. He is, but he is not as talkative as he used to.

A. You were always together when you came to the kindergarten, and I never got tired to talk with your brother. Such a dear little boy he was!

B. May I bring him to call on you?

A. Certainly, I like to see him.

B. What day is most convenient for you?

A. Any day this week in the after-noon. Do come, please.

B. Thank you, we shall not fail to call on you soon.

甲. 成程. 十八位に御見えてす。大く丈夫に御成りなさい. 身體が小く弱くては，何も役に立ちませんから。ソーと. 貴女に弟さんがあつた樣に覺えて居りますが。

乙. 唯(ヘイ). 今では大な子で中學校に參ります。

甲. 此は驚いた. それでは今哲ちやんなどゝ云へば立腹でしようね。

乙. 如何致しまして，皆でそう呼て居ります。

甲. 昔の通り惡戯坊(キカンボウ)ですか?

乙. 先の通りで御座いますが，以前の樣に饒舌でなくなりました。

甲. 御兄弟御二人幼稚園の時は何時も一所でしてね，私は弟子さんと御咄しするに飽きる事はありませんでした. 實に可愛らしい御子でした。

乙. 弟と一所に一度御伺ひ致して宜しう御座いますか。

甲. 何卒御出下さい. 弟さんに御目に懸り度う御座います。

乙. 何曜日が御都合宜しう御座いますか。

甲. 此週なら何日でも午後は宜しい. 是非入來しやい。

乙. 難有う存じます，それでは近々中必ず御伺いたします。

pathway.

を鼓吹する者也。

My Little Friend.

A. Is this my little friend, O Ko Chan, whom I used to see at the kindergarten?

B. Yes, I am and I am very glad to see you. We have been looking forward to you visit ever so long.

A. Thank you. I am delighted to see you, and I can not tell you how happy I am to be once more among my old friends.

B. Why do you look at me so curiously?. Have I greatly changed?

A. Changed? Why, I could not recognize you at first. You were only six years old when I saw you the last, and now you are a young lady.

B. But you have not changed. I could recognize you at once when you came into the room.

A. A grown-up person changes slowly. You have already finished the Girls' High School, I suppose?

B. O no, I am only fifteen and it takes two more years before

我小き友

甲. 此れがよく幼稚園で御逢ひした私の小い御友達の幸ちやんですか。

乙. 然で御座います. 本當に御目に懸るのが嬉しう御座いまして，當地に御越しになるのを先から御待して居ました。

甲. 難有う御座います. 私も貴方に逢へますので嬉しく，又昔の御友達の中へもう一度這入りますのが，何とも云得ない樂みです。

乙. 何故其麼に不思議そうに私の顔を御覽なさるの？非常に替りまして？

甲. 變つて？本當に初は貴女と思ひませんでしたよ。御別れした時は貴女は唯六歳でしたもの. 今は大人に御成りですから。

乙. 併し，貴女は御違ひに成りません. 此部屋に御這入の時，直ぐ分りました。

甲. 大人は變るのが遅いものです。最う高等女學校を御卒業なされたのでしよう？

乙. イヽエ，未だ十五歳で，これから卒業するまで，滿二年かかります。

A few short years ago.

(3) One grain of knowledge,
and that well stored,
Another, and more on them,
And as time rolls on
your mind will shine
With many a garnered gem
Of thought and wisdom ;
and time will tell,
"One thing at a time,
and that done well,"
Is wisdom's proven rule.

綠林閑雅は　去年の夢。

(3) 智慧の一粒
身に收め
日々增し加へ
時經なば
汝の心は
寳藏
思想智識に　滿ち照らん。
世に存らはゞ　知りぬべし
「一時(ナガ)に一事を
勵め」とは。
智慧の掟てにし法律ぞと。

Two Kinds of Girls.

There are two kinds of girls. One is the kind that appears best abroad—the girls that are good for parties, visits, balls, etc., and whose chief delight is in all such things; the other is a kind which appears best at home—the girls that are useful and cheerful in the dining-room, the sick-room, and all the precincts of home. They differ widely in character. One is frequently a torment at home; the other is a blessing. One is a moth, consuming everything about her; the other is a sunbeam, inspiring life and gladness all along her

二種の女兒

世には二種の女子あり．一は家庭外なる社界に彼の最良面を表はすの類にして，即ち饗應の席訪問，舞踏會等には巧妙にして，且つ凡て此等を以て最大快樂と做す者なり。今一種家庭內に其最良面を表はす者にして，即ち食事に於て，或は病室其他家庭の全範圍に於て骨惜みなく快く擧動するの類なり。此兩者品格の大差謂を待たず．一は家庭の苦痛たる屢々にして，他は祝福たり．一は蠧魚にして周圍の物を食ひ破り，他は日光にして彼の行路に堪えず喜樂を與へ活氣

女子文壇第二卷

英　文

津田梅子閲　河井道子述

One at a Time.

(1) One step at a time,
and that well placed,
We reach the grandest
height;
One stroke at a time,
earth's hidden stores
Will slowly come to light;
One seed at a time,
and the forest grows;
One drop at a time
and the river flows
Into the boundless sea.

(2) One word at a time,
and the greatest book
Is written and is read;
One stone at a time,
and a palace rears
Aloft its stately head;
One blow at a time,
and the tree's cleft through,
And a city will stand
where the forest grew

一時に一事

(1) 一歩みづゝ
運びなば
巍峨たる嶺にも
昇りなん,
徐々の一掘
隠れたる
地下の寶を　取出す.
粒々育ちて
森と化し,
滴々集り
河と成り
流るゝ末は　海渺茫。

(2) 一言一句は
大著述
世に顯はる　始めなり
石塊片々　累ならば
大厦高樓
聳え立つ.
一撃一打に
樹々仆れ
賑ふ都は
森の跡

お小供衆のあるお方はぜひお讀み下さい

皆さん學校から歸つたら「少年之友」をごらんなさへ



どなたでも能くできる方には褒美を上げ升

面白く讀んでる中にえらい人になるのは「少年之友」に限り升

(後付の二)

女子家庭の新讀物

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小說美文　朝晴

目次

▲箒木　▲枇杷の實　▲蟬時雨　▲田舍道　▲春のひかり

▲髯そり　▲野性　▲手袋賣　▲江戸川　▲野菊

▲喧嘩停車場　▲春の悲　▲青葉日記（花ぐもり、海酸漿、向の丘、音樂家、惻隱、寂寥）　▲遠潮

彩色挿畫

薔薇　潮の音　詩集　大川端

好評

全一冊新式製本本綴　洋裝密書入頗優雅

（正價四十五錢　郵稅四錢）

特別賣價四拾錢　郵稅不要

三版

女子懸賞文集

全上等紙　四百廿頁　廉價廿五錢　郵稅不要

目次　○短篇小說（廿七）○消息文（三十五）○抒情文（三十）○敍事文（三十二）○論文（十五）○新體詩（廿七）○和歌（三十五）○俳句（四十四）○はがき文（廿八）○圖畫○附錄＝大家文集（七）計十一項…三百〇七題

河井醉茗君著　山中古洞君畫

詩と美文　玉蟲

好評

全一冊新式製本色クロース金箔、色箔入頗優雅

（正價金六拾錢、郵稅六錢）

特別賣價五拾錢　郵稅不要

目次

◎姉妹　◎舞少女　◎笛物語　◎火の性　◎木の葉　◎昔の戀　◎鍬をはじめて　◎哀江頭　◎朝顏の葉　◎紫苑

◎をさな草紙　◎廢城　◎幼き富士　◎詩人村　◎眠らんとして　◎夕暮日記　◎懸想文實　◎手函の薔薇　◎わが家の正月行事　◎海の幸

◎渡りぞめ　◎戀ごもり　◎廢屋　◎天なる戀　◎大和三山　◎故郷の家　◎故國の音樂　◎さゝやき　◎くもり空　◎繪師

◎夕燒　◎天香山　◎春意　◎鶯のゆくへ　◎夜の戸　◎終點まで　◎新年の家　◎愛子の死　◎五尺手拭

◎氷山　◎暗き谷　◎草苅　◎林檎　◎塔下の少女　◎落葉を焚く歌　◎我子　◎いのり　◎玉蟲草紙

◎若葉の家　◎濱名湖物語　◎手紙の端に　◎雨夜の占　◎軍人町　◎狸囃子　◎歳の暮　◎片羽を奪へ　◎駿馬

◎吾行く道　◎幹に刻める　◎冬の日影　◎詩人の家　◎朝餐晩餐　◎茗荷の子　◎吾家の花　◎高野街道　◎晝顏

發兌元　東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社　郵便振替貯金口座番號は壹七貳九番

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○敍事文（各半紙廿四字詰三十行以內）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以內）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　○新躰詩（半紙十句以內）

○和歌（半紙一首）　○新歌謠（全上）　○圖畫（風俗景色一寸の二寸判）

○新派俳句（半紙一句）

○新笑話

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事

但着色無用日本紙の薄きもの

賞與品

（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

○論文○抒情文○敍事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）

一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝每月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○他人の作物を剽竊したる當選文は勿論無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿(同封)取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

定價

女子文壇（每號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）每月一日發行

一冊（大判百頁）	前金拾錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢
十二冊（一年分増刊除ク）	前金壹圓八錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵稅無料

定期增刊

二月十五日　五月十五日　八月十五日　十一月十五日發行

輕便の送金法

☞女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法是は半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます（郵券代用は壹割增）

廣告料金

改正

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

〆切每月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込む紙面なり▲廣告面一行は五號活字廿四字詰、半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年八月廿九日印刷

明治三十九年九月一日發行

無比廉價 金拾錢

不許複載

（二卷第拾貳號）

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約發賣元

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店

東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂

東京市日本橋區呉服町六番地　北隆館合資會社

東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店

東京市京橋區鍋屋町九番地　良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



女子文壇最廉無比定價金拾錢 郵税壹錢申受けず